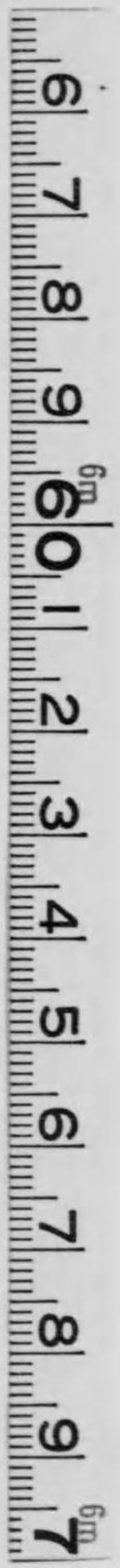


F23
TA73
㊦



始



99



FZ IW-99



LEW-99

F23
A73
(3)



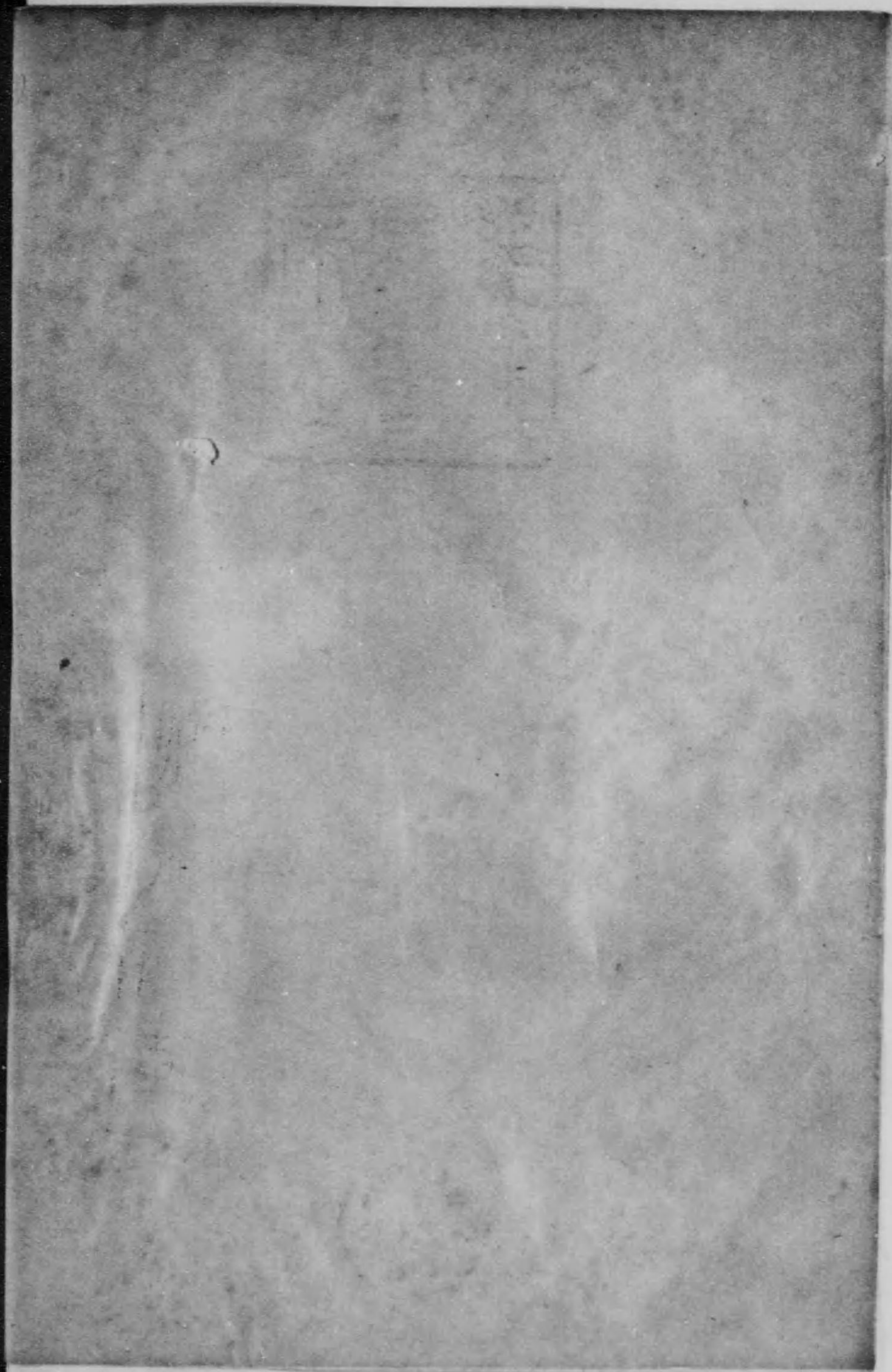
水司

傳記

全書



新築本庫



水滸傳目錄

九編

卷之一	一
双林渡にて燕青雁を射る	一
張順夜金山寺に伏す	一六
卷之二	二一
宋江智をもつて潤州城を取る	二二
盧俊義兵を宣州道に分つ	三〇
宋公明大いに毗陵郡に戦ふ	三二
卷之三	四〇
混江龍太湖にて小く義を結ぶ	四〇
宋公明蘇州にて垓に大いに會す	五五
卷之四	五九
寧海軍にて宋江孝を吊す	五九

卷之五……………七六…九五
 湧金門にて張順神を歸す……………七六
 張順が魂方天定を捉ふ……………八二
 宋江智をもつて寧海軍を取る……………九二
 卷之六……………九六…一三三
 盧俊義兵を歙州道に分つ……………九六
 宋江大いに烏龍嶺に戦ふ……………一〇三
 卷之七……………一四四…一三三
 睦州城に箭鄧元覺を射る……………一四四
 盧俊義大いに昱嶺關に戦ふ……………一五五
 卷之八……………一三三…一四九
 宋公明智をもつて清溪洞を取る……………一三三
 魯智深浙江に座化す(其一)……………一四四
 卷之九……………一五〇…一六九
 魯智深浙江に座化す(其二)……………一五〇

西遊記目録

初編

宋公明錦を着て古郷に歸る……………一五七
 卷之十……………一七〇…一八九
 宋公明の神蓼兒注に聚る……………一七〇
 徽宗帝夢に梁山泊に遊ぶ……………一八三
 卷之一……………一九七…二〇四
 靈根孕育源流出……………一九七
 悟徹菩提眞妙理……………二〇一
 卷之二……………二〇五…二二五
 四海千山皆拱伏……………二〇五
 官封弼馬心何足……………二〇八
 亂蟠桃大聖偷丹……………二一〇
 觀音赴會問原因……………二二三
 九幽十類盡除名……………二〇五
 名註齊天意未寧……………二〇八
 反天宮諸神捉恠……………二一〇
 小聖施威降大聖……………二二三

卷之三

前章之下

八卦爐中逃大聖

我佛造經得極樂

陳光蕊赴任逢災

卷之四

前章之下

老龍王拙計犯天條

前章之下

遊地府太宗還魂

卷之五

前章之下

唐王選僧修大會

陷虎穴金星解厄

心猿歸正

五行山下定心猿

觀音奉旨上長安

江流僧復讎報本

魏丞相遺書託冥吏

進瓜果劉全續配

觀音顯像化金蟬

雙眼嶺伯欽留僧

六賊無踪

卷之六

前章之下

蛇盤山諸神暗佑

觀音院僧謀寶具

卷之七

行者大鬧黑風山

觀音院唐僧脫難

雲棧洞悟空收八戒

黃風嶺唐僧有難

卷之八

護法設莊留大聖

八戒大戰流沙河

三藏不忘本

卷之九

前章之下

二四四

二四五

二四六

二四七

二四八

二四九

二五〇

二五一

二五二

二五三

二五四

二五五

二五六

二五七

二五八

萬壽山大仙留故友 五莊觀行者竊人參.....二七七

鎮元仙趕捉取經僧 孫行者大鬧五莊觀.....二八〇

卷之十.....二八五

孫行者三島求方 觀世音甘泉活樹.....二八五

尸魔三戲唐長老 聖僧恨逐美猴王.....二八六

華果山群猴聚義 黑松林唐僧逢魔.....二八九

二編

脫難江流來國土 承恩八戒轉山林.....二九二

卷之一.....二九七

前編之下回.....二九七

邪魔侵正法 意馬憶心猿.....二九八

豬八戒義釋猴王 孫行者智降妖怪.....三〇四

平頂山功曹傳信 蓮花洞木母逢災.....三一

卷之二.....三二六

外道迷真性 元神助本心.....三二六

魔頭巧算困心猿 大聖騰那騙寶具.....三三二

外道施威欺正性 心猿獲寶伏邪魔.....三三七

卷之三.....三三三

心猿正處諸緣伏 劈破傍門見月明.....三三二

鬼王夜謁唐三藏 悟空神化引嬰兒.....三三五

嬰兒問母知邪正 金木參攸見假真.....三四一

卷之四.....三四七

一粒金丹天上得 三年故主世間生.....三四七

嬰兒戲化禪心亂 猿馬刀歸木母空.....三五五

心猿遭火敗 木母被魔擒.....三五五

卷之五.....三六二

大聖慫恿拜南海 觀音慈善縛紅孩.....三六一

黑河妖孽擒僧去 西洋龍子捉鼉回.....三六八

法身元運逢車力 心正妖邪度眷關.....三七四

卷之六.....三六三

三清觀大聖留名 車遲國猴王顯法.....三七八

外道弄強欺正法 心猿顯聖滅諸邪.....三八八

卷之七.....三九六

聖僧夜阻通天水 金木垂慈救小童.....三九六

魔弄寒風飄大雪 僧思拜佛履層冰.....四〇四

卷之八.....四二二

前章之下回.....四二二

三藏有災沈水宅 觀音救難現魚籃.....四二二

情亂性從因愛慾 神昏心動遇魔頭.....四二四

卷之九.....四二七

前章之下回.....四二七

心猿空用千般計 水火无功難煉磨.....四三二

悟空大鬧金兜洞 如來暗示主人公.....四三七

卷之十.....四四一

前章之下回.....四四一

禪主吞殮懷鬼子 黃婆運水解邪胎.....四四五

三編

卷之一.....四六七

法性西來逢女國 心猿定計脫烟火.....四五七

色邪淫戲唐三藏 性命修持不懷身.....四六三

卷之二.....四六九

神狂誅草寇 道昧放心猿.....四六九

真行者落伽山訴苦 假猴王水簾洞謄文.....四七四

二心攪亂大乾坤 一體難修真寂滅.....四七九

卷之三.....四八五

唐三藏路阻火焰山 孫行者一調芭蕉扇.....四八五

牛魔王罷戰赴華筵 孫行者二調芭蕉扇.....四九〇

豬八戒助力敗魔王 孫行者三調芭蕉扇.....四九五

卷之四	前章之下	五〇一	五〇一
	濼垢洗心唯掃塔	縛魔歸正乃修身	五〇四
	二僧蕩怪鬧龍宮	群聖除邪獲寶貝	五〇〇
卷之五	荆棘嶺悟能努力	木仙菴三藏談詩	五二六
	妖邪假設小雷音寺	四衆皆遭大厄難	五四四
卷之六	諸神逢毒手	彌勒縛妖魔	五三一
	極救陀羅禪性穩	脫離污穢道心清	五三二
	朱紫國唐僧論前世	孫行者施爲三折肱	五四一
卷之七	心主夜間修藥物	君王筵上論妖邪	五四八
	妖魔竇放烟沙火	悟空計盜紫金鈴	五五二
卷之八			五五三
			五七八

行者假名降怪吼	觀音現像伏妖王	五六三
盤絲洞七情迷本	濯垢泉八戒忘形	五六九
情因舊恨生災毒	心主遭魔幸破光	五七三
卷之九		五七九
		五九四
長庚傳報魔頭狠	行者施爲變化能	五七九
心猿鑽透陰陽體	魔王還歸大道真	五八四
心神居舍魔歸性	木母同降怪體真	五八八
卷之十		五九五
		六〇八
群魔欺本性	一體拜真如	五九五
比丘憐子遣陰神	金殿識魔談道德	五九九
尋洞求妖逢老壽	當朝正主教嬰兒	六〇三
四編		
卷之一		六一
		六一九
蛇女育陽求配偶	心猿守主識妖邪	六一

鎮海寺心猿知怪 黑松林三衆尋師.....六二四

卷之二.....六二〇 六三一

蛇女求陽 元神護道.....六二〇

心猿識得丹頭 蛇女還歸本性.....六二四

難滅加持圓大覺 法王成正體天然.....六二七

卷之三.....六三二 六四五

前章の下.....六三二

心猿妬木母 魔王計吞禪.....六三六

木母助威征怪物 金公施法滅妖邪.....六四〇

卷之四.....六四六 六六〇

風仙郡冒天致早 孫大聖勸善施霖.....六四六

禪到玉華施法會 心猿木土授門人.....六五〇

黃獅精虛設釘釘會 金木土計鬪豹頭山.....六五五

卷之五.....六六一 六七〇

師獅授受同歸一 盜道纏禪靜九靈.....六六一

金平府元夜觀燈 依英洞唐僧供狀.....六六五

卷之六.....六七二 六八二

三僧大戰青龍山 四星挾捉犀牛怪.....六七二

給孤園問古談因 天竺國朝王遇化.....六七五

卷之七.....六八三 六九一

四僧宴樂御花園 一怪空懷情慾喜.....六八三

假合形骸擒玉兔 真陰歸正會靈元.....六八七

卷之八.....六九二 七〇二

寇員外喜待高僧 唐長老不貪富貴.....六九二

金酬外護遭魔毒 聖顯幽魂救本原.....六九六

卷之九.....七〇三 七一四

前章之下.....七〇三

猿熟馬馴方脫殼 功成行滿見真如.....七〇六

卷之十.....七一五 七二六

九九數完魔剗盡 三三行滿道歸根.....七二五

西遊記	十四
徑回東土	五聖成真……………
	七二八

挿繪

宋江飛雁の詞を筆す……………	二……………三
張順敵地の水門に忍倚て鈴索を扯きる……………	七二……………七三
盧俊義淮河之月を睥て盃を弄す……………	一七四……………一七五
悟空奪漁父衣入市……………	一九八……………一九九
悟空謁師始願從隨……………	二四二……………二四三
悟空追猪到福陵山……………	二六〇……………二六一
文殊菩薩牧魔去……………	三五〇……………三五一
三藏壇上祈雨……………	三八六……………三八七
羅刹女芭蕉扇悟空搨……………	四八六……………四八七
悟空雲頭討妖怪……………	五五二……………五五三
南極壽星收妖怪歸天上……………	六〇六……………六〇七
悟空等三個空間に在て武藝を展る……………	六五二……………六五三

公主白兔と變じて月宮に去る……………	六九〇……………六九一
白雄尊者經卷を破り棄る……………	七二〇……………七二一
三藏師徒再び雲を起して西天にさる……………	七三二……………七三三

目 録 終

水 滸 傳

九編卷之一



双林渡にて燕青雁を射る

此より嚮に一日宋公明凱陣の途、双林渡といふ處にて天を仰ぎ見るに、數行の寒雁次席を亂し、紛々として空を飛び、都て驚きの模様あり。宋江心中に怪み、夫雁は自ら能く次席に依つて列正しきものなるに、今かくの如く混亂して空を飛び、都て驚くの意あるは、いか様奇異のことなりと、只顧奇みける處に、前軍一同に騒動して奇妙なりと譽ければ、宋江中軍に在つてこれを聞き、早速人を馳せて其事を問はせけるに、浪子燕青初め弓箭を學びし時、空を飛ぶ雁を射るに一箭も空箭なきよしにて、今又試のため空を飛ぶ雁を射て、はや十羽あまり射落したるゆゑ、諸軍これを褒て騒動すと報じければ、宋江聞て大に嘆じ、今數行の雁次席を亂し驚く意ありしゆゑ、我深くこれを怪みけるに、豈知らんや燕青これを射んとはとて、早速燕青を呼びければ、燕青馬を飛ばせて宋江が前に跑來れり。宋

江問うて云、我今汝が雁を射たると聞きけるが、果して此事有るや。燕青答て云、我昔日初めて弓箭を學びし時、空中の飛ぶ雁を射るに、一箭も誤またざりし故、今試に箭を放つて空中の飛雁十餘羽を射落しぬと云ひければ、宋江嘆じて云、弓箭は武夫の知る所なれば、何ぞ必ずしも新めて試んや。我思ふに雁は、もと暑寒の二ツを避て江南の地に至り、初春に又回るなり。夫雁は仁義の禽にして、或は二十或は三十皆相讓て行を列ね、尊者は前にあり卑きものは後にあり。預じめ次序を正して而して後に飛ぶものなり。雄其雌を失ひ雌其雄を失ふごときは、死に至る迄再び配せず。此に依て此禽は仁義禮智信の五常を備へり。此禽空中に於て友を失ふ時は盡く哀鳴す。是則ち仁也。一たび雌、雄を失ふ時は再び配せず、是則ち義なり。次序に依て列をなし飛ぶ時前後を越す、是則ち禮なり。預め暑さの至るを知つて江南に來り、自らよく其難を避る、是則ち智なり。毎年秋は南、冬は北其時に背かずして來往す、是則ち信なり。かくのごとく五常を備へたる物、いかんぞ敢てこれを殺さんや。空中一群の雁相列つて過るは、宛も我輩百八人のごとし。汝今十餘羽の雁を射たるは、我等が内數人を失ふに似たり。其悲み豈よく堪ることを得んや。汝向後自ら改て此のごとき義鳥を害すことなから。燕青此ことを聞いて黙々として言す、大にこれを悔けれ共其益さらにあらざりけり。宋江悲歎の餘り一首の詩を吟じて云く、

山嶺崎嶇水渺茫

横空雁陣兩三行







忽然失却雙飛伴

月冷風清也斷腸

宋江詩を詠じ畢つて益心中に慘み、自ら情を痛ましむ。此夜兵を双林渡の口に屯して、猶心中に燕青が雁を射たることを嘆き、則ち筆を揮て一首の詞を書く。其詞にいはいはく、

楚 天空 濶 雁 離 群 萬里 恍 然 驚 散 自 願 影 下 寒 塘 正 草 枯 沙 淨 水 平 天 遠 寫
不 成 書 只 寄 的 想 思 一 點 暮 日 空 濼 曉 烟 古 壑 訴 不 盡 許 多 哀 怨 一 抹 畫 蘆 花
無 處 宿 嘆 一 何 時 玉 關 重 見 唳 嚙 憂 愁 嗚 咽 恨 江 渚 難 二 留 戀 請 觀 二 他 春 盡 歸 來
畫 梁 雙 燕

宋江詞を書罷て、吳用公孫勝に見せしむ。吳用等詞中の意を見るに、甚だ悲哀憂戚の思ひあり。宋江猶鬱々として樂まざりしかば、此夜吳用等酒宴を設けて宋江を慰め、已に半夜に至つて宴終りける。翌日早天に諸將各馬に乗り、直ちに南を望んで進發す。此時暮冬の天氣にて景物凄凉たりしかば、宋江終道いよゝ憂へを添へ、しきりに感歎已ざりけり。扱勅命を奉はつたる征伐も、無難に功を立て歸京のことを奏し、例に依て兵を陳橋驛に屯し、勅命の降るを待つ處に、黃門侍郎に命じ給ひ、宋江等甲冑を帶しながら參内を御赦免あり。これに依て百八人、戎裝を着し盔を戴き東華門より參内し、直に文德殿に至つて徽宗天子に拜禮し、各萬歳を唱へける。天子は諸英雄が威風凜凜として、相貌堂々たるを見て大に御感悦有つて宣ひけるは、汝等心を用ひ力を盡して敵を破り、疵を蒙りし者

も有るよしを聞き、深く憂へに通りけるに、百八人恙なく功を立て凱陣せしこと古今稀なる勳勞なり。朕甚だ悦びに堪ざるなり。宋江再拜して云、臣等皆陛下の洪福に仍て朝敵を退治せしなれば、諸將傷つく者ありといへども、今各無事に歸京し、天顔を拜し奉つること、實に主上の威徳の致す處、全く臣等が力にあらす。天子此時宋江等が官爵を授けんと欲し給ひて、省院の官と評議ありける處に、太師蔡京樞密童貫兩人齊しく奏して云、今四方に群賊起て天下未だ安んぜず。若し宋江等に大官を授け給はんことは、猶甚だ早し。先づ宋江を以て保義郎帶御器械正受皇城使とし、盧俊義を以て宣武郎帶御器械行營團練使とし、吳用等三十四人を正將軍とし、朱武等七十二人を偏將軍とし、又金銀を賜て勞を賞し給はば、衆皆聖恩に服すべし。天子其議に同じ給ひ、則ち文徳殿に於て宋江等に官を授け、又金銀綬正を恩賞ありければ、宋江は頓首して恩を謝し御殿を退出す。翌日天子錦の袍を一套、金甲一領、名馬一疋これを宋江に賜り、盧俊義以下の諸將にも都て御賜有しかば、宋江等の諸大將大にこれを悦びける。此日猶又文徳殿に於て大に宴を設けしめ、宋江等諸將に御盃を賜ひ、三軍迄も皆賞を蒙りける。宋江以下聖恩を謝し奉つり退出しけるが、次の日公孫勝宋江が營中に至り恭しく申しけるは、日外本師羅真人我に命じて云、汝宋將軍に隨つて功を立て、恙なく東京に回らば、再び歸山して老女を奉養し、且つ道術をも修行せよと再三是を命せり。宋君今日功成名遂給ふ上は、我久しく逗留しがたし、宋君若し暇を給はば、則ち今諸豪傑に別れて山中に歸るべし。願は

くば我心を察し給へ。宋江是を聞て覺えず涙をそぎ、則ち公孫勝に對して云、我昔日諸豪傑と相聚りし時は、花の開くがごとし。今日又相別るゝは花の落つるに似たり。我向に羅真人に見えし時、若し功を立てなば早速公孫先生を還すべしと約諾しけるゆゑ、今更留めんことは難けれ共、いかなぞ別れを忍びんやとて、いよく嗟嘆に堪ざりけり。公孫勝又云、我若し半途にして宋君を棄なば、則ち是寡情ならんか。今日は宋君大功を立て給ひし上なれば、我是を去るとも何の不可なることかあらん。只願はくは宋君曲て我望みを准へ給へ。宋江猶忍びずといへども留めがたく、此日則ち酒宴を設けて公孫勝をむかへ、諸々の豪傑と共に別れを惜み、一盤の金銀を餞に送りける。公孫勝これを謝して終日酒を酌み、翌日未明に旅裝束を調へ、宋江等諸英雄に辭して營中を出でければ、宋江等自から打送て互に涙をそぎ永き別れを嘆きけり。此時正月もはや近くなりしかば、蔡太師を首として諸々の官人共都て朝賀の用意を調へり。蔡太師心中に想道、宋江等百八人の輩都て朝賀に出でなば、天子必ず重く用ひ給はんか、我預かじめ是を遮らんとて、遂に天子に奏聞して詔を降し、只宋江盧俊義兩人に元旦の朝賀を許し、其餘百六人の輩は未だ職事を受けざる自身の者共なれば、朝賀を勤むるに及ばず。是に依つて元旦には御禮を免し給ふ間、參内無用と仰せける。獨り宋江盧俊義は朝賀の用意を調へて、元旦を待請し處に、此日天子朝を設けて百官の朝賀を請給はんとの事なりしかば、宋江盧俊義各公服を着して待漏院に伺候し、百官と共に天子の出御を待ちける處に、天子已に紫宸殿に

出御あり。文武百官の朝賀を請給ふ。宋江盧俊義列に隨ひて天子を拜し、各兩班に跪いて殿に上ること能はず、只首を擡げ殿上を仰ぎ見るに、諸々の文武諸官各觴を稱し壽を獻じ、未明より午の刻に至つて群臣悉く御酒を賜り、各退出したりける。宋江盧俊義裏を出て營中に歸り面上に愁る色あり。吳用等諸大將は宋江が面に愁る色あるを見て、各心中に樂すといへ共、今日は元旦の佳節なればとて、百餘人の輩宋江を拜し賀を稱す。宋江は只頭を低て言す。吳用問うて云く、宋江今日朝賀を務て回り給ひ、何の事有つてかくのごとく憂へ給ふや。宋江嘆じて云、我運命拙きゆゑ遠を破つてより大功を立てられ共、諸將皆職を請けずして尙碌々たる白身なり。唯我と盧俊義のみ小職を受けしか共、未だ算ふるに足らず。是に依つて是を憂ふるなり。吳用が云く、宋江は原來天理を職を受けしか共、何故樂みを忘れて憂へを起し給ふや。善惡吉凶自ら必ず憂へ給ふことなけれ。時に黒旋風李逵進み出て云けるは、宋江何ぞ此のごとく愚になり給ふや。昔日我等梁山泊に在りし時は、上に一人の主あらずして天を怕ず、樂み自から多かりしに、今日は御赦免明日も御赦免とて、唯御赦免のみを願ひ給ひ、今却つて憂へを惹出し、諸人都在鬱悶に逼ること皆自らなす所なり。若し再び此を去て梁山泊に回らば大に樂しからん。宋江罵つて云、汝禽獸又來つて無禮を云や。我今國家の臣となり、何の面目か是に過ぎんや。然るに汝又梁山泊に回らんとは、天命を知らざる愚人なり。重ねてかくのごときことを云ば、我決して免すまじ。李逵打嘆じて云、宋江若し我言を用ひ給はずんば、

後日必ず奸臣等が毒氣を受けて、悔い給ふこと多からん。諸將是を聞いて一笑を催しけり。吳用等まづ酒宴を設けて宋江等を慰め、此夜二更の時に至つて各退出せり。翌日宋江十餘騎を引て城中に入り、宿太尉并に趙樞密が館に至つて正月の佳節を賀し、城中を奔走したりしかば、城中の軍民共群集して見物しけり。蔡太師此事を聞て早速天子に奏聞し、四方の城門に榜文を掛けて、暗に宋江等を禁じて云、城外の營中にある出征の將軍等、安りに城中に入ることなけれ。若し事あらば公文を以て命すべし。擅に城中に入る者あらば、軍令に依つて罪を行はんと、榜の上に書きたりける。宋江は此よしを聞いて益憂を添しかば、諸の豪傑等都て憤り、各反逆の心ありけれ共、只宋江が心を憚りて自らこれを忍びけり。斯る處に水軍の大將等、事を議せんがため吳學究を請ければ、吳用則ち船中に至つて水軍の大將に對面す。李俊、張橫、張順、阮小五、阮小七、皆吳用に對して云、當世の天下朝廷信を失うて奸臣權を握り、擅に賢路を塞で非道を行なふ。此度宋公明反國を退治し、大功を立てたまひしかども、未だ曾て昇進せず。剩へ榜文を掛けて我輩を城中に入らしめず。我思ふに蔡京等四人の奸臣、我等を遠ざけんと圖る。しかじ此勢ひに乗じ、此處を立ち去らば可ならんや。願くば軍師宋公明と議し決斷し給へ。宋公明若し承引無くんば、則ち兵を發し砍て出で立處に東京を打破り、奸臣の首を双べ見んこと何より易し。吳用が云、各の述懐せらるゝ處至極理なり。但し我たとひ宋公明に議したり共、とても承引これあらじ。足下必ず先づ率爾のことをなすべからず。古の語にも

蛇頭なければ行かずと云ことあり。宋公明同心なき處に、我々のみ反逆を企る共、何事をか做出さん。若し宋公明承引あらば、此事を行ふとも少しも誤あらじ。若し宋公明同心なくば此ことを止給へ。六人の大將これを聞いて再び言す、たゞ心中に煩ひける。吳用は再び營中に歸り、宋公明と閑談して云けるは、宋君梁山泊に居給ひし時は、何事も心に稱て諸將も皆樂みけるに、今日御赦免を蒙りて、朝廷の臣となり、却つて奸臣等に妬れ未だ上恩を受けず。是に依つて諸大將忿怒の心あり。宋江是を聞いて心中驚いて云、吳先生は誰と議定してかくのごときことを云ひ給ふや。吳用が云、是則ち諸人の存念なり。書籍にも富と貴きとは人の欲する處、貧きと賤きとは人の惡む所なりと云なれば、我諸人の形を觀色を察して全く其意を知れり。宋江が云、縦ひ今諸將は異心を挾むとも、我は死すとも又忠心を改じとて、翌日宋江再び諸將を集めける處に、大小の頭領等盡く帳前に至つて左右に列座せり。宋江が云、我はもと鄆城縣の小吏にてありしか共、諸豪傑の助けに依つて今日遂に又國家の臣となつて、漸恥を雪たり。世話にも人となるは自在ならず、自在なれば人に成らずといふことあり。今朝廷より榜文を出だして、我々が城中に出入りを禁じ給ふこと尤も理なり。我々は山林に徘徊したる者共なれば都て其性粗し。若し擅に城中に入らば、必ず禍を惹出して罪を被り、又聲名を壞ふべし。我らを禁じて城中に入らしめ給はざること、却つて大なる幸ひなり。汝諸人自ら能くこれを察して恐ることなけれ。若し異心ある者あらば、先づ首を刎て法度を正すべし。必ず誤つて

上を怨ること有るべからず。諸將みな宋江が言を聞いて各涙を垂、一同に誓を立て、退きけり。此日より宋江は曾て城中に入らず、只諸將と會して心を慰る計りなり。漸上元の節も近かりしかば、東京の年例として門々戸々に種々の花燈を懸け、元宵を賞せんと催しける。宋江が營中には浪子燕青暗に樂和と商議して云、今東京には多く花燈を設け、元宵を祝ひ豊年を祈り、今上皇帝民と樂みを同じうし給ひて、洛中洛外甚だ關熱なる催しと聞き及べり。我足下と形を更て城中に紛れ入り、共に花燈を見て回るべし。いざ用意を調へ給へと、兩人已に議を定めし處に、黒旋風李逵進み入つて云、汝兩人花燈を見んと議したること、我老早より是を知れり。いかんぞ我を誘はざるや。燕青が云、汝を誘はんは最易きことなれ共、汝は只禍を好むゆゑ尤も誘引ひがたし。今榜文を掛けて緊しく我門を禁じ給ふにより、城中に出入りすること能はず。汝若し城中に入つて事を惹出さば、非命の死を致すべし。李逵が云、我此度は誓て禍を避べき間共に誘引せよ。燕青が云、已にかくのごとくんば、我肯て汝を誘はん。明日衣巾を換へて旅人の形に出立つべし。我汝と共に城門に紛れ入らん。李逵是を聞て大に悦び、翌日旅人の形に出立ちて燕青を待つ。燕青形を更て旅人の體に出立ち、則ち李逵を引て城門に臨む。此時樂和は時遷と同行して、先達て城中に入りしとなり。燕青は陳橋門よりは入らずして、封丘門よりはや紛れ入り、李逵と共に桑家瓦の近邊に至りける處に、拘欄の内に鐺の響く聲ありしかば、李逵是を聞き何事にやと燕青を引て群人の内に挿入、頭を伸して其内を見るに、一個

の人三國志を講じて諸人に聞かすめ、則ち關雲長が毒箭に中りし處を評判して云、昔日蜀の關羽は左の臂を毒箭を以て射られ、其毒已に骨の内に入りける時、醫士華陀が云、若し此疵を療治せんと欲ひ給はば、先づ銅の柱を立て其上に鐵の鎖をつけて其臂を穿ち、又索を以て牢く柱の上に控り着て其後皮肉を開き、骨二三分を削取、全く毒氣を除て又油線を以て其口を縫外に膏藥を貼て、内に煎藥を用ば、僅か半月の内に平復有るべし。然れども此療治は尋常のことにあらざれば、極めて難しと云けるに、關公はこれを聞て呵々と大に笑ひ、大丈夫は死生を懼す況や一手をや。銅の柱鐵の鎖等を用ふるに及ばず、肉を割骨を削るも少しも苦しからず。汝が心の儘に療治せよとて、常の如く來客と棋をうつて左の手を伸し給ひければ、華陀刀を持つて肉を割、骨を削て毒を取りけるに、關公は面色變せず、只客と棋の手を論じて咲ひ給へりと、未だ云も終らざるに、李逵此話を聞て大に興を催し、覺えず大音聲を揚て、かくのごとき人こそ誠に大丈夫なりと呼ははりしかば、諸人盡く驚いて李逵が面を望み見る。燕青慌忙て云けるは、李公は此處を何等の處と思ふぞや、此拘欄の邊にて人を驚かしむること甚はだ以て無禮なり。李逵が云、關公の箭疵を療治するがごときを、是眞の大丈夫なれば我れ覺えず喝采たり。何の大事か有つて汝これを憚るやと云ければ、燕青急に李逵を引て此處を立去り、わづか二三條の街を過ぎけるに、一人の漢子石を飛ばし瓦を投て酒店の内に打ち入れければ、酒店の主大に怒て曰、汝飽まで我店の酒肉を噉て價を償はず、却つて我家を打つは傍若無人の所爲なりと

て只顧に争ひける。李逵是を聞て忽ち彼漢子を白眼、汝何ぞ弱者を欺いて無禮をなすや。彼漢子が云、我前年彼に銀を借けれ共猶いまだ是を還さず。此所以に酒食の價を償ざるに、汝何の干ることか有つて我を罵るや。我は近日張招討に隨つて江南の地に出陣す。我彼地に至りなば、必定討死して屍を戰場に晒すべし。若し今此所にて汝と併命ば、却つてよく棺槨の内に入ることあらん。汝早く來つて對手になれとて狂ひければ、李逵是を聞て大に怒り、汝何ぞ僞言を云や、今張招討とやらんが江南に出陣することは世間に會て其沙汰あらず。汝必ず我を赫すことなかれとて兩人各拳を握り、已に打ち合はんとせし處に、燕青中に入つて兩人の者を諫め、遂に李逵を引て此を過ぎ行き、一軒の茶肆に入つて主の老翁に問けるは、今前面にて争ひをなしたる漢子、近日張招討と云者に隨つて江南に出陣すと云けるが、果して此事ありや。老翁答て云、貴客知らずや、今江南には強賊方臘八州二十五縣を奪ひ、則ち睦州より起つて直に潤州に至り、自ら號して一國とし、近々來つて揚州を攻むるよし其沙汰専らなり。是に因て朝廷、張招討劉都督兩人を差向、方臘を打たしめ給ふとなり。燕青李逵此事を聞て、急ぎ茶坊をいで、直ちに營中に回りに軍師吳用に斯と訴へければ、吳用は此消息を聞きて暗に悦び、則ち宋江に對して云、此度方臘を征伐あらんが爲、朝廷より張招討劉都督を江南に差向け給ふよし、其隠れあらざるなり。宋江是を聞て云、我人馬久しく閑居してこゝに在ること甚だ宜しからず。しかし宿太尉に内意を訴て、天子に奏聞あらしめ、此度の討手には我門發向すべし。しらす

諸將の存念はいかん。諸大將大に悦んで云、宋君の尊命誰かあへて違んやと、衆皆其議に同じけり。翌日宋江燕青を引て城門に至り、公用有るよしを告て城中に入り、直に宿太尉が館に來りて宿太尉にまみえければ、太尉先づ問うて云、將軍彌恙がなきや。宋江答て云、今榜文を掛けて堅く某らを禁じ給ふゆゑ、事なくては城中に入らず。太尉の尊顔を拜することもまれなる間、常に是を憂るのみ。今日貴館に來ること餘の儀にあらす。今江南の方臘多くの州郡を奪ひ、自ら年號を立て近々に來つて楊州を討たんと圖るよし、其聞こえ専らなり。某ら人馬久しく閑居して營中にあること甚だ以て不可なり。我敢て軍馬を領し馳向ひ忠を盡し力を竭し、一戰を勵さんには、願くは太尉宜しく奏聞を遂給へ。宿太尉是を聞て大いに悦び、將軍の存念我意に合へり。是則ち國家の福ひなれば、我宜しく奏聞を遂ぐべき間、今日は先づ歸り給へ。宋江是を謝して再び營中へ回り、諸將に斯と告にける。扱も宿太尉は翌日早朝參内しける處に、文武百官披香殿に於て天子に見え、都て方臘がことを評議して云、方臘今八州二十五縣を奪つて自ら位に即、近々又楊州を犯さんと圖る。誠に天下の騷動此事たるべしと、百官一同に奏聞す。天子是を叙聞有つて宣はく、逆賊方臘を征伐せんことは、朕已に張招討劉光世に命せり。近々吉日を擇で出陣させしめん。汝百官若し良計あらば速かに奏聞せよ。時に宿太尉進み出で奏しけるは、臣愚意を以てこれを思ふに、彼賊已に八州を奪つて勢ひ浩大なれば、又かの遼を退治し田虎王慶を平げし勳功の大將宋江等を以て、張招討劉光世に相副、是を前部として敵を討

たしめ給は、必ず大功を立つべし。天子是を聞き給ひて大に御感悦あり。汝が云ふ處朕が意に合へり。急ぎ宋江等を召べしと宣は、省院官勅命を奉はり、頓て宋江盧俊義兩人を引き披香殿の下に至る。天子宋江を見給ひて御悦び斜ならず。則ち宋江を封じて平南都總管とし、盧俊義を封じて平南副總官とし、各金帶一條錦袍一套、金甲一領、名馬一騎、綵緞二十五疋を賜はり、其餘の正將軍偏將軍にも、各金銀綵緞を賜ひ、若し功を立てなば各官爵を加へ給はんとの御事なり。已に日限を定め給ひしかば、宋江盧俊義勅命を奉はつて天子に謝し奉つる。天子又宣はく、汝等が内に在る、能く玉印を鑄金大堅といふ者と、能く良馬を識たる皇甫端と云者とを、朝廷に留めて是を用ひん。汝明日此兩人を獻すべし。宋江盧俊義慎んで領承し、遂に朝廷を出て心中に甚だ悦び、急ぎ營中に回りて諸將を集め、勅命の趣き委細に語りしかば、諸頭領都て大悦し各々用意を調へけり。宋江翌日金大堅皇甫端を朝廷に送り、其餘の頭領共は一人も残さず軍中に携へ、共に發向せんと議定せし處に、蔡太師使者を以て聖手書生蕭讓を求む。王太尉は又鐵叫子樂和が能く歌を唱ことを聞き及んで、類りにこれを求む。宋江辭すること能はずして又此兩人を送り、總て五人頭領を減じければ、宋江心中樂ます只願是を嘆けり。扱彼江南の方臘は原歙州の山中に棲し樵夫なりけるが、一日水中に臨んで己が形を看し所に、頭に平天冠を戴て身に袞龍袍を着したる形移りしかば、此より謀叛を企て軍馬を聚め、則ち清溪縣のうら幫源洞の中に、寶殿内苑宮闕を造り、睦州歙州にも又宮殿等を全く建、文

武百官盡く兼備り、誠に由々敷き次第なり。方臘が得たる彼の八州は則ち、歙州、睦州、杭州、蘇州、常州、湖州、宣州、潤州等の地なり。彼の二十五縣は此八州の内に入り。今方臘が有つ處の國は遼の國よりも猶大に廣くして、軍馬も又多かりけり。去程に宋江は用意を調へて東京を打ち出でければ、宿太尉趙樞密自ら送つて三軍を賞しける。水軍の大將等も兵船を揃へ、泗水より淮河に入つて淮安を望み、盡く揚州に會合す。宋江盧俊義各宿太尉樞密趙氏に謝して相別れ、兵を五隊に分て進發し、直ちに揚州を望んで馳たりける。前軍は既に淮安に至つて兵を屯しける。知縣宴を設け宋江を待受、則ち城中に迎へて慇懃に饗應し、方臘が賊勢浩大にして輕々しく敵しがたきことを語つて云、前受は則ち揚子大江九千三百餘里直に大海に通ず。是こそ江南第一の要害なり。江を渡れば則ち潤州なり。今方臘が手下の樞密呂師囊、竝に十二人の統制官堅く江岸を守る。若し潤州を取ずんば方臘が大軍に敵し難からん。宋江是を聞て軍師吳用と商議して云、前面に大江有つて路を攔る、いかゞして是を渡らんや。向に遼を攻めし時は陸路なる故、水軍の頭領は曾て功を建ざりし。此度江南へ渡らんには、すべからく水軍を用ふべし。吳用が云、揚子江の内金山焦山とて二ツの山有り。都て潤州の城郭に連なれり。先づ數輩の頭領を遣はして、彼の地の動靜を伺はせ、何等の船を用ひて江をわたらば可ならんや。豫じめ分明に是を知り、其後宜しく計を議定せん。宋江しかりと同じ、則ち水陸の諸大將を聚めて問ひけるは、汝諸將の内誰かあへて先づ敵地に赴き、具しく動靜を窺ひて回らんや。時

に四人の大將進み出て、某ら敢て馳せ行かんと一同に答へける。宋江此四人をみるに、一人は小旋風柴進、一人は浪裡白跳張順、一人は棄命三郎石秀、一人は活閻羅阮小七なり。宋江大に悦び汝四人二手に分るべし。張順は柴進と一處に行き、阮小七は石秀と一處に行き、直ちに金焦兩山に至つて旅宿を求め、潤州の虛實一々詳かに窺ひて揚州に回り、委細に消息を報べし。四人の者命を承はり、各兩人の僕を從へて旅人の體に出で立ち、遂に宋江に辭し先づ揚州に至れり。此時この邊の百姓等は、宋の大軍至るよしを聞きて、盡く村中を避、途中の人家には一人の男女もあらざりけり。柴進と張順は兩人の僕を引き、瓜州を望んで進發す。石秀阮小七も同じく兩人の僕を從へ、焦山を望んで馳せ行きける。抑此九千三百里の揚子大江は遠く三江を接へり。一ツは漢陽江、一ツは海陽江、一ツは揚子江なり。則ち四川より直に大海に至る。此江の内許多の所に通じけるゆる萬里江と云なり。地は吳と楚とに分つて、江の内に兩座の山あり。一座は金山一座は焦山と云、金山の上一座の寺あり。山を繞せ建けるゆる、これを寺裏山といふ。焦山の上にも一座の寺あり。山の凹に藏れて形見えざる故、是を山裏寺と云ふ。此二ツの山もと江中に生じ楚を尾とし吳を首とす。一方は浙西潤州今の鎮江是なり。扱張順柴進は北固山の下を望み見るに、都て青白兩色の旗號を建、岸邊には許多の兵船を繋ぎ、河北の岸上には唯一本の旗も見えずして一個の人もあらず。柴進が云、瓜州の路上には家ありといへ共人あらず、又渡し船も見えざるに、いかんぞ能く敵地の虛實を窺はんやと、頗るあぐみて立ち

たりけり。

張順夜金山寺に伏す

此時張順柴進に對して云、先づ空屋の内に入つて歇給へ、我自ら水を越えて金山の下に行き、宜しく動靜を窺て回るべし。柴進聞て大に悦び、四人ひとしく江邊に至り、一軒の草屋の内に入つて、人やあると伺ひける處に、竈の邊より老婆出來りしかば、張順問て云、老婆汝が家には何ゆゑ人なきや。老婆答て云、今宋朝より大軍を馳て方臘と戦ひ給ふよし、其風聞有りけるゆゑ、此所に住居する人家盡く他處に逃去ぬ。此家の者ども都て他方に落ち行き、唯一人を留て家を守らしむ。張順が云、我門四人は江を渡らんと欲す、知らず何れの處に船有るや。老婆が云、此節は一艘の船も有るまじ。前日呂師囊宋兵の至るを聞て、此處の船ども盡く奪取て潤州に漕しめけり。張順が云、我門は自ら糧を携たり。汝此家を我らに借て二三日逗留あらしめんや。木賃は重く與ふべし。老婆が云、家を借んは易けれども、床等もあらざれば事極めて不自由なり。張順が云、旅中に在つて何ぞ此らのことを嫌はんや。老婆又云、恐らくは近日宋の大軍至るべし。其節は貴客甚だ難儀ならん。張順が云、若し大軍至らば我自らは是を避ん、汝恐るゝことなかれとて、柴進三人を呼んで内に入れ、暫らく休息して點心を用ひ、張順再び江邊に至つて江内の風景を見るに、金山寺は江のまん中にあり。張順心に想ふやう、潤州の呂樞密時々此山に來つて巡見することあらん。我先づ今宵水を越えて金山の下に

至り、消息を窺て回るべしとて、再び草家に來つて柴進に告げるは、江邊には唯一艘の小船もあらず。此體にては敵の動靜を伺はんこと甚だ以て難し。我今宵衣服を頭に戴き、金銀を腰につけ、水を越えて金山寺に行き、賄賂を衆僧に送つて敵の動靜を窺ひ、はやく回て宋公明に消息を報すべし。柴公は此處に在つて待ち給へ。柴進其言を聞て可なりと同じければ、張順已に用意を調へて再び江邊に至るに、此夜星月明らかに風濶靜にして水天一色なり。張順衣服を脱て頭に戴き金銀を取つて腰に挿り、猶一挺の刀を帶し水中に飛び入り、直に江心に赴きける。張順原來水練の達人なれば、水の勢ひ自ら開け、張順を済すことなし。張順水中に在つて陸路を走るがごとく、已に金山の下に至つて、石峯の邊を見るに、一艘の小船纜でありければ、張順頓て船の上に跳乗、頭に戴いたる衣服を取つてこれ着し、暫く船の上に座しける處に、潤州城に三更の鐘響きける。張順此時首を擡げ、上流を望みみるに、一艘の小船漕來る。張順心中に怪み、此船必ず敵の哨なるべし。急に此處を避行んとて、船の上を見れば櫓も棹もなき纜舟なれば、舟を動かすこと能はずして、再び衣服を脱て江中に跳入、水の内に淬して彼船の邊に近づき、暗に船の上を見けるに、兩人の水手有つて只管北の邊に漕來る。張順水中にて刀を拔、暗に船傍に倚て彼兩人の者を砍んとせし處に、彼水手これをみて急に水中に飛び入りける。張順早くも彼船に跳上り、船を漕開かんとせし時、船の内より又兩人の漢子走り出でけるを、張順急に一人の漢子を水中に砍籠ければ、彼一人の漢子大に驚き、再び船の内に走

り入る。張順罵つて云、汝は何れより來りぬるや、真直に告げ知らせば汝を饒さん。彼漢子跪いて云、某は揚州城外定浦村と云ふ處に、陳將士と云ふ者の家人なり。今主命を奉て潤州にゆき、呂樞密に糧糧五萬石を獻上せんと願ひしかば、樞密是を悦び、則ち一人の虞候を某に跟て定浦村に馳せ、糧五萬石と船三百艘とを索しむ。これに依つて今此處に至れり。張順が云、其虞候が姓名はいかん。今何れに在るや。彼漢子が云、今豪傑の殺し給ひぬる漢子は則ち虞候なり。姓名は葉貴と申す。張順又問うて云、汝が姓名は如何、何れの時江を渡りたるや。船中には又何等の物ありや。彼漢子が云、某が姓名は吳成と申し、今年正月七日に江を渡りぬ。此度我輩呂樞密の命を承はり、蘇州に馳せて則ち御弟三大王に陳將士が存念を訴へしかば、三大王是を悦び其褒美として旗三百面衣一千領、此二色を陳將士に賜はる。今則ち船中に積り。願はくは豪傑某が一命を免し給へ。張順又問うて云、汝が主人の手下には幾ばくの人馬ありや。吳成が云、總て數千の人馬あり。又兩人の男子を持けるが皆豪傑の譽あり。嫡男が名は陳益、二男が名は陳泰と申す。張順委細に聞き刀を揮て彼の吳成を水中に秋て落し、頓て船を漕て瓜州に回り、即ち柴進を呼んで事の次第一々詳かに語り、彼三百面の旗一千領の衣、盡く船の内より取出だして、二擔の荷に作らしめ、張順又舟を漕ぎ出して再び金山の下に至り、猶具しく動靜を窺ひて、彼纜船の上に置きし衣服を取つてこれを着し、又瓜州に回りしかば天色已に白みけり。張順遂に岸に上り、二三兩の銀を彼の老婆に送り、兩人の僕に旗衣等の二荷

の擔を挑せ、急ぎ揚州に回りける。此時宋江が軍馬は都て揚州の城下に屯せり。揚州の官人共酒宴を設けて宋公明を城中に邀へ、毎日慰勸に管待、三軍に至る迄一々酒食を賞しける。扱柴進張順は揚州に回て宋江にまみえ、彼陳將士が方臘に組し、近日賊兵を導て江を渡り、揚州城を攻しめんと圖ること始終詳かに訴へ、又江中にて吳成を殺して旗衣等を得たること具しく語りければ、宋江大に悦び、則ち吳用を請て計を商議す。吳用が云、既に此機會ある上は、潤州を取らんこと掌を反すよりも易し。先づ陳將士だに捉へなば、大事立處に成んぬべし。計は此のごとし此の如しと低言しかば、宋公明これを聞て、軍師の言我意に合へり。去來計を調へんと、浪子燕青を虞候葉貴が形に出立せ、解寶を南軍の形に出立たせ、定浦村の路徑を問はしむ。解珍は擔を挑ひ、燕青に従ひ、總て三人揚州を出で、直ちに定浦村に馳せ、城より四十餘里離れて、早くも陳將士が家を望む。門前に二十三人の軍士一様に裝束して奔走す。此時燕青浙人の郷談を用ひて、彼軍士等に問うて云、陳將士が館は此屋なるや。軍士等が云、貴客は何れの處より來り給ふや。燕青が云、我は潤州より來れり。軍士等是を聞て便ち燕青を客廳に導き、陳將士に斯と告げれば、將士頓て出て燕青に對面して問ひけるは、足下は何れの處より來れるや。燕青下拜して云、左右の人を退け給は、我敢て來意を告げん。陳將士が云、左右は都て我心服の者なれば少しも妨なし、汝早く來意を告げ候へ。燕青詐て云、某は葉貴と申者にして、呂樞密が幕下の虞候なり。正月七日に相公の使者吳成と某と、呂樞密の命を承て蘇州に

馳せ、相公の存念を三大王に訴ければ、三大王是を悦んで上に奏聞ありける處に、上より仰には相公を封じて揚州の府尹とし、兩人の息男は呂樞密相見るの上にて、官爵を定め給はんとの御事なり。吳成をも回し給はんと仰せなりしが共、想はず病に犯されて回ること能はず、猶樞密府に留まされり。今上より褒美として、旗三百面衣一千領を賜はる。相公も又急ぎ彼糧を潤州城迄送り給へ。必ず延引し給ことなかれ。陳將士是を聞て大に悦び、陳益陳泰を呼び出して燕青に遇しむ。燕青が云、某は則ち小卒なり。豈敢て相公と同座せんや。陳將士が云、汝は呂樞密の使者なれば、我等父子が珍客なり。何を慇懃の事を云や。燕青再拜して座を定めけり。猶燕青解珍兄弟がなす所、いかゞの計有るや次巻を見て知るべし。

此卷に王太尉とばかり書ては聞こえがたからん。驢馬王晋卿と云ふ人なり。

九編卷之二

宋江智をもつて潤州城を取る

偕も陳將士は頓て酒肉を具へて燕青に勸め、兩人の息も同座に在て酒を酌、盃數遍巡りける處に、燕青暗に解寶を見て目眩したりければ、兄弟の者其意を曉り、解寶急にかの蒙汗薬を取出して人目を欺き、則ち酒壺の内に入れて、そらさぬ體にもてなしけり。燕青これを見て自ら座をたち、恭しく頓首して云けるは、某今日暫く先づ相公の酒を假て、此回の吉左右を賀し奉らんとて、彼酒を取て大鐘に斟、これを捧げて陳將士に勸めければ、陳將士盃を接へて飲乾、陳益陳泰にも各一盃を飲しめける。其外座間にあらし家人等にも、燕青一向勸めて各大觴にて飲しめけり。燕青又解珍を視たりしかば、解珍心中に點頭、外面に走り出、遂に相圖の炮を放ちける。此時又十人の頭領は來て消息を待居る處に、相圖の炮を聞一同に馳集る。燕青は客廳に在て、陳將士父子并に家人共都て倒れけるを見て大に冷笑ひ、汝等毒酒を飲たるぞ愚なりとて、解寶と共に刀を抜て一々頭を刎落しぬ。門外忽ち騒動して十人の頭領欲て入喊き叫で跑回る。此十人の頭領は花和尚魯智深、行者武松、九紋龍史進、病關索楊雄、黑旋風李逵、八臂那吒項充、飛天大聖李袞、喪門神鮑旭、錦豹子楊林、病大

蟲薛永等なり。家内の軍士共豈能く敵することを得ん、皆彼所に走り此に逃る。門外に亦復一彪の人馬
 寄來り、六人の大將先眞に進む。これ則ち美髯公朱同、急先鋒索超、沒羽箭張清、混世魔王樊瑞、打
 虎將李忠、小霸王周通等なり。此時六人の大將一千の軍馬を引て、館を重々に取圍み、一家の眷族一
 人も漏さず盡く殺害せり。諸將皆浦の邊に來て此處をみるに、四五艘の船に兵糧を積でありしかば、
 諸軍是を奪て宋公明に報ず。宋公明此ことを聞て大に悦び、則ち吳用と商議して計已に定りしかば、
 頓て張招討に別れて兵を領し、自ら陳將士が館に發向して、前軍の手分せんと議定し、二百の兵船に
 張順が奪取し彼三百の旗を立て、又一千の兵に彼奪取りし衣を着せしめて船に乗せ、猶二萬有餘の兵
 を船艙の内に藏し、又穆弘を陳益が形に出立せ、李俊を陳泰が形に出立せ、各一艘の大船に乗しめ
 て、其餘の船どもには又それ々の將に命じて分ち掌しむ。第一番の船は穆弘李俊掌り。二十人の
 副將相從ふ。其人々は項充、李袞、鮑旭、薛永、楊林、杜遷、宋萬、鄒淵、鄒潤、石勇を穆弘に屬
 し、童威、童猛、孔明、孔亮、鄭天壽、李立、李雲、施恩、白勝、陶宗旺を李俊に屬す。第二番の船
 は張橫張順掌り。四人の副將相從ふ。曹正、杜興、龔旺、丁得孫なり。第三番の船は十人の
 大將掌り。兩船に相別り。其人々は史進、雷橫、楊雄、劉唐、蔡慶、張清、李逵、解珍、解
 寶、柴進なり。三百艘の舟に乗じ、頭領四十二人なり。其次に又宋江等若干の兵船に馬甲等を積、
 遊龍飛鯨等の船一千艘に、宋朝の先鋒宋公明が旗號を立て、玩小二玩小五是を司て三軍を催促す。

宋公明は中軍の船に在て江を渡る。爰に又潤州の北固山の上には、呂樞密が哨の者有て水面を望み見
 るに、三百艘の舟方臘が旗號を立て、一行に漕來りしかば、哨の者これを見て呂樞密に斯と訴へける
 に、呂樞密頓て十二人の統制官を從へ、自ら人馬を領し直ちに江邊に至て望見るに、前面に進し百艘
 の舟、先づ岸に傍て漕來る。船の上に兩人の大將あり。其外の者共は盡く前後左右に相從ふ。呂樞
 密、馬より下登に座しければ、十二人の統制官、兩邊に立並んで江岸を守る。穆弘李俊は呂樞密、
 江岸の上に座したるを見て、船中より禮を行ひしかば、一人の虞候走り出で、穆弘等が船を三行に備
 へしむ。百艘は中にあり。百艘は左にあり。百艘は右にあり。此時又一人の客帳司、來て船に乗り、
 汝等が此船は何れの地より來れるやと問ければ、穆弘答へて云く、某は是れ姓は陳名は益、弟が名は
 泰と申。父陳將士が命を受けて、米五萬石、船三百艘、兵五千、是を樞密相公に獻じて、寸心を表はす。
 願くは足下これを報じ給へ。客帳司が云く、前日樞密相公、葉虞候を遣し給ひぬるに、何故今日は見
 えざるや。穆弘が云く、虞候は吳成と共に病を得て床に臥、此度は來ること能ず。只某らのみ伺候
 せりとて、則ち文書を呈しければ、客帳司文書を取て岸に上り、則ち呂樞密に告て云く、楊州定浦村
 の陳將士が息陳益陳泰、約諾せし處の糧五萬石、船三百艘、兵五千、これを相公に獻すとて則ち文
 書を呈しければ、呂樞密、文書を見て陳益兄弟を呼ければ、穆弘李俊并に二十人の副將一同に岸に上
 る。軍士共呼て云く、樞密相公此處に居給ふ間、閑雜の者は近く來ることなかれと再三制しける。二

十人の副將共是を聞いて先傍に立住る。穆弘李俊恭しく身を躬て良久しく待し處に、客帳司來て兩人の者を呂樞密が前に導しかば、樞密問て云く、汝が父陳將士は何故に自ら來らざるや。穆弘が云く、父陳將士は宋江が人馬の來るを聞いて自ら村を守り、擅に遠出致さるなり。呂樞密又問て云く、汝兄弟曾て武藝を學びたりや。穆弘が云く、某兄弟頗る武藝を曉せども算ふるには足す。呂樞密又問て云く、兵糧は船に何程づつ積けるや。穆弘が云く、大船一艘には三百石を積、小船には一百石づつを積り。呂樞密が云く、汝兩人曾て別心なきや。穆弘が云く、某父子一片の忠心あるが故參れり。豈敢て別意あらんや。呂樞密が云く、汝父子が忠心は我元より知りしか共、汝が船中の軍士等が模様、太だ用心の體に見えて更に疑はし、汝二人は我方に留るべし。我今四人の統制官に百人の軍士を添て船中を捜さしめん。若し別に物あらば我決して汝を免すまじ。穆弘が云く、我々は唯重く用ひられんとこそ願ふなるに、何ゆゑ疑を起し給ふやと、いまだ云も了らざるに、一人の軍士來て詔 到着せりと報じければ、呂樞密急に馬に乗り、諸軍に命じ江岸を守らしめ、陳益兄弟は我に隨て來るべしとて、南門を望んで馳行ける。此時李俊は後へを回看て招きければ、二十人の副將共一度に従ひ來つて城の南門に入らんとせしに、門を守る軍士共相遮て云く、相公の仰には陳益兄弟のみ入しめよとの御事なり。汝等諸軍安りに入べからずと、頻りに遮りしかば、只穆弘李俊兩人のみ城内に入て、其餘は都て城の外に控へたり。扱呂樞密は城の南門の外にて、方臘が勅使を迎へ便ち問て云く、天使何故太

だ忙しく至り給ふや。天使馮喜答て云く、前日司天監浦文英、奏して云く、夜天象を觀に若干の星吳の地に入れり。是に依て禍ひ大いならんとの事なるゆゑ、天子詔を降し給ひ、いよく相公をして堅く江岸を守らしめ給ふ。若し北邊より來る者あらば、緊しく查を加へ給へ。其形他に異なる者あらば早速是を誅し、禍を除き給へ、これ則ち肝要なり。呂樞密是を聞て大に駭き、陳益兄弟が動靜太だ疑しき處に、今此左右有こそ不思議なれ。先づ城中に入て詔を讀しめんとて、遂に勅使を引て城中に入、已に詔書を讀居ける處に、又蘇州より御弟三大王の使者、忙はしく至て報じけるは、前日楊州の陳將士が降參と申せしは恐らくは詐あらん。全く信すべからず。頃日司天監天象を觀ける處に、星吳の地に入たるとなれば、必ず禍ひあるべし。先緊しく江岸を守らせ、用心を加へ候こと肝心なり。呂樞密是を聞て云けるは、大王も又此ことを以て心に懸給ふなれば、是定て尋常の大事にあらし。彌以て守らしめんと、早速三軍に命じ緊しく江岸を守せ、船の上の人唯一人も岸上にあらせず、急ぎ勅使を響應したりけり。三百艘の船の上に登りけるに、南軍共是を攔ること能ずして、おめくと消息もあらざりしかば、盡く皆岸の上に登りけるに、南軍共是を攔ること能ずして、おめくと上らせたり。此時黒旋風李達は、解珍解寶と共に城門の邊に至りければ、軍士ども頻に攔へんとせし處に、李達二ツの斧を揮て先づ兩人の軍士を砍殺し、猶東西に跑て狂しかば、城中の諸士一同に騒動す。解珍兄弟も各軍器を揮て砍立てければ、城兵等は城戸を閉ること能ず、右往左往に逆にけり。彼

の二十人の副將等も、各軍器を揮て四面八方に馳廻り、軍士どもを散々に砍拂ふ。呂樞密は江岸を守らしめんとせし處に、城門已に破れ騒動すと聞しかば、十二人の統制官に多く人馬を與へて、城門の邊に差越ける處に、史進柴進はや三百艘の船なる埋伏の軍士共を引て急に岸に上り、諸人喊き叫んで城内に砍て入り、首たる兩人の統制沈剛、潘文得、潘文得は張横に殺され、宋の雄兵勢ひに乗じ、中々宋の兵を退くること能ず、沈剛は史進に殺され、潘文得は張横に殺され、宋の雄兵勢ひに乗じ、城門の内に亂れ入り、各功を争て相働く。城内には猶十人の統制官有て、暫く攔りしか共遂に防くこと能ず、衆皆私宅に逃去ける。穆弘李俊は城中に在て此消息を聞き、頓て方々に火を放ければ、呂樞密是を見て大に驚き、只六人の統制と共に先づ火を救はんと圖り、急に人馬を引て打出ぬ。此時、城の四門には宋の兵已に攻入て散々に相戦ふ。良久しくして後、城の上に宋先鋒の旗號嚴密に建並べ、喊の聲は天地も崩るゝばかりなり。かゝる處に江北の方に五百艘の兵船着岸して、一二十千の人馬はや岸の上にあがり、真先に二十人の大將、轡を並べ、一同に馳來る。是則ち關勝、呼延灼、花榮、秦明、郝思文、宣贊、單廷珪、韓滔、彭玘、魏定國等の大將なり。宋の兵總て城中に砍て入り、各勇奮て緊しく打しかば、呂樞密手を措に及ず、戦ひに利を失ひ、僅の敗兵を引て丹徒縣に奔りける。宋の大軍は已に潤州を奪取つて、牢く城門を分ち守り、諸將各江邊に出でて宋公明を相迎ふ。宋公明は遊龍飛鯨等の船に旗號を建列ね、遂に江を渡りて岸に上り、諸將と共に城中に入り、懇に民を撫、先

づ兵を城内に屯しぬ。此時諸大將各中軍に至て功を献す。劉唐は沈澤が首を献す。孔明孔亮は卓萬里を活捉、項充李袞は和童を活捉、郝思文は徐統を射殺せり。又亂軍の内にて四人の統制官を活捉て、同じ二人の統制官を殺しぬ。其外打取し所の首其數を知るべからず。宋江又親方の諸大將を數るに、此日流矢に中つて死したる者都て三人あり。一人は雲裡金剛宋萬、一人は没面目焦挺、一人は九尾龜陶宗旺なり。宋江已に三人の副將を失うて心中甚だうれへ、只鬱々として樂す。吳用諫て云く、死生の二ツは、原來命中に定る處なれば、憂とするに足らず。今三人の副將を失ひしといへ共、十二人の敵將は生捉討取一人も残さず、呂樞密逃延たれ共江南第一要害の州を得たるは、是莫大の福ひなり。何ぞ必ずしも自ら憂に、尊體を傷ひ給はんや。先づ宜しく嘆きを休て大事を議論し給へ。宋江が云く、我輩百八人は上天星に應じて並に梁山泊に聚り、各義を結て兄弟の盟を約し、其後も又五臺山の知真長老の前に於て、同死同生の誓ひをなして遠からざるに、豈知らんや公孫勝は故山に回リ、金大聖皇甫端は朝廷に留り、蕭讓は蔡太師が家に留り、樂和は王大尉が家に留り、今日又三人の副將を失へり。況んや宋萬は當初多く心力を盡し、山陣を開し者なれば、未だ大功は立ざるといへ共、梁山泊に於ては其辛苦他に超たり。我豈是を歎かざらんやとて、早速に三軍に命じ宋萬が死したる處に臺を設けしめ、種々の祭物を供へ宋江自らは是を祭り、彼生捕し處の敵將を臺の前に引出してこれを殺害し、則ち其首を位牌の前に供へける。已にして宋江は捷軍のことを張招討に報じ、且人馬の息を歇せ

けり。扱て彼呂樞密は兵過半討取れ、僅の兵を引て丹徒縣に退き、急に文書を修へ蘇州の三大王方貌が方に危急のよしを訴へ、援兵を求めんと催しける處に、元帥刑政兵を引て丹徒縣に至りしかば、呂樞密これを迎へて大に悦び、則ち宋江等が計に陥たることを詳に語りける。刑政が云く、前日晝星吳の地に入て、親方の爲に凶多きが故に、三大王某に兵を與へて江南を守らしめ給ふ處に、果して城中に變出來し、相公己に城を乗取れ給ひしこと甚以て恨みなり。某不肖たりといへ共相公の仇を報はん、相公も力を併せて戰を助け給へとて、翌日刑元帥人馬を引て丹徒縣を打出、直ちに潤州を望で攻來る。去程に宋江は潤州城に在て、吳用等と議を定め、童威童猛に二百餘人を與へて焦山の下に遣し、則ち石秀阮小七兩人を潤州に誘はしめ、又五千の人馬を發して丹徒縣を攻さしむ。其大將には關勝、林冲、秦明、呼延灼、董平、徐寧、朱同、索超、楊志、此十人の豪傑なり。已にして關勝等は五千の軍馬を領して、はや潤州城を發し、直ちに丹徒縣を望で急ぎける。此時刑元帥が人馬は漸此邊に至り、遂に宋の兵と適遇て軍勢を對し、互に喊の聲を合せ鼓を鳴し、敵味方の諸大將各先を争ひて陣前に馳出る。方臘が軍中より刑元帥當先に進み出、六人の統制を左右に従しむ。大宋の陣中には關勝これを見て一番に馳出、彼青龍刀を舞し直に刑元帥に相向ふ。刑元帥も鎗を撚て關勝に搦蒐り、各勇を奮て二十餘合戦ひし處に、關勝精神益盛にして、遂に刑政を馬より下に砍て落し、頓て首を刎にけり。呼延灼親方に利あるを見て、大に三軍を進め直ちに敵軍の内に突入り、喊

き叫んで攻戰ふ。刑元帥の兵士皆逃散しかば、今は力及す總軍南の方へ引退く。呂樞密は親方の敗北したるを見て、丹徒縣を走り出、敗軍少々引率し常州縣へと落行けり。關勝等十人の大將は、丹徒縣を奪て捷軍のことを、宋先鋒に達しければ、宋江大軍を引て丹徒縣に至り、早速人を馳て軍の次第を中軍に訴へ、乃ち張招討を請て潤州を守らしむ。翌日張招討多く賜を以て丹徒縣に送りしかば、宋江是を得て、則ち三軍を賞しけり。

按ずるに此處水滸傳百回本九十一回に、刑元帥左右に六人の統制を従へるとあり。呂樞密に十二人の統制有て、此度の軍に討殘さる處の如く書り。然るに潤州を守る呂樞密が部下なる八十二神將に象るなり。其首たる二人は擎天神福州の沈剛は史進討取たり。同斷游奕神歙州の潘文得は張横これを殺す。巨靈神杭州の沈澤は劉唐討取たり。豹尾神江州の和潼は項充李袞討取たり。黃旗神潤州の卓萬里は、孔明孔亮生捕たり。六丁神明州の徐統は郝思文射取たり。是迄六人なり。通甲神陸州の應明、霹靂神越州の張近仁、太白神湖州の趙毅、太歲神宣州の高可立、弔客神常州の范疇、喪門神蘇州の沈抃、六人ある内亂軍の中にて四人生捕二人討取よしあれば、十二人は殘なし。然共左右六人の統制とは何か誤有るべし。しかれども後に六人の名有時は、亂軍の内に統制官四人を生捉二人を討取といふに誤り有にや。常州の軍の所に六人の姓名出たるを見合べし。

盧俊義兵を宣州道に分つ

翌日又宋江は、盧俊義を請て軍事を議しけるが、今宣州湖州の地も、方臘これを奪て守ると聞り。速に撃ずんば有べからず。我盧先鋒と兵を分て兩路より推寄べし。最も闇を拈つて其當る所に發向せば、可ならんとて闇を取けるに、宋江は常州、蘇州に取あたり、盧俊義は宣州湖州に取當りたり。宋江即時裴宣に命じ、諸大將の身分を定めしむ。此時青面獸楊志は病に犯され、出陣すること能はず、獨丹徒縣に留つて病を保養す。其餘の諸豪傑は盡く皆出陣す。又宋江に隨て常州蘇州に馳向ふ人々に、正將十三人、偏將二十九人、總て四十二人なり。

正將先鋒使保義宋江

軍師智多星 吳用

撲天鵬 李應

大刀關勝

小李廣花榮

霹靂火秦明

金鎗手徐寧

美髯公朱仝

花和尚魯智深

行者武松

九紋龍史進

黑旋風李逵

神行太保戴宗

偏將鎮三山黃信

病尉遲孫立

井木犴郝思文

醜郡馬宣贊

百勝將韓滔

天目將彭玘

混世魔王樊瑞

鐵笛仙馬麟

錦毛虎燕順

八臂那吒項充

飛天大聖李袞

喪門神鮑旭

矮脚虎王英

一丈青扈三娘

錦豹子楊林

金眼彪施恩

鬼臉兒杜興

毛頭星孔明

獨火星孔亮

轟天雷凌振

鐵臂膊蔡福

一枝花蔡慶

金毛犬段景住

通臂猿猴健

神算子蔣敬

神醫安道全

險道神郁保四

鐵扇子宋清

鐵面孔目裴宣

神醫安道全

宋江を首として總て四十二人の正將、偏將、共に三萬の精兵を引て、南の方常蘇等の地に進發す。盧俊義も又諸將を引て、宣湖の二ヶ所に發向す。相從ふ人々には正將十四人、偏將三十三人、總て四十七人なり。

正將副先鋒玉麒麟盧俊義

軍師神機朱武

小旋風柴進

豹子頭林冲

双鎗將董平

双鞭將呼延灼

急先鋒索超

沒遮欄穆弘

病關索楊雄

插翅虎雷橫

兩頭蛇解珍

双尾蝎解寶

沒羽箭張清

赤髮鬼劉唐

浪子燕青

神火將魏定國

小温侯呂方

偏將聖水將軍廷珪

神火將魏定國

小温侯呂方

賽仁貴郭盛

摩雲金翅歐鵬

火眼狻猊鄧飛

打虎將李忠

小霸王周通

跳涧虎陳達

白花蛇楊春

病大蟲薛永

摸 <small>も</small> 着 <small>ちやく</small> 天 <small>てん</small> 杜 <small>と</small> 遷 <small>せん</small>	小 <small>せう</small> 遮 <small>しや</small> 欄 <small>らん</small> 穆 <small>むく</small> 春 <small>しゆん</small>	出 <small>しゅつ</small> 林 <small>りん</small> 龍 <small>りゆう</small> 鄒 <small>そう</small> 淵 <small>えん</small>	獨 <small>どく</small> 角 <small>かく</small> 龍 <small>りゆう</small> 鄒 <small>そう</small> 淵 <small>えん</small>
催 <small>さい</small> 命 <small>めい</small> 判 <small>はん</small> 官 <small>くわん</small> 李 <small>り</small> 立 <small>りつ</small>	青 <small>せい</small> 眼 <small>がん</small> 虎 <small>こ</small> 李 <small>り</small> 雲 <small>うん</small>	石 <small>せき</small> 將 <small>しやう</small> 軍 <small>ぐん</small> 石 <small>せき</small> 勇 <small>ゆう</small>	早 <small>さん</small> 地 <small>ち</small> 忽 <small>こつ</small> 律 <small>りつ</small> 朱 <small>しゆ</small> 貴 <small>き</small>
笑 <small>せう</small> 面 <small>めん</small> 虎 <small>こ</small> 朱 <small>しゆ</small> 富 <small>ふ</small>	小 <small>せう</small> 尉 <small>うゐ</small> 遲 <small>ち</small> 孫 <small>そん</small> 新 <small>しん</small>	母 <small>は</small> 大 <small>だい</small> 蟲 <small>ちゆう</small> 顧 <small>こ</small> 大 <small>だい</small> 嫂 <small>さう</small>	榮 <small>えい</small> 園 <small>えん</small> 子 <small>し</small> 張 <small>ちやう</small> 青 <small>せい</small>
母 <small>は</small> 夜 <small>や</small> 又 <small>また</small> 孫 <small>そん</small> 二 <small>に</small> 娘 <small>にやう</small>	白 <small>はく</small> 面 <small>めん</small> 郎 <small>らう</small> 君 <small>くん</small> 鄭 <small>てい</small> 天 <small>てん</small> 壽 <small>じゆう</small>	金 <small>きん</small> 錢 <small>せん</small> 豹 <small>ひょう</small> 子 <small>し</small> 湯 <small>たう</small> 隆 <small>りゆう</small>	操 <small>さう</small> 刀 <small>たう</small> 鬼 <small>き</small> 曹 <small>さう</small> 正 <small>せい</small>
白 <small>はく</small> 日 <small>じつ</small> 鼠 <small>そ</small> 白 <small>はく</small> 勝 <small>しやう</small>	花 <small>はな</small> 頂 <small>てい</small> 虎 <small>こ</small> 龔 <small>くわん</small> 旺 <small>わう</small>	中 <small>ちゆう</small> 箭 <small>せん</small> 虎 <small>こ</small> 丁 <small>てい</small> 得 <small>とく</small> 孫 <small>そん</small>	霍 <small>くわく</small> 閃 <small>せん</small> 婆 <small>は</small> 王 <small>わう</small> 定 <small>てい</small> 六 <small>りく</small>
鼓 <small>こ</small> 上 <small>じやう</small> 蚤 <small>そう</small> 時 <small>じ</small> 遷 <small>せん</small>			

盧俊義を首として、都て四十七人の正偏兩將共に三萬の精兵を領して、南の方宜湖等の地に進發す。宋江又江陰太倉等の地を攻べしとて、水軍の大將等に水軍五千を與へ發向せしむ。此人々には正將七人偏將三人總て十人なり。

乘命三郎石秀	混江龍李俊	船火兒張橫
浪裡白跳張順	立地太歲阮小二	短命二郎阮小五
出洞蛟童威	翻江蜃童猛	玉廬干孟康
		活閻羅阮小七

水軍の大將總て十人、五千の水軍を引て百艘の兵船に乗り、直に江陰太倉等の地に發向す。此時水陸の諸大將各思ひく粧束して、花やかに出立しかば、見る人これを感せざるはなかりけり。

宋公明大に毗陵郡に戰ふ

方臘が帳下の樞密呂師囊は、六人の統制官を引て常州の毗陵郡に退きける。抑此常州に原來錢振鵬と云ふ者在て城を守る。手下に兩人の副將あり。一人は晉陵縣上濠の者、姓は金名は節と號す。一人は錢振鵬が心服の者、姓は許名は定と號す。此錢振鵬が由來を尋るに、原清溪縣の都頭なりけるが、中比方臘に歸順して、屢軍功を立直ちに昇進して常州の制使となり、兩人の副將とも堅固に城を守り、偏に方臘を助けける。此時錢振鵬は呂樞密が戰に打負て、潤州を失ひしと聞、甚だ是を驚き居る處に、一人の軍士來て錢振鵬にまみえ、呂樞密潤州を落て此處に至り給ふと告げれば、錢振鵬、急ぎ城門を開て呂樞密を迎へし處に、呂樞密戰の次第を語て計を議しけるに、錢振鵬が云く、樞密相公心を安んじ給へ、某不才たりといへども、上天子の洪福を托み、下樞密の虎威を頼み、宋の兵を立處に追拂ひて再び潤州を取復し、宋江が輩に江南の威勢を見せしむべし。呂樞密大に悦て云く、足下もし肯て此のごとく心を用ひ力を盡し給はば、何ぞ我國安からざらんや。若敵を追散して再び潤州を得ば、我又人馬を催し堅く籠城し、重ねて敵來る共少しも犯ること有まじ。足下彌功を立て給はば、我早速天子に奏聞し足下の勳功を吹嘘せんに、怎ぞ昇進なからんや、必ず忠を盡して國家の恩を報じ給へ。錢振鵬是を聞て甚だ悦び、頓て酒宴を設けて呂樞密を款待けり。扱又宋先鋒は人馬を分て、常蘇の二箇所を攻んと、先毗陵郡を望で馳來る。當先に進む人々には、關勝、秦明、徐寧、黃信、孫立、郝思文、宣贊、韓滔、彭玘、馬麟、燕順等の十一將なり。總て三千の人馬を引いて急ぎける

程に、早毗陵郡を打過て直に常州の城下に至り、頻りに攻鼓を鳴して戦を挑ける。呂樞密是を聞て、誰かあへて彼を追散さんやと左右を見ける處に、錢振鵬聞もあへず、某力を盡し彼等を擒とせんに、何の難きことあらんと、馬を飛し鎗を撚て跑出る。呂樞密又六人の統制官を出し戦をたすけしむ。是則ち應明、張近仁、趙毅、沈抃、高可立、范疇等の六將なり。總て五千の軍馬を引て城門の外に打出けり。錢振鵬先づ諸軍に下知して陣勢を列ねしめ、六人の統制官を左右に従、自ら敵陣を望みみるに、關勝當先に進み青龍刀を横へ大音を揚て罵りけるは、汝反賊狼りに生靈を傷ひ、天理に背く惡徒等、猶其罪を知らずして宋朝に敵せんとするは、自ら死を招く道理なり。我若盡く誅戮せずんば、誓て此處を立去まじ。錢振鵬是を聞て大に怒り、汝らは原梁山泊の盜賊にて、只人を剝ことを而已業として、天の時をしらす。故に王業を圖らずして、宋朝の道なき君に降參し、擅に我大國を犯さんと欲するは、天命を憚ざる愚人なり。我自ら汝等を殺して潤州を取復さん。必ず走ること勿れと、鎗を撚つて跑来りけるに、關勝大に怒り彼青龍刀を舞して相迎へ、兩將互に勇を奮て平生の武藝を勵み、一往一來秘術を盡して戦ひしかば、敵親方これを見て誠に希有の勇士らかなと、感せざるはなかりけり。漸五十餘合戦ひし處に、錢振鵬氣力已に疲れ殆んど危くみえしかば、兩人の統制官趙毅范疇一同に馳出て、關勝に擲いてかゝる。宋の軍中にもこれを見て、同く兩人の副將黃信孫立軍器を揮て突出て、直ちに統制官等を迎へ鋒を交へ、六人の大將三對に成て相戦ふ。呂樞密は許定金節等を出して

戦を助けしむ。兩人の者命を受て陣前に馳出て、暫く馬を勒へて戦の體を見るに、趙毅は黃信と戦ひ、范疇は孫立と戦ふ。各相劣らぬ勇士にて、雌雄未だ決せざりし處に、戦ひ已に六十餘合に至り、趙毅范疇齊しく疲れ、鎗法はや亂れしかば、許定金節各刀を舞して砍て出る。宋の陣中よりは、韓滔彭玘馬を並べて跳け出で、直ちに敵の兩將を迎へて鋒を交ふ。金節は韓滔と戦ひ許定は彭玘と戦ふ。金節は素より宋朝に歸順の心有けるゆゑに、味方の陣勢を亂さんと欲し、故意二三合戦ひて本陣に逃ければ、韓滔勢に乘じ追來る。南軍の陣中には高可立これを見て、急に弓箭を撚り、宛も満月の如く拽て兵と放ちければ、其矢韓滔が喉に中て馬より下に眞倒に落たりける。秦明は陣中より此體を見て大に驚き、急に韓滔を救はんと欲し、早速馬を飛せ跑出しか共、張近仁早くも刀を揮て韓滔が首を刎にけり。彭玘と韓滔とは元來莫逆の友なりしかば、彭玘は韓滔が討れたるを見て大に怒り、我此仇を報はずんば有べからずとて、遂に許定を捨て高可立を相尋ぬ。許定は唯一圖に功を立んと欲し、猶彭玘が後へに隨て追來る。秦明これを見て、許定を迎へ相戦ふ。高可立は彭玘が追來るを見て、再び馬を引かへし直に彭玘を迎へ、はや五六合戦ひし處に、張近仁横合より馳來て、彭玘が脇の下を突ければ、彭玘忽ち馬より落て死しにけり。關勝は兩人の副將を討せて大に怒り、青龍刀を高く擧て錢振鵬を砍て落し、頓て首を刎んとせし處に、關勝が乗たる赤兔馬、石に跌て前足を折きければ、關勝馬より下に眞倒に落たりけり。高可立張近仁是を見て一同に跑来つて、關勝を左右より夾て已に

討取んとしける處に、徐寧、宣贊、郝思文三騎を並べて馳來り、遂に關勝を助けて本陣に回りける。呂樞密は親方勝利を得たるを見て、自ら城外に突て出で、三軍に下知して緊しく擊せしかば、關勝等大に敗れて北の方に逃走る。南軍共は勝に乗じて二十餘里追來り、宋兵許多討取て、各大に勇みけり。關勝は敗軍を引て本陣に回り、韓滔、彭玘兩人が討れたること委しく宋江に告げければ、宋江甚だ哭して云く、誰かしらん江を渡て以來已に五人の豪傑を失へり。恐らくは上天宋江を惡みたまひ、方臘を助け給ふ故にして、數輩の副將を討せ若干の人馬を失ひぬ。我何を以て此悲みを除んやとて自ら心を痛めけり。吳用諫て云く、宋君何故深く歎き給ふや。戦ひの勝負は兵家の常にして、死生は命中に定る處なれば、未だ歎くに足す。韓滔、彭玘今日に至て戰場に死せしこと、最も惜むべしといへ共、是又武夫の本望なれば却て快し。宋君先心を安じ給ひて、敵を敗るべき計を議し給へと、未だ云も終らざるに、黑旋風、李逵、高聲に呼つて云く、韓滔、彭玘を殺したる賊は、諸將定て是を識認給ふらん、もし我に教て其面を見せしめ給は、我立處に頭を砍て兩人が仇を報ふべしと、牙を咬齒を切て怒りけり。宋江が云く、我明日白旗を持て自ら三軍を率し、直ちに城下に至て勝負を決せん。各用意を調へ候得とて、此夜は先歇ける。翌日宋江三軍を引いて水陸より並び進む。諸の大將等もことごとく陣を拂つて打出けり。黑旋風、李逵は哨の爲として、鮑旭、項充、李袞等と俱に五百の歩軍を領し、先達て常州の城下に馳向ふ。此時呂樞密は錢振鵬を討せて心中に憂ひ、即日文書を修へて、使者

を蘇州に馳、合戦の次第一々詳に述て、三大王方貌に訴へ急に援兵を求めける。かゝる處に飛脚到來して、五百の歩軍はや城下に至りぬと報じければ、呂樞密是を聞て自ら城樓に上り、遙に城外を望んで敵の旗號を見るに、黑旋風、李逵と云ふ五字を大文字にて分明に書き、これを當先に立て寄來る。呂樞密左右を顧て云けるは、黑旋風、李逵と云ふ者は、梁山泊第一の凶徒なり。好て人を殺し樂で火を放つ、尤も勇力無双の猛將なれば、等閑の敵と一列に見ることなけれ、諸將の内誰人か先彼を討て敵の氣を呑んや。高可立、張近仁一同に進み出で云ふ、某ら兩人李逵を生捉て相公に獻すべし。呂樞密大に悦び、汝兩人若得て、彼賊を生捕ば、我早速上に奏聞し官爵を加へん。必ず力を併て李逵を擒れとて嚴に仰せければ、兩將憤で命を請、各鎗を取馬に乗て一千の軍馬を領し、直に城外に打出て李逵を迎ふ。李逵是を見て、五百の歩軍を一行に備へ、二ツの斧を双の手に持陣前に出ければ、喪門神、鮑旭も刀を揮て李逵が左に相隨ふ。項充、李袞兩人は各軍器を持て陣前に馳出る。高可立、張近仁は昨日の軍に功を立て自ら是に傲り、一千の人馬を城の邊に相備へ、敵を見ること一毛よりも輕んじけり。宋の軍中には高可立、張近仁を視認たる者有て、彼等兩人こそ韓滔、彭玘を殺したる者なりとて、早速李逵に告げれば、李逵是を聞て大に怒り、頓て二ツの斧を揮て敵陣に砍て入る。鮑旭是を見て項充、李袞を招き、三人一同に馳出て李逵と共に敵軍の内に砍入り、四面八方に當て散々に打しかば、高可立、張近仁大に驚き、急に逃んとせし處に、項充、李袞早くも跑來て、高可立と張近仁とを迎へ、鋒を

交へ暫く相戦ひ居ける處に、李逵斧を揮て馳來り、先高可立を馬より下に砍て落し、猶張近仁を砍んとしたりしかば、項充呼で云く、李公先づ斧を收め給へ。一人は生捉て回るべしと再三是を制しければ、李逵は原來人を砍ことを好む豪傑なれば、項充が言を耳にも聞入らず、遂に斧を以て張近仁が頭を砍て落し、頓て二ツの首を取にけり。李逵益興を得て東西南北に砍て回り、一千の敵兵を右往左往に追散し、三百餘人立處に討取、直に城門の邊まで追蒐しかば、討もらされたる敗軍共、先を争て城中に逃入、牢く城戸を關し嚴密に防ぎけり。李逵鮑旭兩人は城中に攻入んとしければ、項充李袞再三是を制し、遂に引て本陣に回しける。此時城中より欄木砲石雨のごとく打出せり。李逵陣中に回り五百の歩軍を相備、猶戦ひを挑しか共、城中の兵共は李逵が威勢に恐れ、再び出て戦ふ事なかりけり。李逵等四人の大將は、中軍に注進せんと思ふ處に、宋江が軍馬已に至りしかば、李逵鮑旭各宋江に見え二ツの首を献す。宋江並びに諸大將皆此首を見るに、是則ち高可立張近仁兩人が首なりしかば、諸將大に驚きて問けるは、此兩人は萬夫不當の勇有て、人皆近くこと能すと云に、足下らいかゞして此首を得たるや。李逵答て戰の次第々々具に語りしかば、宋江聞て斜ならず悦び、仇人の首已に得る上は、白旗の下に於て二ツの首を供へ、韓滔彭玘が靈魂を祭んとて、宋江頓て二ツの首を供へしめ、自ら空を拜して覺す涙を洒ぎ、韓滔彭玘兩將の靈を祭り、重く李逵等を賞しけり。翌日宋江三軍を引て陣屋を打出、直ちに常州を望で進發す。扱かの呂樞密は常州城の内に在て、宋江が軍

馬近く至りぬと聞しかば、大に心を愕然め、金節許定并に四人の統制官を集めて、敵を退けん計を議しけるに、城中の諸大將李逵が猛威を見て、各膽を落し心を寒し、出て戦んと思ふ者唯一人もあらず。呂樞密又再三計を問ひけれども、諸將都べて默然として言はず。恰も箭の雁の嘴を穿ち、鉤の魚の腮に搭たるがごとし。呂樞密此體を見て、益愁を添へ、先人を城樓に遣し宋の軍馬を見せけるに、宋江が軍兵共は、都て三面より常州城を取圍み、金を鳴し鼓を搦、喊の聲天に喧くして山河も崩る、計なり。猶此軍次卷に詳なり。

按ずるに流布の水滸傳に宣州を宣州と謬り、姓の沈をちんと訓たるごとき誤り多し。沈は姓なり。孟子の沈猶行、唐の詩人沈佺期を以ても知らる。姓はちんと訓ことなし。冠山子は此等の差別をしらぬ不學者にはなし。其外百八人の諱名姓名訓あやまり毎度多し。

九編卷之三

混江龍太湖にて小く義を結ぶ

呂樞密は宋の大軍居城を三方より取圍み、攻ること山をも拔べき勢ひなれば、此時諸將に命じて云く、汝等先づ城を守つて堅く敵を防ぐべし。必ず誤て城を破らるゝことなかれとて、已に兵を分ち與へしかば、諸將命を受けて帳前を退ぞきけり。呂樞密ははや諸將を手配し、獨り後堂に入り則ち心服の家人等を集めて云く、事既に此に至りて計の行ふべきものなし。しかじ城を棄て落ちんにはと、暗に商議を定めけり。扱彼の守將錢振鵬戦死の上は、代つて守るべきは金節と許定なるが、先づ金節は私宅に回り、妻秦玉蘭に告げけるは、今宋公明大軍を以て城を重々に取りかこみ、晝夜金鼓を息す戦ひを挑む。城中は原來糧乏しく將士少なく、永く籠城せんこと最も難し。若し城を破られれば我輩は皆死を刃の下に致すべし。何を以てこれを免れんやとて、深く憂に逼りける。秦王蘭が云く、丈夫は本宋朝の舊官と云ひ、殊さら天子の洪恩を受け給ひしかば、宋朝のために忠を盡し給はんこと、是れ則ち天の理人の道なれば、速に邪を去つて正しきに歸り、呂樞密を活捉て宋公明に献じ、宜しく降参のことを願ひ給へ。金節が云く、呂樞密が手下に四人の統制官有て、各人馬を領せり。況や彼

の許定は平生我と不和にして、呂樞密が心腹の者なれば、呂樞密が爲に力を盡さんこと必然なり。我もし孤力を以て此ことを行はば、恐らくは誤り有つて禍を惹出し、徒に非命の死を遂べし。是に依て猶躊躇する所あり。秦王蘭が云く、已にかくの如くば、丈夫夜中に箭文を修へ城外に射出し、豫じめ先づ内意を宋先鋒に通じて、裡應外合の計を相定め、丈夫明日城を出て一戦をなし、詐つて敗北し給はば、宋の諸軍勢必ず其意を察して追蒐べき間、丈夫は只此機に乗じ、宋の兵を城中に引き給へ。然らば丈夫の功大いにして、宋朝の寵感を蒙むり、禍を去て福至るべし。金節聞いて大いに悦び、妻が教へに隨ひけり。翌日宋江兵を引て緊しく城を攻めしかば、呂樞密諸將を集め議しけるは、汝ら諸人いかなる計を以て、敵を退ぞけんと思ふや。若し所存あらば速に評議せよ。金節進み出て云く、當地の城は原來要害よき名城なれば、只宜しく堅固に守り、出て戦ふこと有るべからず。もし蘇州より援の兵至りなば、其時三軍を引て城中を馳せ出で、内外より夾んで宋兵を打ばいかでか勝利なからんや。呂樞密此言を聞て然りと同じ、頓て諸將を分つて城の四門を守らしむ。應明趙毅は東門を守り、沈抃范疇は北門を守り、金節は西門を守り、許定は南門を守り、已にして手分定まりしかば、各兵を領して城門を堅めけり。此夜金節書簡を修へ箭に拴り着、半夜の左例に至つて自ら城樓に上り、頓て彼の箭を西門の外に射出しけるに、宋江が哨の兵是を拾ひ、急ぎ西陣の内に入て其箭を献す。此陣を守る大將花和尚魯智深、ならびに行者武松兩人同じく此矢を見て心中に恠み、副將杜興を宋江

が本陣に遣はし此事を訴へしむ。宋江吳用此時帳中に在て軍事を議し居ける處に、杜興已に至つて彼箭文を呈す。宋江箭文をみて甚だ悦び、早速諸將に觸て計を定めけり。呂樞密は自から城樓の上に上つて、宋江が陣中を望み見るに、諸軍勢群て城を重々に取り圍み、忽ち大石砲を放ちしかば、天地も震動するがごとくにして、城の角樓を打壞したり。呂樞密これを見て大いに駭き慌て忙き城樓を下り、先づ試みに一戦を始めんとて、城門を守る大將等に號令を傳へければ、諸人命を受けて城の四門に齎しく鼓を鳴し、諸大將各城門を開かしのめ、吊橋を下して先づ北門を守る大將沈抃范疇兵を引て城外に打ち出でしかば、大刀關勝これを見て、馬を跳せ刀を舞して陣前に跑出で、直ちに范疇を迎へて鋒を交へ、戦ひいまた十合に及ばざる處に、西門を守る大將金節又一彪の軍馬を引て城外に突で出で、頻りに喊の聲を作つて戦ひを挑む。宋江が陣中より病尉遲孫立馬を飛ばせて忙はしく跑け來り、金節を迎へ五七合戦ひし處に、金節詐つて敗北し、直ちに城を望んで逃かへる。孫立後へに隨ひて追蒐しかば、燕順馬麟も相續いて馳せ來る。魯智深、武行者、孔明、孔亮、施恩、杜興等も一度に兵を引いて急に攻寄ける。金節已に城中に逃入りし處に、孫立も相續いて城中に追ひ入り、西門の邊大いに騒ぎければ、百姓共は是を見て甚はだ悦び、我輩多年方臘に惱されて恨み骨髓に徹せり。此節宋の兵を助けて、恨みを報はずんば更に何れの時を待んとて、盡く西門の邊に來りて、宋の兵と共に南軍等を討ければ、城兵共はこれに敵すること能はず、東西に逃走る。此時城の上には早や、宋先鋒

の旗號を立しかば、范疇沈抃を見、城中に變有ることを知り、急ぎ馬を回して城に入らんとせし處に、左の方より王矮虎一丈青馳せ出て范疇を生捉、右の方より宣贊郝思文馳せ來つて、沈抃を馬より擲落し、軍士共に命じ遂に是れを活捉しむ。此時宋江吳用大軍を引て城中に入り、四方を捜し南軍兵を生捉盡し誅戮を行ひけり。呂樞密は許定を引いて南門に馳せ出でければ、宋の兵共跡を慕うて追ひかけしか共、遂に追ひつかず、再び常州に回へりて各功を献じける。扱かの趙毅は呂樞密におくれ、猶城中に奔走し四門を窺ひ見るに、曾て逃れ出でん様なかりしかば、百姓の家に躲れ居ける處に、百姓等是を知て遂に捉へ、頓て宋江が陣中に引渡す。應明は又亂軍の中に討れけり。宋江榜を掛て百姓を撫ければ、百姓共大いに感悦し、老を扶け幼を携へて宋江を拜謝す。是に於て金節は宋江が中軍に至つて、恭しく宋公明に拜調しければ、宋江も感勲にこれを迎へ其功を賞しけり。金節今日宋朝に歸順し、再び良臣となること、是又其妻秦玉蘭が功なり。宋江彼范疇、沈抃、趙毅等三人を陷車に入れ、文書を差添則ち金節に命じ、潤州の張招討が方に送りければ、金節命を奉はり、公文を領し三ツの囚車を監押して潤州に進發す。宋江先達て戴宗を潤州に馳せ、金節が忠義有ることを張招討に告げる故、金節潤州に至りし時、張招討先づ使者を出し金節を城中に迎へ、多く金銀彩緞を以て其勞を賞しければ、金節恩を蒙り大いに悦び、再三頓首して拜謝せり。副都督劉光世、即時に金節を封じて行軍都統とし、遂に軍中に留めけり。此後金節は劉光世に隨つて、大金兀朮四太子を破り、多く戦功を立て親軍指揮

使の官となり、直ちに中山の陣に至つて討死す。此日張招討副都督重く金節を賞して後、彼三人の敵を陷車より引出し、遂に是を誅し頭を街に梟しける。扱宋江常州に在つて戴宗を宣州湖州等に馳せ、盧俊義に消息を通じ、兵を催はさしむる處に、飛脚到來して報じけるは、呂樞密已に無錫縣に逃回り、再び蘇州等の援兵と勢を合せ、近々又攻め來ると風聞あるよし述べければ、宋江是を聞て早速軍馬を催はし、正將偏將都て十人に、一萬の人馬を與へて南の方に發向せしむ。此十人の大將は關勝、秦明、朱同、李應、魯智深、武行者、李達、鮑旭、項充、李袞等なり。已にして十人の大將は人馬を引て宋江を辭し、遂に南を望て打ち出でぬ。こゝに又戴宗は宣州湖州へ赴むきて、戦ひの動靜を聞、即日柴進を引て本陣に馳せ回り、則ち宋江に告げて云く、副先鋒盧俊義宣州を攻め取り給ひしにより、今柴大官人を以て捷軍を報じ給ふなり。宋江聞て大いに悦び、早速宴を設け柴進を饗應し、軍の次第を具に問ひければ、柴進一々詳に語つて文書を宋江に呈す。宋江文書を見るに、宣州を守りたる方臘が臣經略使家余慶が手下に、統制官六人ありて、都て歙州睦州等の地の者共なり。李韶、杜敬臣、魯安、潘濬、程勝祖、韓明の六名なり。一日家余慶兵を催しける處に、六人の統制官三手に分れて親方の勢を迎へり。盧俊義も三方より兵を進め馳せ向ふ。中には呼延灼有つて李韶と相戦ふ。董平も韓明と相戦ひ已に十餘合に至つて、董平遂に韓明を擣伏ければ、敵の中軍大いに敗れぬ。左には林冲有つて杜敬臣を刺殺し、索超も又魯安を砍ぬ。右には張清在つて潘濬と相戦ふ。穆弘又程勝祖と鎗を合

せり。張清已に石を飛ばせて、潘濬を打ちける處に、打虎將李忠馳出て潘濬を打ちければ、程勝祖是を見て急々に逃回りたり。此日親方戦ひに打ち勝て、頻りに追ひかけしかば、敵遂に城中に引き入りし處に、盧先鋒真先に進んで、城戸の邊に推寄ける。此時城中より木石を投て、一人の偏將を打ち殺す。然れ共親方の諸將少しも恐れず、喊き叫んで攻めけるに、城内より雨の如く毒箭を放ち、又兩人の副將を射殺しぬ。盧先鋒大いに怒り、其夜四面を取り圍んで緊しく攻めしかば、東門の敵遂に敗れる故、早速宣州城を乗り取りたり。李韶は亂軍の内に討死し、家余慶は敗軍を引いて湖州に落ち行、程勝祖は行方しれず逃失たり。石に中つて死たる一人の偏將は、白面郎君鄭天壽なり。矢に中つて死たる二人の偏將は、操刀鬼曹正、霍閃婆王定六なり。宋江文書を見終つて、戦ひの次第を備細に知り、三人の偏將を討せたることを悲みて、忽ち地上に哭倒れければ、諸將大いに駭き、急に扶け起して諫めをぞ加へけり。此時吳用等再三宋江を諫め、哭きを止めしめんとするに、宋江猶嘆息して云く、我此たび方臘を討んこと難かるべし。那日江を渡つて以來、一連に八人の豪傑を失なひ、何ぞ是を哭ざらんや。吳用が云く、宋君何ぞ復ぬことを云うて軍心を怠らしめ給ふや。昔日遼其他を攻めし時、百人全く無事に回しは、皆是天數なり。今日數輩の頭領を失ひしは、是又命數なり。江を渡つてより以來、已に三ヶ所の大郡、潤州、常州、宣州等の地を得たり。是則ち天子の洪福宋君の虎威なり。何の利ならざること有つて、自ら志しを失なひ給ふや。宋江が云く、軍師の言一々理なりといへ共、百

八人の輩は天罡地煞の數にして、原來因縁有る者共なれば、永く一處に樂んと思ひけるに、今日已に數人を失なひ、我豈よく是を忍びんや、誠に傷しき事共なり。吳用猶ほ頻りに諫めて云く、宋君先づ宜しく歎きを休めて、無錫縣を打ん計を議し給へ。宋江が云く、柴大官人は我軍中に留まつて、我と同伴をなし給へ。盧先鋒への返簡戴宗に與へ遣はすべしとて、即時返簡を修へ、則ち戴宗を宣州に馳て盧俊義を催促し、早く湖州に入り、兵を杭州に會合し給へと云遣はし、并に常州城を取りし軍の次第まで、詳に云越しけり。扱又呂師囊は許定を引て、無錫縣に逃歸りし處に、蘇州の三大王が差向たる救ひの兵に適遇けり。此兵を領したる大將は、六軍指揮使衛忠なり。手下に二十人の副將を從がへて一萬餘騎を引率し、直ちに此處に至つて呂師囊と勢を合せ、共に無錫縣を守りける。呂師囊戰ひの次第を語つて、金節が心變りして、敵に城を獻じたることを具に告げれば、衛忠是を聞て云く、樞密相公心を安んじ給へ、某再び州を取り復し、宋江等を追ひ散さんと、未だ云も終らざるに、飛脚到來して報じけるは、宋江が人馬はや近く至れり。衛忠是を聞、早速城の北門を打ち出でて、宋の勢を望み見るに、黒旋風李逵當先に進んで、鮑旭、項充、李袞等と共に攻め來る。衛忠急に攻められ陣を布に及ばず、大いに敗れ奔走し、已に無錫縣に逃入りし時、李逵等四人の頭領早くも後へに隨つて縣中に馳せ入りしかば、呂樞密大いに驚き、急に南門の方に逃走る。此時關勝人馬を引て攻來り、遂に無錫縣を乗つ取つて、四方に火をぞ放ちける。衛忠許定兩人も南門より走り出で、直ちに蘇州を

さして落ち行ぬ。關勝等已に城を攻め取つて、使者を本陣に馳せければ、宋江是を聞て大いに悦び、諸大將と共に急ぎ無錫縣に來り、早速榜を出して百姓等を撫ければ、百姓らは都て悦びを催はしぬ。宋江已に三軍を收めて縣中に屯し、即日使者を以て張劉兩總兵を常州へ迎へ、堅く城を守らせける。扱彼呂樞密は衛忠許定兩人と會合して敗軍を引き、已に蘇州城に入つて軍の次第一々詳に三大王方貌に告げるに、三大王大いに怒り、左右に命じて呂樞密を斬しめんとせしかば、衛忠等再三告て云く、宋江が軍中には諸將都て戰ひに慣たる者多し。況んや皆梁山泊に居たる豪傑共にて、我劣じと武勇を振ふ故、親方遂に敗北に及べり。此度は先づ呂樞密が罪を免し給へ。方貌是を聞て稍怒りを休、則ち呂樞密に命じて云く、我今日は暫く汝が罪を預る間、汝五千の人馬を引て當先に馳せ出で、敵と一戦ひをなしこの罪を償ふべし。我は自から大軍を引て、跡より打ち出でん。汝必ず誤ることなかれ。呂樞密命を受けて拜謝し、即時に兵を引て城外に馳せ出でけり、扱三大王方貌は、手下に屬しある八人の大將、八驃騎と名付たる勇士共を聚めて計を商議せり。此八人都て力量ある豪傑なり。一人は飛龍大將軍劉贊、一人は飛虎大將軍張威、一人は飛熊大將軍徐方、一人は飛豹大將軍郭世廣、一人は飛天大將軍鄒福、一人は飛雲大將軍苟正、一人は飛山大將軍甄誠、一人は飛水大將軍昌盛と申す。此時三大王全身儼に披掛て方天戟を提げ、秘藏の名馬に乗つて出陣し、自ら中軍の人馬を掌る。馬前には彼の八驃騎の大將らを二行に相列ね、猶三十二人の副將を左右に從へ、總て五萬の人馬を引き、

城の間闕門より打ち出でける。呂樞密は衛忠許定を引いて、已に寒山寺を打過、直ちに無錫縣を望んで進發し、はや十餘里ばかり行ける處に、宋江も已に大軍を引いて此處に至り、兩勢相迎へて陣を對しける。呂師囊矛を横へ自から陣前に跑出で、三軍に下知して戦ひを挑ましむ。宋江是を見て誰かよく彼を捉へんやと、未だ云も終らざるに、金鎗手徐寧鎗を振り馬を躍らせて陣前に跑出で、直ちに呂樞密を迎へ鋒を交へ、兩將各勇を震つて相戦ふ。敵親方の諸軍勢一同に喊の聲を合せ、天地も崩る、計りなり。兩人の大將戦ひはや三十餘合に至りしかば、呂樞密漸疲れて逃回らんとしける處に、徐寧早くも鎗を伸して、呂樞密を馬より下に突落しぬ。此時李逵二ツの斧を振て鮑旭、項充、李袞等と共に敵陣の内に攻め入りしかば、南軍共大いに亂れ奔走す。宋江兵を進めて追蒐し處に、半途に於て方貌が大軍に行遇、兩軍各遠矢を放つて陣勢を列ねける。南軍の陣中には、彼八驍騎の猛將ら馬を並べて相勦へり。方貌は中軍に在つて、呂樞密が討れたると聞き、大いに怒り自から鞍を提げ、馬を飛ばせ、陣前に進み出で、甚はだ宋江を罵つて云く、汝は是れ梁山泊の盜賊なるに、宋朝の運傾て汝を先鋒に封じ、妄りに我大國を侵さしむ。我今汝等を一々誅して手段を見せしめん。必ず後悔することなかれ。宋江大いに怒つて云く、汝はもと睦州の村夫なり。何の福分有つて霸業を圖るや。若し天命を知らば早く降參して一命を脱れよ。我天兵こゝに至る上は、汝らを秋盡さん事、只須臾の間にあり。方貌是を聞いて大いに怒り、汝若し能く我に敵せんと思は、早く八人の賊將を出して、我八

驍騎の猛將と戦はしめよ。宋江冷笑つていはく、汝早く八驍騎の徒を出だせ、我も又八將を出だし、勝負を決せしめん。汝必ず暗に矢を放たしむることなかれ。若し此日雌雄分たすんば、明日重ねて戦ひを催はすべし。方貌これを見て彼八將を陣前に出しける。宋江是を見て誰かあへて彼等が對手にならんやと、未だ云も終らざるに、八人の大將馬を並べて跑け出づる。一人は關勝、一人は花榮、一人は秦明、一人は朱同、一人は黃信、一人は孫立、一人は郝思文なり。此時兩軍攻鼓を打ちて喊の聲を發しける。敵親方總て十六騎の猛將、各對手を擇んで馬を交へ、互ひに精神を勵んで戦ひしかば、諸軍都て目を驚かしむるばかりなり。戦ひはや三十餘合に至りし處に、内一人馬より下に眞倒に落ちたりければ、兩軍急にこれを見れば、朱同一鎗に苟正が喉を擲にけり。此時兩陣先づ金を鳴し軍を收めしかば、諸の大將各相引に本陣に引き入りぬ。三大王方貌は一人の大將を討せ、勝利得がたきを料り、急ぎ兵を引て蘇州城に退ぞきける。宋江是を見て後へに隨ひ追かけ、直ちに寒山寺の下に至つて陣を列ね、則ち朱同徐寧兩人を賞し、捷軍を知らしめんと、文書を修へ張招討が方に遣はしける。扱も三大王方貌は、堅く城を守つて再び出でて戦はず、多く木石を設け防ぎを嚴密に備へたり。翌日宋江は花榮、徐寧、黃信、孫立を引て都て三十餘騎、城の邊に至つて其防ぎを見るに、週遭は都て水港環繞して、垣等に至る迄殊更堅固の體なりしかば、此城急に落さんこと難かるべしとて、先づ本陣に回つて吳用と計を商議しける處に、水軍の頭領李俊、江陰より來れりと報じければ、宋江頓て

李俊を呼んで對面し、即ち沿海の消息を問ひけるに、李俊答へて云く、某向に石秀と共に江陰、太倉沿海等の地に攻行けるに、守將嚴勇副將李玉水軍を引て馳せ出で、暫く相欄へ戦ひしか共、嚴勇已に阮小二に一鎗に擲殺され、李玉は流矢に中つて死す。よつて遂に江陰太倉を得、即日石秀、張橫、張順等は直ちに推寄て嘉定を取り、三阮兄弟は常熟を取りぬ。某は先づ來つて捷軍を報じ奉る。宋江是を聞て大いに悦び、早速李俊を賞し常州に遣はしければ、直ちに彼所に至つて、張招討劉都督に見え、江陰、太倉、海島等の地を得たることを詳に告げれば、張劉兩招討大いに悦びて恩賞を行ひ、再び李俊を宋江が陣に回しけり。宋江は蘇州の城外水面濶きを見て、必ず水軍を用ひて攻めんと圖り、李俊に命じ兵船等を備へしめけるに、李俊が云く、某先づ彼地に馳せて水の深淺を測り、其後謀を用ひて城を攻むべし。宋江是を聞て可なりと同じければ、李俊已に彼地に行て動靜を伺ひ、第三日に本陣に立ち回つて告げるは、此城正面の方は太湖に近し。某一艘の小舟に駕して、宜興の小港より私に太湖に入り、吳江に出で、南方の消息を具しく窺つて而して後兵を進め、四面より夾んで攻めば必ず敵を敗ること有るべし。宋江が云く、汝が言まさに我心に合へり。然れ共汝に従はしめん副將あらず、事未だ全たからず。李大官人は孔明、孔亮、施恩、杜興此四人を引いて江陰に行、童威童猛に替つて彼所を守り、早く童威兄弟を此處に至らしめ候へ。李應命を奉つて四人の副將を引き、即日本陣を打ち出で第二日の晩方江陰に至り、則ち童威兄弟に替つて此處を守りしかば、童威兄弟は急ぎ

宋江の本陣に回つて宋江に見えけるに、宋江は兄弟の者を李俊に従がはしめて、一艘の小舟に乗しめ、南方の消息を備細に窺しめけり。李俊は童威童猛を引いて一葉の扁舟に棹し、兩人の右手に櫓を搖せ、運に冥縣の小港に赴き、是より太湖に入りて、太湖の光景を見るに、天遠水に連り水遙天を接へ、高低の水影塵無して、上下の天光一色なり。此時李俊は童威兄弟並びに兩人の右手と共に、太湖を過ぎて漸吳江に至り、遙對面を眺望するに、四五十艘の魚船あり。李俊が云く、我輩皆魚を買ふ體にもてなし、漁人等に動靜を問ふべしとて、五人已に魚船の傍に漕行、李俊先づ一人の漁翁に問うて云ふ、大いなる鯉魚ありや。漁翁が云く、汝若し大いなる鯉魚を買はんとならば我家に來りたまへ、我これを賣べし。李俊聞いて兩人の右手に船を漕せ、則ち魚船に隨つて、一二里ばかり行きけるに、はや一簇の人家あり。彼漁人まづ船を纜で岸に上りければ、李俊、童威、童猛三人齊しく漁人に從ひて岸に上り、一軒の草屋の内に入りける處に、七八人の大漢子手毎に撓鉤を持つて、李俊等三人を釣倒し、頓て高手に縛めけり。李俊眼を縦にして、四方をみるに、草堂の上に四人の豪傑あり。頭たる第一人の漢子は、髭赤く髮黃にして青綱の衣服を着せり。第二人の漢子は身瘦髯長くして木綿の衫を着せり。第三人の漢子は面黒く髯短し。第四人の漢子は眼圓して腮長うして兩人ともに一樣に裝束し、各身邊に軍器を帶して尋常ならぬ人品なり。彼頭たる一人の漢子、先づ李俊を罵つて云く、汝等は何れより來て妄りに此處に徘徊するや。李俊答へて云く、我々は揚州より來りたる商人なるが、魚

を買んと思つて此邊に至れり。彼第四人の漢子が云けるは、何ぞ必ずしも彼等が來れる處を問給はんや。定めて喰の者にてぞ有るべきに、早く肝を引き出だしてこれを肴に一盃酌み給へ。李俊此言を聞いて心中に想ひけるは、我昔日海陽江の内に有つて海賊をなし、其後梁山泊に上つて豪傑の譽を取り、遂に御赦免を蒙りて、國家の臣となりける處に、今日此處に於て非命の死を致さんことこそ無運なれと、再三嘆息して童威童猛を見て云けるは、今日我誤て汝兄弟を難に遇しめたり。願はくば恨を休て潔く死を遂候へ。童威兄弟これを聞いて云けるは、我門今日此の難に遇も運の究る處なり。何ぞ必ずしもこれを恨まんや。然れ共此處にて死失なば、李公の大名を没すべし。これのみ残念なりとて、三人面を合せて暗に牙を咬にける。かの四人の漢子李俊等三人が模様を見て、いか様下輩の者にあらすと思ひ、又李俊に問て云く、汝原何等の者なるにや、早く姓名を報せよ。其様子に依つて一命を免すべし。李俊冷笑つて云く、我已に此場に至り、何ぞ死を恐れ命を惜んや。汝無益のことを問んより速に我輩を殺せ、我少しも恨あらず。四人の者是を聞いて、好き豪傑かなと賞嘆し、首たる一人の漢子自ら座を立つて、李俊等三人が綁の索を解、頓て拜をなして云けるは、我等四人多年強盗をなして、餘多の人を殺しけれ共、いまだ公等のごとき豪傑を見ず、是に因て今害するに忍びざるなり。伏して望むらくは、貴姓大名を報じ給へ。李俊是を感じて云けるは、足下四人は定めて眞の英雄ならん。此上は我等が姓名を報すべし。我は是梁山泊の宋公明が幕下にある、副將混江龍李俊と

云ふ者なり。彼等兩人は同胞の兄弟兄は出洞蛟童威、弟は翻江蜃童猛と申し、ともに我同僚たり。此たび宋朝の御赦免を蒙りて、新たに遼の國を破り、ついで田虎王慶を討平げ、今又勅命を奉て方臘を征伐す。足下等は必定方臘が手下の人ならん。早く我等三人を綁て方臘が軍中に引き渡し、重く恩賞を請給へ。我等は原來死を捨たる者なれば、今此處にて死を致す共毛頭も恨なし。足下等我を憐んで、自家の功を誤給ふことなかれ。我輩今此處にて命を保つとも、明日は戰場に屍を曝さんことを測るべからず。かゝる身を以ていかんぞ命の終るを哀とせんや。疾々我等に索を打ち候へと云ければ、四人の者地上に跪いて、我々は方臘が手下の賊兵にあらず、原山林に在つて強盗をなし、近き比此處に移りぬ。此處は榆柳莊と申して、四方は都て深港なり。これに依つて若干の魚船を港中に出だして、若し商船の來るを見る時は、諸の魚船を以て其商船を打ち取り、則ち金銀財寶を奪うて今日の渡世をいたす。比日又水練に達したる者共數多馳せ集まりて、我等四人を相助くる故、方臘が手下の賊兵共、我々に敵すること能はざるなり。我久しく宋公明の忠義を聞及べり。ならびに李公と浪裡白跳張順の大名とを傳へ聞、常に其徳を慕ひける處に、今日想はず尊顔を拜し悦び望外に出でたり。李俊が云く、張順は則ち我と一所に在つて水軍を掌れり。今江陰の地に馳向ひて賊を攻め、他日我れ彼を誘引して足下らに遇しむべし。願はくば足下四人の姓名を報じ給へ。彼四人の漢子は是を聞いて云けるは、我々は山林に棲し者共なるゆゑ、姓名他に異なつて聞きにくし、李公必ず笑ひ給ふことな

かれ。則ち一人は赤鬚龍費保、一人は捲毛虎倪雲、一人は太湖蛟ト青、一人は瘦臉熊狄成と申すなり。李俊聞いて大いに悦び、足下等已に宋公明のことを聞及びたまふ上は、向後盟を結び給へ。宋公明今勅命を奉て方臘を攻め給ふ故、我ら三人先づ此邊に來つて路徑を伺ふなり。足下四人若し宋公明に對面し給はば、宋公明必ず足下らのことを宋の天子に奏聞し、宜しく取持て官爵を受けしむべし。然らば足下等富貴を樂み給ふべし。費保が云く、我輩若し官爵の望みあらば、老早より方臘が幕下に屬し、統制官とも成るべけれ共、原來官爵を望ずして安樂を求むる故、唯此處に在つてかくのごとく安住す。李公もし我々を用ひて成給ふ所あらば、身命を捨て親方致すべし。若し又我輩をして官爵を受しめんとならば、決して尊命に違ふまじ。李俊が云く、足下ら都て官爵の望みなきこと、是則ち眞の大丈夫なり。我今足下らと義を結びて兄弟の盟をなすべきに、若しこれを承引し給はば彌感謝致すべし。費保等四人是を聞いて大いに悦び、李公もし肯て義を結び給はば、我輩は福何か是にしかんやと、則ち酒宴を設けしめて、李俊等三人を款待ければ、李俊已に童威童猛と俱に甚だ感激し、都て七人義を結んで兄弟の約を誓ひけり。此時李俊費保等に語つて云く、宋公明今蘇州を取んとし給へ共、方貌堅固に城を守つて出で戦ふことあらざるゆる、今に城を破ること能はず。況んや城の四面は水深うして、陸路なきに依つて兵を進めがたし。しらすいかなる計を以て城を攻めんや。若し良計あらば速に示し給へ。費保が云く、李公先づ心を安んじて三日逗留し給へ。我預じめ敵の動靜を窺

て、其後計を用ふべしとて、即時に數箇の漁人を敵地に遣はし、敵の動靜を伺はしめ、毎日美酒佳肴を調へて李俊等三人を饗應し、共に其の消息を待ち居ける。

宋公明蘇州にて垓に大に會す

扱も第三日晚方に、彼漁人等已に立ちかへつて報じけるは、平望庄の邊に十餘艘の敵船あり。毎船に旗を立て公用を辨ずると相見え、船の上には僅六七人乗てあり。費保これを聞いて云けるは、其船あるこそ幸の便機なり。我今自ら往きて計を試むべし。李俊が云く、足下若し誤あらば却つて悪しからん。先づ宜しく商議を定めて、其後馳せ向ひ給へ。費保がいふ、我何ぞ誤つことあらん。李公心を安んじ給へとて、則ち七十餘艘の漁船を催して、七人の豪傑各一艘の船に乗り、其餘の船には許多の漁人等に乗しめ、小港より大河に入つて想ひくに漕行けり。此夜星月明かにして恰も白晝のごとくなり。扱十餘艘の敵船は都て龍王廟の前に在つて歇居たりし處に、費保が乗つたる船先づ至つて、相圖の石炮を放ちしかば、七十餘艘の船一度に漕來つて、喊の聲を揚にける。敵船の上なる水軍ども、此聲を聞いて大いに驚き、急に走り出でて柵に立ち並ぶ處に、費保諸の漁人に下知して、はや四五人を活捉たりければ、其餘の敵これを見て甚だ怕れ、皆水中に逃入らんとせしか共、漁人等盡く是を生捉、彼十餘艘の船を太湖の内に牽入れて、榆柳庄に回りしかば早四更の天氣なり。費保又漁人共に命じて活捉し輩を都て水中に沈め、其内只頭たる兩人の水軍を船中に留め、其來歴を問ひけるに、兩人

の水軍答へて云く、我輩は方臘が第一の太子南安王方天定が手下の者なるが、此度命を奉はつて
 武器を蘇州に送らんと欲し、已に此邊に至れり。願はくば我等兩人が一命を饒し給へ。李俊又兩人の
 者が姓名を問ひ、文書等盡く搜し取つて是又首を刎落し、屍を水中に棄て費保等と商議して云ける
 は、我先づ本陣に立回りて宋公明に委細を報じ、其後謀を定むべし。費保が云く、李公の言尤も
 可なり。急ぎ本陣に回りて宋先鋒と計を議定し給へとて、則ち物馴たる漁人兩人を呼んで、一葉の
 快船を調へしめ、李公を送つて宋の軍前に至るべきよし嚴に命じける。李俊は童威童猛を留めて費保
 等と共に消息を待しめ、遂に快船に乗つて楡柳庄を漕出し、小港より過て直ちに軍前に至り、則ち寒
 山寺より岸上を馳せ、陣中に赴き宋江吳用等にもみえ、始終の事詳に語りければ、吳用は聞いて
 大に悦び、已にかくのごとくんば、蘇州を取ることも易かるべし。早く號令を傳へ給へとて、宋江を諫
 めけるに、宋江其言に同じ、先づ李達、鮑旭、項充、李袞等に二百人を與へ、李俊と共に太湖庄に遣
 はし、費保等四人と力を併せ計を行はしめ、第二日に進發すべしと約しければ、李俊命を奉はつ
 て李達等四人を引き、再び太湖の邊に來り、直ちに楡柳庄に至り、費保等に對面して、計の次第を具
 に語りし處、費保大いに領承し、則ち李達等に相見え、早速酒宴を進め諸事全く議を定め、已に用
 意を調へけり。先づ費保は解衣甲、正庫官に出で立ち、倪雲は副使都に出で立ち、南宮の號衣を着し
 文書を携へ、都て數百人盡く皆敵兵の形に出で立ちける。黒旋風李達等は船艙の内に隠れたり。ト

青と狄成とは後船を掌つて多く火器を帶し、已に船を出ださんとせし處に、又一人の漁夫來つて報じ
 けるは、一艘の小船江面に在つて四方を漕回る。いかさま恠しき船と覺えたり。李俊聞いて夫は必ず
 敵船にてぞ有らんと、自ら出でてこれを見るに、船頭に兩人の漢子立ち並びぬ。一人は神行太保戴
 宗、一人は轟天雷凌振なり。李俊是を見て忙しく招きしかば、彼船飛ぶがごとく漕來り、則ち岸に
 上つて諸人に對面せり。李俊先づ問て云く、足下兩人何等の事有つて此處に至り給ふや。戴宗答へて
 云く、宋先鋒事の忙しきに紛れ、相圖の石炮を忘れたまひ、則ち我等兩人に命じ石炮を小船に積しめ、
 足下らの後を慕せ給ひしか共、足下の船ははや見えざりし故、直ちに此處迄來れり。明日卯の刻に足
 下城中に進み入り、此百張の炮を放ちて相圖を通じ給へ。李俊是を聞いて大いに悦び、則ち百張の石
 炮を漁船の上に移し、先づ費保を呼んで戴宗等に遇しめければ、費保早速宴を設け懇慫に饗應せり。凌
 振は十人の石炮手を携へて、第三番の船に埋伏し、事已に調のほりしかば、此夜四更の時分に諸船齊
 しく漕出し、蘇州へと進發し、五更の時分にはや城下に至りける。城門を守る軍士城の上より是を見
 るに、南國の旗號ありければ、急に人を馳せ飛豹大將軍郭世廣に斯と告たりけるに、郭世廣是を
 聞いて自ら城樓に上り、其來意を具に問ふ。又文書を乞取、これを三大王に呈しけり。蘇州の軍事は
 次卷に委し。

論者いはく、費保ら初めに敵船を奪ふ時、相圖の石炮を打つとは、漁師の盜賊何の爲に石炮を貯

へ置きしや、背がたき文段なり。

九編卷之四

寧海軍にて宋江孝を吊す

偕も三大王方貌文書を見て云けるは、彼らは皆太子の命を奉つて、當城に武器を送る者共なれば、早速城内に入しむべけれ共、若し詐のこともやあらん。猶宜しく查を加へ、其後城中に入しめよと命じければ、郭世廣命をうけ、自ら五百餘人を引て門の邊に出、先づ二人の軍士を遣し船中を捜させけるに、果して武器を積て有しかば、郭世廣疑を休て十餘艘の船を城中に入しめける。此時李達は鮑旭、項充、李袞等と共に船の内より出ければ、彼二人の軍士是をみて大に駭き、汝四人は何者なるぞと問けるに、項充李袞早くも刀を舞し、二人の軍士を斬伏けり。彼五百餘人の兵共、岸の上よりこれを見て大に怒り、盡く皆船中に跳乗んとせし處に、李達已に岸の上にて二ツの斧を揮ひ、矢場に十餘人の軍士を砍伏ければ、諸々の軍士共甚だ恐れ都て四方に逃散けり。李達費保等此勢ひに乗じて岸上に跳上り、數百人の者に下知し一度に火を放たせ、則ち四面八方を撓拂ふ。凌振は是を見て、時分は能ぞと料り知り、手下の石炮打に命じ、相圖の石炮を同時に放せければ、其音天地に響て山河も崩る計なり。三大王方貌は石炮の響を聞て大に驚き、こはいかにと騒動す。城の四門を守る大將等、石

砲の響有を聞て是を恠み、皆々兵を引て城中に馳來る。此時流矢に中て死する南軍は其數知べからず。
 黒旋風李達戰ひに利を得、益興を催し、鮑旭等と共に兵を引て東西南北に馳回り、敵餘多討取けり。
 戴宗は又費保等四人と共に凌振を助け、只顧石砲を放たしむ。宋江是に於て三路より人馬を進め、直
 に城中に攻入て散々に撃しかば、南軍共は敵し戰ふこと能はず。各先を争うて逃走る。三大王方貌は
 急ぎ馬に乗て五百の兵を率ゐ、南門より走り出んとせし處に、黒旋風李達人數を引て此處に馳來り、喊
 き叫んで緊しく攻ければ、南軍とも大に亂れ奔走す。斯る處に小港の内より、花和尚魯智深、鐵禪杖
 を輪して打出しかば、方貌これに敵すること能はず。只獨取て回し、烏鵲橋の邊に退きし處に、行者武松
 横合より馳出て、方貌が乘たる馬の脚を砍て落しければ、方貌眞倒に落けるに、武松早くも刀を舉
 て方貌が首を刎落し、其首を右の手に提げ中軍に馳回り宋江に獻じける。此時宋公明ははや城中に入
 て三軍を四方に分遣はし、偏く南軍を搜して殺さしむ。宋の兵どもは勢に乗じ、南軍を搜し出し一々
 首を刎にける。獨劉贊は敗軍少々引率し、秀州を望て逃去けり。宋江は三軍に號令を傳へて百姓を傷
 はしめず、早速諸將を集て其功を論ずるに、武行者は方貌を殺し、朱同は徐方を活捉、史進は甄誠を
 活捉、孫立は張威を殺し、李俊は昌盛を殺し、樊瑞は鄒福を殺し、宣贊は郭世廣と戰ひ互に討死せ
 り。其餘の諸大將も各敵兵を討取ける。宋江は宣贊が討死したると聞て大に哭き、即時人を馳て屍
 を拾しめ、懇に禮を以て虎岳山の下に葬しむ。扱て彼方貌が首並に徐方甄誠等を常州の張招討が軍

前に送らせければ、張招討頓て是を殺し首共を街に梟しけり。張招討また劉光世を請うて、蘇州城を
 守らしめ、猶宋江を催促して急に方臘を攻さしむ。劉光世兵を引て蘇州に移りしかば、宋江自からこ
 れを迎へ城中に入、共に軍事を商議し、又水軍の消息を問はしめける處に、敵の水軍盡く逃散て、親
 方の水軍勝利を得たりと報じければ、宋江大に欣悦し、早速文書を修へ、捷軍のことを張招討に報じ
 ける。扱水軍の頭領等は沿海に於て所々の敵を追散し、遂に蘇州に回りに宋江に告げるは、三阮兄弟
 常熟を攻し時、施恩を失ひ、又崑山を取し時、孔亮を失へり。石秀李應等は皆恙なく回りしか共、施
 恩孔亮は曾て水練を知らざりし故、水に洩て死し畢ぬ。宋江是を聞て、彌涙を洒ぎける。此時費保四
 人は、宋江に別れを告げ回んと欲しければ、宋江再三留しか共、四人の者決して留らず。宋江是を見
 て必竟留がたきことを知り、則ち金銀綵段を莫大に與へ四人の者を賞し、再び李俊重威兄弟に命じ、
 四人の者を送らせけるにぞ、李俊等再び檣柳庄に至りしかば、費保頓て酒宴を設て李俊等を款待し、
 酒已に數遍を巡りし處に、費保又李俊に對して云く、我聞世事有成必有敗、爲人有利必
 有衰と云ことあり。李公梁山泊に在て大業を立給ひ、已に二十餘年が間百たび戰て百たび勝、大
 逸を破り、田虎王慶を亡し給ひし時迄は、百八人の内一人も缺ざりしか共、此度方臘を攻給ふには討
 死せし人多し。是則ち天數なり。李公今力を盡し朝敵を破り給ふ共、太平の後は却て奸臣等に害せら
 れ給ふべし。我四人李公等三人と義を結びこそ幸ひなり。宜しく此機に乗じ安心立命の地を尋

害を見究め給は、我早速兵を進め、賊首を生捕んこと尤も易かるべし。然れ共敵嚴に防ぎを備へたることなれば、足下敵地に忍び行給はんこと究て難からん。これに因て我心未だ安せず。柴進が云ふ、我一命を棄て敵地に忍び入らんに、何の不可なることかあらん。若し燕青を得て同じく往ば大に宜しかるべし。燕青はもと諸國の郷談を曉し、殊さら聰明の人なれば、心を合せ事を謀るに足ん。宋江が云く、燕青は今盧先鋒の陣中に在、急に呼寄て商議すべしと、未だ云も終らざるに、盧先鋒の方より、燕青を以て捷軍を報じ給ふと告げれば、宋江是を聞て大に悦び、則ち柴進に對し云けるは、柴大官人功を立給はん表しにや、幸ひ今燕青來るとなり。柴進斜ならず悦んで云く、燕青が來ること誠に吉兆ならん。急ぎ對面して事を商議せんに燕青を呼入給へ。宋江此言に同じ、早速燕青を帳中に呼で聞けるは、湖州の戦ひはいかん。燕青答へて云、向に宣州を離れてより、盧先鋒兵を兩路に分け、一路の兵を引て湖州を攻、城を守る大將弓温竝に手下の副將五人を殺し、遂に湖州城を乗取て賊兵共を四方に追散し、則ち文書を修へ張招討に捷軍のことを訴へ、統制を以て湖州城を守せ給はんとのことなり。盧俊義又一路の兵を林冲に與へて、獨松關を打しめ給ふ。毎日戦ひを勵むといへ共、未だ關を得ざる故、盧先鋒則ち呼延灼を湖州城に留めて、張招討の方より統制を遣し給ふを待しめ給ひ、自らは朱武等とともに人馬を引て、又獨松關に向ひたまへり。呼延灼等も又統制が到るを待て湖州を統制に守らせ、自らは、諸將と共に軍馬を引て德清縣を攻、直に杭州に至つて會合すべしと約を定

めけり。宋江是を聞て又問けるは、盧先鋒に従ふ大將は幾許ぞや。又呼延灼に隨ふ大將は幾許ぞや。一其名を報じ我に聞しめよ。燕青が云く、盧先鋒に隨て獨松關に向ひし大將は總て二十三員なり。先鋒盧俊義、朱武、林冲、董平、張清、解珍、解寶、呂方、郭盛、歐鵬、鄧飛、李忠、周通、鄒淵、鄒潤、孫新、顧大嫂、李立、白勝、湯隆、朱貴、朱富、時遷、又呼延將軍に従て湖州城に在り。近日兵を進めて德清縣を攻んとする大將は總て十九員なり。呼延灼、索超、穆弘、雷橫、楊雄、劉唐、單廷珪、魏定國、陳達、楊春、薛永、杜遷、穆春、李雲、石勇、龔旺、丁得孫、張青、孫二娘

右兩所に發向する大將總て四十二員なり。宋江が云く、すでに此のごとくんば、敵地を攻取んこと尤も易かるべし。今汝を待て柴進と俱に方臘が陣中に忍び入り、敵の要害を窺て大功を立んことを欲す。汝肯て往べきや。燕青が云く、宋君の尊命某何ぞ違んや。願くは柴大官人に從て、方臘が陣中に忍び入り、敵地の備へを窺て共に大功を立て、聊か宋君の厚恩を報じ奉らん。柴進是を聞て大に悦び、便ち燕青に對して云けるは、我は白衣秀才の形に立立べき間、汝は家僕の形に立立、琴劍書物笈等を背て我に従ひ給へ。然らば見る人疑ひを起すこと有まじければ、直に海邊に至て船に乗、越州を過て

諸營縣より山路を行ば、睦州はや遠からず。宋江が云く、越州の軍民共は、猶我朝に従て未だ方臘に降らざれば、我公文を遣はして、彼所の守將に與ふべき間、吉日を撰で早く發足し給へ。柴進燕青悦で命を受遂に用意を調へて、翌日宋江に別れ直ちに海邊へと急ぎけり。茲に又軍師吳用再び宋江に對して云けるは、杭州の南半邊は、錢塘の大江有て海島に通達せり。若一人の大將小船に乗て、海邊より緒山門に進み入り、直に南門の外に繞出て相圖の石炮を放ち、并に相圖の旗號を立ば、城兵必ず騷動すること有べし。しらす水軍の大將、誰かあへて彼地に赴んやと、未だ云も罷らざるに、張橫三阮進み出て云く、我輩敢て彼地に赴ん宜しく號令を下し給へ。宋江が云く、杭州の西路は都て湖泊を頼み要害とする處なれば、又水軍を用ふべきことあらん。足下等四人皆一同に往は却て悪しかるべし、別に又宜しく商議せんとして、計を吳用に問ければ、吳用が云、只張橫と阮小七とに候健と段景住とを添、總て三十餘人の水手を與へて、十餘挺の石炮并に旗號を持しめ、暗に彼地に遣さば、必ず其利を得ること有べし。宋江此議に同じ、頓て張橫阮小七に候健段景住を相添、宜しく事を行ふべしと命じければ、四人の大將命を領し、水主等を引直ちに海邊に至て船に乗、錢塘江の内に漕行けり。扱て宋江は再び秀州に回り、杭州を攻取ん計を議しける處に、勅使至て御酒を賜ると報じければ、宋江自ら諸將を引て勅使を城中に迎へ、則宴を設けて感懃に饗應し、酒已に數巡に至りし處に、勅使宋江に語ていひけるは、帝前日 風病を得たまひて御惱有ゆる、大醫安道全を朝廷に召給はんと、御

事なり。將軍宜しく安道全を都に遣し給へ。宋江敢て勅命を違す、即時安道全を呼で斯と告知らせ、酒宴已に終りしかば、勅使遂に安道全を引て宋江に辭し、各城外に打出ける。宋江又諸將を領し、十里長亭まで送り出、感懃に一禮を述て別れけり。去程に宋江は御酒を分て諸將を賞し、翌日劉光世に辭し秀州城を打出、水陸並び進で急ぎしかば、はや崇德縣に至りける。此處を守る大將宋江が大軍寄來れりと聞て、唯一戦にも及ばず早速杭州に逃行けり。扱彼方臘が太子方天定は、諸大將を集めて宋江を退ん計を商議す。此時二十八人の勇士悉く帳前に伺候せり。此の内四人は元帥なり。又兼て大將軍の號を稱す。其面々は

寶光如來國師鄧元覺

南離大將軍元帥石寶

鎮國大將軍厲天閻

護國大將軍司行方

又二十四人の將軍あり。

- | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|----|
| 厲天祐 | 吳值 | 趙毅 | 黃愛 | 晁中 | 湯逢上 | 王勤 | 薛斗南 | 冷恭 |
| 張儉 | 元興 | 姚義 | 溫克讓 | 茅迪 | 王仁 | 鳳儀 | 鶴或 | 廉明 |
| 徐白 | 張道原 | 貝應夔 | 張韜 | 蘇涇 | 米泉 | | | |

此面々皆各萬夫不當の勇あり。總て二十八人方天定が帳前に至て計を商議す。方天定命を下し云けるは、即ち今宋江が兵水陸より並び進んで寄來り、已に江南を渡り我三郡を攻取り、杭州は原南

國の要害なるに、若此處を失はば、睦州を保んこと難かるべし。前日司天太監浦文英奏して云けるは、聖星我地を犯して禍大ならんと。今果して宋江等兵を引て我地を犯すこと、是れ則ち浦文英が言に應せり。汝等諸官高祿を受しことなれば、此度一命を輕んじて敵を追退け、宜しく君恩を報すべし。必ず息ることなけれ。諸將頓首して云けるは、殿下心を安んじ給へ。親方には許多の猛將勇兵あり。何ぞ宋江ごときを恐れんや。今已に數郡を失ふといへども、是又憂とするに足らず。宋江盧俊義兵を三路に分て、杭州を攻取んと圖るよし豫じめ是を聞及べり。殿下は國師と共に寧海軍の城を守り給へ。臣等各軍馬を引て敵を迎へ、只一戰の内に宋江を活捉るべし。方天定是を聞て大に悦び、早速人馬を催し諸將に分與へ、自らは國師鄧元覺と共に堅く城を守る。扱彼三人の元帥各副將を引て進發す。護國元帥司行方は薛斗南、黃愛、徐白、米泉等四將を引て德清州を救ふ。鎮國元帥厲天閏は厲天祐、張俊、張綽、姚義等四將を引て獨松關を救ふ。南離元帥石寶は溫克讓、趙毅、冷恭、王仁、張道原、吳值、廉明、鳳儀等八將を引て敵の大軍を迎ふ。三人の元帥各三萬餘騎を領し、先司行方は德清州を救はんが爲、奉口鎮を望んで進發す。厲天閏は獨松關を救はんが爲、餘杭州を望んで進發す。去程に宋江は大軍を領して臨平山に至り、山の頂きを望見るに、一面の紅旗ありしかば、宋江先づ花榮秦明に一千の軍馬を與へて先陣に進ましむ。兩將兵を領して一同に打て出で、已に山口を過て未だ一里も行ざるに、はや石寶が軍馬に行遇けり。石寶が手下の大將王仁鳳儀各鎗を撚て陣前に跳け出づ

る。秦明は狼牙棒を輪して鳳儀と戰ふ。花榮は鎗を撚て王仁と戰ひしか共、雌雄いまだ決せず。秦明花榮敵軍の後へを見るに、救ひの兵多かりしかば、兩將急に馬を勒へて陣中に馳回れり。花榮が云く、敵勢甚だ大いなれば、先戰を休て宋先鋒に斯と訴へ、別に商議をなして敵を破るべし。秦明此言を聞て可なりと同じ、即時に人を馳せて戰の次第を宋江に訴へしかば、宋江急ぎ朱同、徐寧、黃信、孫立等四將を引て自ら陣前に馳來る。彼王仁鳳儀再び馬を出して大音聲に呼びけるは、宋朝の敗軍命惜くば速に馬を下りて降參せよ。若然らずんば一人も漏さず盡く討取べし。秦明これ聞て大に怒り、馬を跳せ棒を輪して陣前に打出、又鳳儀を迎へて相戦ひ、王仁は猶花榮を罵つて戦ひを挑しかば、花榮忿然として突出んとせし處に、徐寧が背に在て暗に弓箭取て打搭へ、能拽て漂と放しかば、其矢誤たす王仁が左の眼に中り、王仁遂に馬より下に落にける。南軍是を見て各色を失ひ、忽ち辟易して相騒ぐ。鳳儀は王仁が討れたるを見て力を落し、是又秦明が棒に眉間を打れ死にけり。南兵共是を見て大に亂れ、盡く四面八方に逃走る。宋の兵後へに隨て追討し、各勇を奮て攻しかば、石寶敵すること能す。阜亭山に引退き、直に東新橋の邊に至つて陣を取る。此日も漸昏ければ、南兵ども戰はん心有らず、遂に城中に引退きけり。次日宋江三軍を引て阜亭山を過り、直ちに東新橋の下に至つて陣を取り、兵を三路に分つて杭州を攻めしむる。一路は歩軍の大將魯智深、朱同、史進、武松、王英、扈三娘等兵を引て湯鎮路より打て出で、杭州城の東門を攻る。一路は水軍の大將は李俊、張順

阮小二、阮小五、孟康等兵を引て北新橋より船を進め、古塘截の西路を過て、菴湖の城の城門を打ち、一路は馬歩水の三軍三隊に分れ、北關門長山門を攻る。第一隊の大將は關勝、花榮、秦明、徐寧、郝思文、凌振等なり。第二の大將は宋江、吳用、戴宗、李逵、石秀、黃信、孫立、樊瑞、鮑旭、項充、李袞、馬麟、裴宣、蔣敬、燕順、宋清、蔡福、蔡慶、郁保四等なり。第三隊の大將は李應、孔明、杜興、楊林、童威、童猛等也。此日宋江兵を分て各進發す。扱第一隊の大將關勝等は兵を引て東新橋に至り、遍く四方を窺ひ見れ共敵一人もあらず。關勝心中に疑ひ、早速橋外に引退いて本陣に人を馳せ、此由を宋江に訴ふ。宋江此言を聞て戴宗を遣し、則ち關勝等に命じけるは、輕々しく兵を動すべからず。毎日兩人の大將出で、自ら敵の動靜を伺ふべし。關勝等これを聞て其言に従ひ、第一日には花榮秦明自ら出で敵の動靜を窺ひ、第二日には徐寧郝思文自ら出で敵の消息を窺ひ、一連に數日輪流出て南軍を伺ひしかども、敵曾て一人も出ず。此日又徐寧郝思文數十騎を引て北關門の邊に至り、遙に城門を望み見るに、城門大に開けてありしかば、兩將齊しく馬を進めて吊橋の邊に至りける處に、忽然として城の上に鼓を鳴し、早くも一彪の軍馬撞て出る。徐寧郝思文を見て、急に引退んとせし時、城の西の方に喊の聲大に起り、又百餘騎の軍馬衝て出、直に徐寧を迎へて相戰ふ。徐寧鎗を拵て大勢の中に擲て入り、良久しく戰ひて再び圍の外に突て出で、頭を廻らして親方の軍馬を見るに、郝思文大勢と戰うて遂に活捉れしかば、徐寧急にこれを救はんとしける處に、一筋の流矢

飛び來て身上に中り、血は條として紅に染にけり。徐寧此矢に痛んで働くこと能ず、急に馬を回して逃走る。敵の六將後を慕うて追來り、已に危く見えし處に、關勝兵を引て此處に馳至り、敵の六將を追散し徐寧を救ひ、遂に陣中に回りて徐寧を見るに、徐寧原毒矢に中りしかば、はや眼を眩し倒れける。關勝大に驚きて宋江に斯と注進す。宋江これを聞て、即日關勝が陣屋に至り、則ち徐寧を見るに、憐むべし徐寧、滿身紅に染て半死半生の體なり。宋江涙を洒で深く嘆息し、早速醫師に命じ療治を加へしかども、毒矢に中りしことなれば、其夜四更の時分に、又眼を眩し人事を覺えざりしかば、宋江天を仰で嘆じけるは、神醫安道全は都に召かへされ、此處又別に名醫もあらざれば、徐寧を救はんこと難かるべしとて、彌涙を流し哭きける。軍師吳用是を諫て云く、宋君先づ本陣に回り給ひて軍事を議したまへ、何ぞ兄弟の情を以て國家の大事を誤ち給はんや。宋江此時人を以て徐寧を秀州に送り、宜しく療治を加へしめけれ共、原毒矢に中り其毒骨髓に透りしかば、半月を過て遂に死したりける。去程に宋江は人を馳て郝思文が音信を聞しめける處に、杭州北關門の城中より郝思文が首を竿の頭に貫て、親方の諸軍に見せけると告げれば、宋江此言を聞てこれを悲しむ。時節徐寧遂に死したりと注進有しかば、宋江益心を痛め、先づ兵を屯して大路を守りける。扱かの水軍の大將李俊等は、兵を引て北新橋の邊を守りけるが、徐寧郝思文討死したると聞て、李俊頗る是を驚き、則ち張順と商議して云けるは、我輩が守る處は獨松關、湖州、德清二處の要害の地なり。抑又賊

兵ら都て此處より出入す。我輩彼が喉の地を守り、敵若左右より夾で攻來らば、我兵必定破るべし。如じ兵を起して西山の内へ突入り、西湖を用て戰場とすべし。殊さら山西の背後は忠溪に通じければ、是又味方の爲に利多からん。張順が云く、我輩半月餘り此處を守るといへ共、敵未だ出て戦ふ事あらざれば、曾て寸功を立す。若山中に屯せば、敵彌戰ふこと有まじければ、何れの日か功を立ることあらんや。我今湖中より水を渡つて、水門より魚のごとく城中に忍び入、暗に火を放ち相圖とすべし。李公若火を見給は、兵を進めて敵の水門を乗取給ひて、宋先鋒に注進し、三路の軍馬一同に並び起て城を攻絡へ、然ば立處に大功を得たまふべし。李俊が云く、此計尤も妙なりといへ共、足下一人敵地に赴き給は、恐らくは誤あらん。張順が云く、我たとひ一命を捨るとも、宋先鋒の爲なれば何ぞ一點も惜きことあらんや。李公必ず遲疑し給ふことなかれ。李俊が云く、足下先止り給へ。我豫じめ宋先鋒に訴へて援兵を求ん間、其節計を行ひ給へ。張順が云く、我急に行て計をなすべし。其跡にて宋先鋒に斯と告給へ。我已に城中に至る時は、宋先鋒も又此消息を聞き給ひて、必ず援兵を差向給ふべし。怎ぞ再三延引することあらんやとて、此夜張順身邊に刀を藏し、遂に西湖の岸に至て、はるかに城郭をみるに、四ツの禁門湖岸に臨で備へ尤も堅し。一ツは錢塘門、一ツは湧金門、一ツは清波門、一ツは錢湖門なり。此西湖は天下無双の絶景なりしかば、東坡詩を題し之を稱美してより以後、許多の詩客文人此地の題詠其數を知べからず。今も猶西湖の十景とて畫にも書ことぞかし。張





順已に西陵橋に至て水面を伺ひ、暗に心中に想ひけるは、我もと潯陽江に在て、多く大風巨濶等に
遇しか共、いまだ曾て此湖のごとき大水を見ず。若此處に於て討死せば我本望なりと悦んで、遂に
衣服を脱で橋の下に閉き、腰の帯に刀を挿し、水中に飛入暗に水底を潜て湖を過來る。此時初更の
天氣にて月色微に明かなり。張順はや湧金門の邊に至りける處に、城中に一更の鼓を打、城外
殊更靜にして只一個の人もあらず。城中女牆の邊には、四五人の兵有て一向城外を望みる。張順
是等の人を見て再び水中に沈み、良久うして又女牆の邊を見るに、四五人の兵は見えざりしかば、
張順直に水口の邊に探り至て、四下を伺ふに、女牆の内より鈴の索を掛て城外に垂しかば、率爾に
近づくべき様あらずして、張順大に焦燥、彼索を取て扯斷んとせし處に、鈴一同に響しかば、城中
の人は聞き大に怪み云く、鈴の索に響きは疑らくは大魚來つて索に觸たるゆゑ、鈴まさしに響しも
のならんとて、盡く水面を伺ひ見けれども、更に一物もあらざりしかば、諸人又心を安んじ歇けり。
此時已に三更の鼓を打ければ、張順又水面に浮んで城の邊に至り、岸に上て城中に入らんと圖りける
が、若城中に人あらば、必ず非命の死を遂べきに、先一試みんと小石を拾ひて城中に投入れば、
城中未だ睡らざる軍士有て大に驚き、城外に人ありと呼りける。張順此聲を聞て又水底に藏れ有城
中の騒動を聞に、餘多の軍士水門を見て云けるは、惟かな、何者の所爲にて城中に石を打けるや。若
水面に船もや有らんとて、衆皆湖中を見けれ共、波風靜にして半隻の船もあらず。軍士ども一同に云

けるは、必定妖怪有て我門を欺くならん。唯打捨て歇めとて、盡く女牆の邊に有て睡けり。此時はや四更の天氣なりしかば、張順ひそかに思ひけるは、若一向遲疑せば少刻天明なるべし。片時も早く城中に忍入んとて、再び岸に上て城内に石を打ければ、曾て騒動せざりしかば、張順心中に悦び宜しく城の牆を越んとて、すべて一二丈上りける處に、城中に梆子を打しかば、諸々の軍士共一度に起上り、手毎に鎗を持て城外を見下し、はやくも張順を看着て、曲者こそ在なれ、それ討取れと騒動す。張順急ぎ水中に跳入て、水底に淬入せんとしけれ共、城中より數千の箭を雨の如く射出しければ、張順遂に箭にあたりて水中に死したりけり。抑此張順は江州にて魚牙主をなせし時、宋江は江州に配流せられ、此時知己となりしより梁山泊に入、水軍頭領にて其武名天下に隠れなく、神醫安道全を建康府より迎へんため、楊子江を渡時も、截江鬼張旺と云ふ海賊に金銀行李をうばはれ、水中に沈められしか共、悲哀の難を凌ぎ、不日に海賊を捉へ、己になせしごとく縛りて水中に沈め、一時に仇を報じ、其他所々の軍に、大功を顯せしこと數盡すべからず、無双の頭領なりしが、一瞬の夢と消失せしは、無慚なりし次第なり。宋江方臘征伐の軍以前、公孫勝は歸山し、蕭讓、金大堅、樂和、皇甫端、安道全は帝都に在り。楊子江を渡りては宋萬が討死を肇とし、焦挺、陶宗旺、鄭天壽、曹正、王定六、韓滔、彭玘、宣贊、郝思文、徐寧、張順と連綿討死し、楊志は病て臥軍に従はず、都て百八人なりし内十八人缺たれば、宋江は申に及ばず諸將愁鬱に迫ること實に理に覺えけり。張順が亡魂靈を現は

すこと、其他杭州の軍事次巻を讀て知るべし。

流布の本に吳値をこしよくと訓は誤なり。又雀或を雀或に作り、通ニ遼海島と有を訓誤り、遼海島と三字の地名とする如き誤り諸所に多し。

九編卷之五

湧金門に張順神を歸す

混江龍李俊は宋公明の本陣に使を馳、浪裡白跳張順唯一人、敵の水門より城中に入らんと申を、再三留むれ共承引なく、強て剛勇にはやり、真如かく々の次第なりと告げ知らせける。宋江是を聞て東門の軍士らに斯と告げ知らせ、此夜帳中に在つて吳用と軍情を商議し、直に四更の前後に至つて頗る疲れしかば、則ち左右の人を退ぞけ、唯獨凡に靠て眠りける處に、忽然として一陣の冷風起りける。宋江駭き起きて燈の下を見るに、一個の人冷氣の内に立ちて、滿身血に染則ち宋江に對して云けるは、某多年宋君に隨ひて恩愛を蒙りしかども、いまだ一二を報せず。今已に湧金門の下にて討たれるゆゑ、特と來つて辭別し奉つる。宋江大に駭きて云、汝は張順にあらずや、先づ近く寄つて我にまみえよとて又傍を見るに、同じき四五個の人、渾身紅に染でたち並べり。宋江分明には見えざりしかども、定めて諸將の内討死したる者どもならんと思ひ、大に聲を放つて哭きける處に、驀然として覺來れば、則ち南柯の一夢なり。帳外に在りし者共、宋江が歎く聲を聞て帳中に進み入り、何事を悲み給ふやと問ひければ、宋江答ていはく、我今怪き夢を見たり。早く軍師を請、夢の吉凶を問はん

とて急ぎ使を遣はしければ、吳用來つてまみゆ。宋江が云、我今夢中に於て、張順並に四五個の人に遇ひけるとて、張順が云しこと一々詳かに語りければ、吳用是を聞て云けるは、張順湖を過て城中に忍び入り、相圖の火を放たんと云けるを、一心思ひにかけ給ふ故、斯る夢を見給ふならん。宋江が云、我張順が形を見しに、渾身血に染で殊更悲き體なりしかば、必定討たれたるに疑あらじ。吳用暫く沈吟し云ひけるは、誠に張順は心靈なる勇士なれば、靈魂來つて宋君に別れを告たることも有るべし。嗚呼惜き大將かなと嘆じける。宋江又云ふ、傍に在りし四五個の人も各血に染で悲しき體なりけるが、しらす誰なるにやと議論し居ける處に、李俊が方より飛脚來つて宋江に見え、張順湖を越えて湧金門の下に至り、不幸にして敵に射殺され、敵其首を得たりと、未だ云も畢らざるに、宋江忽ち地上に倒れ深く是を哭き、只昏々として涙に噎びければ、吳用等の諸大將も各悲嘆に勝ざりけり。張順は原人となり溫和にして、諸將と交はりを睦じうしける故、別して諸人に惜まれける。宋江涙を拭て云けるは、我一生に此のごとき悲しきことはよもあらじ、いかんぞ再び張順を見ることあらんやとて、又茫然と流涕袂を浸したりしかば、吳用等諫めて云、願はくは宋君國家の大事を以て念とし給ひ、兄弟の情を以て自ら尊體を傷ひ給ふことなかれ。宋江が云、我自ら湖中に往て張順を祭るべし。若し然らずんば、豈能此心を慰めんや。吳用諫めて云、宋君自ら敵の險地に至り給はん事大に不可なり。敵もし斯と知るならば、必ず來つて宋君を攻むべし。宋江がいはく、我自ら計あり

何ぞ敵を恐れんやとて、早速李達、鮑旭、項充、李袞等の四將に五百の歩軍を與へ、路徑を窺はしめ、宋江は、石秀、戴宗、樊瑞、馬麟等を從へて五百の軍士を引て、暗に西山の小路より李俊が陣に來る。李俊此消息を聞て途中に出迎へ、直に靈隱寺の方丈に誘ひしかば、宋江又大に歎いて當寺の住職に對面し、則ち經を讀誦せしめ、張順を追薦し、翌日黄昏に宋江又一面の白旗の上に亡弟正將張順之魂と書きて、これを水邊に立てしめ、西陵橋の上に多くの祭物を供へ、李達に計を授けて、北山の路口に埋伏せしめ、樊瑞、馬麟、石秀等にも同じく計を授て左右に埋伏なさしめ、自らは戴宗を從へ四五人の僧を引き、小行山より西陵橋の上に轉り至つて、香花燈燭並に祭物等を供へしめ、宋江當中に在つて湧金門の下に迎ひ、頻りに流涕して張順を祭る。戴宗も又傍に在つて同じく湧金門の下に拜せり。諸々の僧共一同に經を讀みて張順を追薦す。宋江自ら香を拈り酒を奠り懇に張順が靈魂を吊ひける處に、橋の左右喊の聲大に起り、南北の兩山に鼓の聲齊しく響き、兩隊の軍馬突出て宋江を討もらすなと呼ははりける。今此處に突き出でて、宋江を捉んとする大將總て十人あり。南山の方には、吳值、趙毅、晁中、元興、蘇涇等あり。北山の方には溫克讓、霍成、廉明、茅迪、湯逢士等あり。此十八の大將各三千人の勢を引て兩邊より砍て出で、直ちに宋江を望んで馳來る。斯る處に又橋の下に喊の聲起り、左に樊瑞馬麟あり。右に石秀あり。各五千の軍馬を領し一同に並び起り、敵の兩軍を迎へ相戦かふ。南兵共これを見て大に駭き、急に引回さんとしけれ共、宋の兵緊く

追詰散々に打ちければ、溫克讓遂に敗れ、四人の大將を引いて河を過ぎんとせし處に、山の背後より阮小二、阮小五、孟康五千の兵を引て砍て出で、茅迪を生捉湯逢士を擲殺す。南山の首將吳值も又四人の勇將を引き、急に退かんとせし處に、李達、鮑旭、項充、李袞等各勇を奮て緊しく是を打つ。元興、蘇涇、趙毅等を伐て敵兵を過半湖中に追入れしかば、盡く水に洩て死しにけり。城中の軍士共是を見て、大勢城戸を開き急に突出しか共、宋江が軍馬ははや山中に入り、靈隱寺に至り各功を獻じ賞を蒙りける。此時奪取し馬五百餘疋と記せり。宋江又石秀、樊瑞、馬麟等を留めて、李俊と共に西湖の山寨を守らせ、城を攻取らん用意をなさしめ、自らは只戴宗李達兩人を引いて再び阜亭山の陣に馳回る。吳用以下の諸大將各宋江を迎へ陣中に入り、座已に定まりける處に、宋江、吳用に對して云、我此の如く計を行ひ、敵將四人が首を得、且茅迪を活捉り。吳用聞て誠に神妙の計なりと感じけり。宋江いまだ獨松關德清州の消息を聞かざりし故、此日戴宗を彼兩所に遣はしける。戴宗數日を過て本陣に回り、則ち宋江に見えて告げけるは、盧先鋒已に獨松關を過れり。近日定めて此處に至るべし。宋江又問うて云、諸將皆恙なきや。戴宗答て云、我委しく戦ひの次第を聞けり。宋君必ず憂へ給ふことなかれ。宋江猶疑て云けるは、諸將の内討死したる者有るべきに、汝是を藏すことなかれ。戴宗が云、彼獨松關の兩邊は都てこれ高山なり。中央に一筋の道あり。山上に一個の關あり。關の傍に一株の大樹あり。其高さ數十丈にして遍く諸方に見ゆ。其下にはことごとく松の樹

あり。關上に三人の敵將あつて緊しく相守る。第一人は吳昇と云、第二人は蔣印と云、第三人は衛亭と云。最初には時々關を下て林冲と戦ひけるが、林冲已に蔣印に負傷て後は、吳昇敢て關を下らず、唯關上に在つて堅固に守り、其後厲天閨又猛將を引きて關を救ふ。彼四人の猛將は則ち厲天祐、張儉、張縉、姚義等の四將なり、次の日敵關を下り我兵と相戦ふ。賊軍の内より、厲天祐當先に進み出で、呂方と鋒を交、戦五十餘合に至つて、呂方遂に厲天祐を刺伏しかば、敵兵又是に恐れ關を下らず。厲先鋒山の險きを見給ひ、安りに兵を動かさず、先づ歐鵬、鄧飛、李忠、周通等を遣はし山路を伺せける處に、厲天閨豫じめ是を知り、暗に人馬を引き關を下り、先づ周通を討取り、李忠に刀疵を被せり。若し親方これを救ふこと遅りせば、盡く敵に討たるべかりしに、幸ひはやく勢を出し相助けたり。翌日董平此仇を報せんとて只一騎關下に馳せ行き、大に敵を罵りしに、關上より石炮を放つて、董平が左の臂を打ちければ、董平鎗を遣ふこと能はず、再び本陣に歸り、次の日又馳出て仇を報せんと欲しけれ共、厲先鋒堅く制してこれを許し給はざりしかば、第三日の午の上刻董平又張清と商議し、兩人暗に陣中を走り出で、馬にも騎す歩行より、關上に上りける處に、厲天閨張縉これを見て、兩人急ぎ關を下て相關へ、厲天閨先づ長鎗を持つて董平と戦ふ。董平勇を奮て厲天閨を捉んとせしか共、左の臂に疵を被りし故、鎗を遣ふこと自由ならず、遂に敵を捨て退きし處に、厲天閨跡を慕うて追下りしかば、張清是を見て早くも鎗を燃り、只一擲にと厲天閨を擲けるに、天閨原來眼明にして、

手快き者なれば、急に身を扭てこれを避たりしに、張清が鎗想はずも、松の樹に擲著しかば、張清大に焦燥て拽抜んとしけれ共、深く入つて容易拔す。厲天閨此便機に乗じ、再び鎗を燃遂に張清を擲伏せり。董平これを見て大に怒り、又鎗を擧て厲天閨を擲んとせし處に、張縉後に轉て唯一刀に董平を切殺せり。厲先鋒此事を聞て大に憤り、急に援兵を發して敵を討たんとしたまひけれ共、敵早關に上り再び出でず。此夜厲先鋒一つの計を生じ、孫新、顧大嫂夫婦兩人を百姓の形に出立せ、李立、湯隆、時遷、白勝等と俱に深山の小路より關に上せ火を放たしめければ、南兵共大に驚き、敵已に關に上りたるぞ、早く逃よと呼ばはつて、我殿れじと走りける。是に於て厲先鋒大軍を引て關上に上り給へり。扱彼孫新、顧大嫂は吳昇を生捉、李立湯隆は蔣印を生捉、時遷白勝は衛亭を生捉しかば、厲先鋒は此三人を張招討が本陣に引渡しぬ。又董平、張清、周通等が屍を拾せ、ともに關上に葬り、盧俊義自ら祭を遂、厲先鋒は猶關を過て賊兵を追かけ、厲天閨に追付て鋒を交へ、自ら手を下し、戦ひ十餘合にして厲天閨を討取り、唯張儉、張縉、姚義は萬死を通れ逃去ぬ。定めて厲先鋒近く此處に至りたまふべし。宋江此時始めて、董平等が討たれたるを聞き、潜然として涙を流しけり。吳用が云、厲先鋒已に勝利を得て關を乗取し上は、一刻も早く人馬を催し、挟んで南兵を攻むべきに、南兵争か敗れざらんや。宜しく呼延灼が軍馬を以て、救應となし給へ。宋江此義に同じ、先づ李達、鮑旭、項充、李袞等に三千の歩軍を興へ、厲先鋒を迎はしむ。李達大いに悦び即日本陣を打出けり。宋江又張

順を祭らんだため、湖邊に出て不慮に四人の敵將の首を得たるを、張招討へ申し遣はし、生捉し茅廬を檻車に入れて渡しければ、張招討盧俊義より送りし三人共に、一度に引き出だし首を斬しめけり。

張順が魂方天定を捉ふ

こゝに又城の東門を攻むる大將朱同魯智深等は、五千の兵を引て湯鎮の大路より轉て菜市門の外に至り、急に東門を攻め取らんと欲して、魯智深當先に進み、恰も奔雷のごとく吼て敵を罵りしかば、城兵共是を聞て大に驚き、早速走り入つて方天定に斯と告げる處に、寶光國師鄧元覺、傍に在つて此言を聞き、魯智深と云僧戰を挑とや、彼よく鐵の禪杖を使ふと聞き及べり。我彼と步戰をなし雌雄を決せんとて、方天定に此よし奏しければ、方天定大に悦び云、我自ら城樓に上て國師の戰ひを一覽せん。彌勇力を盡すべしとて、八人の猛將を引て樓の上に登りける。此時彼寶光國師五百の歩軍を率して、城外に打ち出でたり。魯智深是を見て云けるは、南軍の内にも又能く禪杖を使ふ僧ありや。任他三百杖を與へんとて、彼鐵禪杖を風車に輪し、直ちに寶光を望んで打つて蒐る。寶光も又禪杖を揮つて相迎へ、兩僧互に武勇を震て五十餘合戰ひしか共、勝負未だ決せず。方天定此體を見て心中に驚き、即ち石寶に對して云けるは、梁山泊の花和尚魯智深と云惡僧ありと聞きしか共、かくまで武勇あらんとは思はざりけるに、豈料らんや寶光國師の勇よりも猶勝りて見ゆるなり。石寶が云、誠に魯智深は萬夫不當の勇ありとは、誰々も聞き及ぶ處なるが、其言果して詐あらずとて深く是を感歎す。

かゝる處に飛脚到來し、北關門の下に又一彪の兵寄來れりと報じければ、石寶大に慌急に北關門に馳行きけり。扱宋の軍中には武行者有つて、魯智深が誤もあらんを恐れ、忽ち兩刀を揮て寶光に砍て蒐る。寶光兩將に敵しがたくや思ひけん、遂に禪杖を挽て城中に逃走る。武行者跡を慕うて追蒐ける處に、城中より又一人の猛將突て出づ、是則ち方天定が手下の大將貝應夔と云者なり。貝應夔鎗を拵て武行者を相迎へ、兩人各勇を奮て十餘合戰ひし時、武行者右の刀を擧げて、貝應夔が鎗の柄を砍折、回す刀にて早くも首を刎たりけり。方天定是をみて大に怕れ、堅く城門を閉さしめて、再び出て戦ふことあらず。此時朱同兵を引て十里餘り退き、堅固に陣を列ねて捷戰のことを宋江に注進せり。宋江は北關門に推寄て戰ひを挑む。石寶、流星鎗を帶し馬に乗り、手に劈風刀を横たへて城外に馳出たり。宋の軍中より大刀關勝當先に騎出し、直ちに石寶を迎へて早二十餘合戰ひし處に、石寶忽ち馬をかへし城中に逃走る。關勝敢てこれを追はず。同じく馬を勒へ本陣に回しかば、宋江問て云、關勝將軍は何ゆゑ石寶を追はざるや。關勝答て云、石寶が武藝我下にあらず、然るに彼馬を回し逃走るは、必定詐の計あらんと思ひ、此故に我彼を追はず。吳用が云、石寶はよく流星鎗を使ふと聞き及べり。彼今逃たるは、定めて關勝を欺いて、流星鎗を使んと圖りしものならん、必ず彼を追ふべからず。宋江是を聞て云けるは、已にかくの如くんば、先づ兵を引かへし、陣を牢んとて、遂に諸軍を引て再び本陣に回り、早速使者を馳て武行者が功を賞しけり。扱又黑旋風李逵等は、盧先鋒を迎へんが爲、歩軍を引て山路に至り

し處に、張儉等敗軍を集て此邊に來りしかば、李達諸將を引て砍て入り、亂軍の中に姚義を打取ける。張儉、張紹、兩人は再び關上に逃回らんと思ひ、半途に至り又盧俊義が軍馬に行遇、大に一陣に破られ、這々山に入り小路より逃走る。盧先鋒人馬を進め緊しく追蒐ければ、兩將馬を乗放て歩行より山を下り、纔一里許逃延ける處に、竹林の内より兩人の大將躍り出で、遂に張儉張紹を生擒けり。此兩將は則ち解珍解寶兄弟なり。盧先鋒是を見て大に悦び、頓て李達等と兵を合せ、阜亭山の本陣に回り、即ち宋江に見え戦ひの始終を語り、董平、張清、周通等が討死を悲みけり。翌日彼張儉張紹を蘇州に引かせ、張招討が本陣に送り、即日これを誅せしめ、董平等が靈前に備へけり。宋江盧俊義に對して云けるは、將軍は旗本の兵を引て德清縣に馳行き、速かに呼延灼を迎へ、當陣に回り給へ。然らば我計を商議して城を乗取べし。盧俊義令を請て早速陣外に打つて出で、直に奉口鎮に至つて、司行方が敗軍に適遇、盧俊義自ら勇を奮て一陣を打破り、緊しく跡を慕うて追討したりしかば、司行方遂に水中に落ちて死しにけり。其餘の軍士らは盡く四面八方に逃散たり。此時呼延灼も又人馬を引て急に打て出で、盧俊義と兵を一處に合せて、阜亭山の本陣に馳かへり、則ち宋江に見えて諸將と共に計を商議す。扨彼張招討は親方の諸將數郡を得たるを聞いて大に悦び、即時に統制等を遣はし、宣州、湖州、獨松關等の地を守らせけり。宋江已に呼延灼が陣中を見るに、雷橫、龔旺あらざりしかば、即ち呼延灼に對して、此兩人がことを問て云けるは、我運拙く近來諸將に別るゝこと多し。兩人はいかんぞや。答て

云、前に德清縣の合戦に、雷橫は司行方に討たれ、龔旺は黃愛を追蒐、想はず溪の内に落ち亂軍に殺されぬ。此時索超は米泉を討取、猶諸軍を進めて黃愛徐白兩人を活捉、司行方は盧先鋒に緊しく追はれ、遂に水中に落ちて死し畢ぬ。其餘の敵兵どもは東西南北に逃散たり。宋江又雷橫龔旺を討せて大に哭き、則ち諸將に對して云けるは、我前夜夢中に於て張順を見し時、其傍に猶四五人鮮血に染て在りけるが、是則ち董平、張清、周通、雷橫、龔旺等が陰鬼なり。我若し杭州を得ば、多く高僧を請待して法事を設け、懇に諸將の靈魂を追薦すべしとて、此日は先づ牛を殺し、馬を宰て三軍を賞しけり。次の日宋江又諸大將を分て所々の城門を攻めさしむ。副先鋒盧俊義は、林冲、呼延灼、劉唐、解珍、解寶、單廷珪、魏定國、陳達、楊春、杜遷、李雲、石勇等十二人を引いて杭州城の候潮門を攻め、花榮、秦明、朱武、黃信、孫立、李忠、鄒淵、鄒潤、李立、白勝、湯隆、穆春、朱貴、朱富等十四人は同じく艮山門を攻め、李俊、阮小二、阮小五、孟康、石秀、樊瑞、馬麟、穆弘、楊雄、薛永、丁得孫等十一人は同じく靠潮門を攻め、朱同、魯智深、武松、史進、孫新、顧大嫂、張青、孫二娘等八人は、菜市橋等の門を攻め、李應、孔明、楊林、杜興、童威、童猛、王英、扈三娘等八人は、專ら陣中のことを窺て所々の救應をなす。正先鋒宋江は、吳用、關勝、索超、戴宗、李逵、呂方、郭盛、歐鵬、鄧飛、燕順、凌振、鮑旭、項充、李袞、李衮、宋清、裴宣、蔣敬、蔡福、蔡慶、時遷、郁保四等二十一人を引て杭州城の北關門を攻め、宋江已に諸將の手分を定め、自らは右二十一人の大將を引いて、先づ北

關門に寄來り、鼓を響せ鐘を鳴らして頻りに戦ひを挑む。此時城門大に開きて石寶真先に馳出、我に敵せんと思ふ者あらば、早く出て雌雄を決せよと、大音聲に呼ばはりしかば、索超聞きも肯す大斧を揮て陣前に砍て出で、直ちに石寶と馬を交へ、はや十餘合戦ひける處に、石寶急に馬を回し逃しかば、索超猶怒て追かくる。關勝是を見て大に驚き、索將軍敵を追ことなかれ、石寶詐の計ありと未だ呼ばはりも了らざるに、石寶早くも流星鎧を飛せ、索超が眉間に打着しかば、索超忽ち馬より下に落ちたりけり。鄧飛索超を救はんと欲し、馬を飛ばせ鎧を拵て馳出でける處に、石寶再び勇を奮て鄧飛と戦ひ、只一刀に鄧飛をも砍つて落し、則ち手を舉げて親方の勢を招きしかば、彼寶光國師數人の猛將を引て城外に砍て出で、宋江が陣中に亂れ入つて散々に打ちけるに、宋の大軍大に敗れ、各北を望んで逃走る。宋江危ふく見えし處に、花榮秦明等兵を領し横合より擲て入り、幸に敵軍を追退けて宋江を救ひけり。石寶は大に一陣を破り、歡び勇で城中に引かへしぬ。宋江は敗軍を引て阜亭山の本陣にかへり、只鬱々として索超鄧飛が討死したることを悲みしかば、吳用これを諫め、宋君先づ哭きを休給へ、今城中には許多の猛將あり、只宜しく計を施し城を攻取り給はん事、是れ最も肝要なり。宋江問て云、親方の大將討たれたる者多くして、諸軍勢都て辟易す。軍師いかなる計を以て城を攻取り給はんや。吳用が云、親方再び兵を引て北關門を攻るならば、城兵必ず出て戦ふべし。此時我兵伴て敗れをなし、宜しく敵を誘て城を離れしめ、則ち其便機に乗じ、相圖の石砲を放たせ、

四方より一度に起つて總攻をなさば、全き勝を得て大功を立つべし。宋江これを聞て其議に同じ、翌日關勝に兵を與へて北關門に遣はしければ、石寶これを見て、急ぎ城外に突て出で、直ちに關勝を迎へ十餘合戦ひし處に、關勝馬を回へし逃しかば、石寶勢ひに乗じ追蒐る。此時凌振、頓て相圖の石砲を放ちけるに、四方の寄手此響きを聞き、一同に喊の聲を擧げて、城の四門を緊しく攻む。こゝに又副先鋒盧俊義は林冲等を引て、候潮門の邊に發向しける處に、城門閉さずしてありければ、劉唐これを見て功を立てんと欲し、唯一騎馬を飛ばせ城中に馳入らんとしける時、城の上より多く木石を投て遂に劉唐を打取りけり。林冲呼延灼大に驚き、急に盧先鋒に見えて劉唐が討たれたることを告げ知らせ、先づ兵を退けて宋江が本陣に人を馳せ、劉唐一騎馳せに進で討たれたると報じければ、宋江此よしを聞きて大に哭き、我昔日鄆城縣に於て劉唐と義を結び、俱に晁天王に従て梁山泊に在り。多年戦勞を盡すといへ共、未だ曾て樂を享ず、今日已に討死したるこそ哀れなれとて、則ち一首の詩を賦して追悼す。其詩にいはいはく、

百戰英雄士 生平志未降 忠心扶社稷 義氣助家邦
此日梟鳴轟 何時馬渡江 不堪哀痛意 清泪逐流淙

宋江詩を吟じ畢て兩眼に泪を洒ぎけり。吳用が云、此度劉唐を失ひしは、計の妙ならざるに因てなれば、都て某が誤ちなり。宜しく諸門の軍士を收め、別に又良計を商議せんに、願はくは宋君哭きを休給

へと諫めしか共、宋江は猶頻りに憤り、一刻も急に仇を報じ恨を雪んと欲し、一向是を嘆じけり。時に黒旋風李逵躍出て云けるは、宋先鋒心を安んじ給へ。我明日鮑旭、項充、李袞等と共に兵を引いて打て出で、彼石寶を捉へて一覽に具ふべし。宋江が云、石寶は原萬夫不當の勇士なれば、いかんぞ容易彼を捉んや。李逵が云、彼たとひ三頭六臂の人たりとも、我決して彼を生擒べし。若し我彼を生捉すんば、再び宋君に見ゆまじ。必ず憂給ふことなかれとて、遂に己が陣屋に歸り、彼の鮑旭、項充、李袞等三人を迎へ語りけるは、我輩四人は従來一處に在つて戦ひをなし、互に相助けて同じく功を建り。我今日宋公明の前にて誇言を吐、明日石寶を捉んと約せり。足下等三人も我を助けて力を盡し給へ。鮑旭が云、我四人は就中心服の朋友なれば、心を齊うし力を合はせ、彼石寶を生擒て武名を遠近に振ふべし。李公宜しく悦び給へとて、各虎の勇を催しけり。次の日李逵等四人飽まで酒を飲で大に酔ひ、直に宋江が帳前に至つて、合戦を一見し給へと云けるに、宋江四人の者が酔たるを見て心を安んせず、則ち李逵等に向つて云けるは、汝四人徒に一命を傷ふことなかれ。李逵が云、宋君何ぞ我輩を軽く見給ふや。少刻石寶を捉へて帳前に引かしむべし。宋江が云、已に此の如くんば、我敢て戦ひを一覽せんとして、關勝、歐鵬、呂方、郭盛等四人を引て、北關門の下に推寄せ、鼓を打ち喊を揚て戦ひを挑せける。此時李逵二ツの斧を持つて眞先に進む。鮑旭、項充、李袞等も各軍器を持つて馳出たり。石寶是を見て大に怒り、手に劈風刀を提て馬を城外に騎だし、吳直、廉明を左右

に従へ、李逵等を相向ふ。李逵等雷の如く吼て、四人齊く石寶を目がけ欲て掛る。石寶刀を揮て相交へ、はや十餘合戦ひし處に、李逵斧を輪はして石寶が乗たる馬の足を砍しかば、石寶馬より跳下り、後軍の内に躲れける。鮑旭早くも刀を擧て廉明を砍て落し、尙項充李袞と俱に勢ひに乗じて散々に攻戦ふ。宋江是を見て、三軍を進め直に城下迄攻来る。城中には兼て期したることなれば、樞木炮石雨のごとく打蕩たり。宋江此體を見て軍士を傷ふことを恐れ、急に令を下し引退く。鮑旭は只獨り城内に突入ける處に、石寶城門の傍に伏して横合より砍しかば、憐むべし、鮑旭こゝに於て死しにけり。李袞、項充、李逵三人は此仇を報せんと欲しければ、敵はや城門を閉しかば、奈何ともすることなく、空く牙を咬で引きかへす。去程に宋江は又鮑旭を討たせ、彌憂を添覺す涙を流しければ、李逵、項充、李袞等も俱にこれを哭きけり。吳用が云、此計もまた良策にあらず、敵の副將廉明を討ちしといへ共、鮑旭を失ひしかば、親方却つて損ありとて、諸將各是を愁る折節、解珍解寶帳前に來つて宋江に告げるは、某ら兄弟南門の外二十里を馳て范村と云ふ處に至り、暗に敵の動靜を伺ひし處に、江邊へ數十艘の船あるを見、則ち其船に乗つて來歴を問ひしかば、船中の者ども答て云、我此船は方臘が軍中の兵糧を獻する船なれ共、今戦ひの最中なるに依て、暫く此處にありて便機を伺ふと告げる故、某ら兄弟船中の者共を切殺さんと欲しければ、彼皆涙を流して云、我輩は都て宋朝の民なれ共、不幸にして方臘が横行に逼められ、已ことを得ずして多くの兵糧を彼に獻す。然れ共再び宋朝の民と

ならんことを待居けるに、今日想はず横死を遂ん事こそ恨なれとて、一向哭きしゆゑ、某ら安りに殺すに忍びず先づ一命を饒せり。此上にも又命令を奉はつて宜しく行はんと欲し、早速伺候して是を訴へ奉つる。吳用此言を聞いて大に悦んで云、是則ち天の賜ふ便機なり。其船に就て大功を立つべしとて、即時解珍兄弟に命じけるは、爾兩人を首として凌振、杜遷、李雲、石勇、鄒淵、鄒潤、李立、白勝、穆春、湯隆、王英、扈三娘、孫新、顧大嫂、張青、孫二娘等を帶して、各水手の體に出で立ち、宜しく城中に紛れ入つて相圖の石砲を放つべし。然らば我兵を發し救應をなさん。解珍解寶命を受けて云けるは、已にかくの如くんば、彼船中の首たる者を誘引せんに、宜しく計を示し給へとて、再び往て糧船に乗り、袁評事と云老人を誘て、又宋江が帳前に至れり。宋江則ち袁評事に向つて云けるは、汝已に宋朝の民ならば、我令に従ふべし。我今汝が船に就て計を行なはんと欲す。事成るの後は重く汝を賞せん、必ず遲疑することなかれ。袁評事謹んで命に従ひしかば、許多の軍士共彼糧船に取り乗つて水手と打難り、頓て諸々の船を漕出す。王英、孫新、張青、扈三娘、顧大嫂、孫二娘等、三對の夫婦は各稍公稍婆の服を着し、船の頭に立並ぶ。其餘の勇士共は都て船の内に隠れけり。漸城近く至りしかば、解珍解寶袁評事に従うて城下に馳行、早く城門開き給へと呼ばはりけるに、守門の軍士共詳かに來歴を問ひ、頓て方天定にかくと報す。方天定これを聞て則ち吳用を遣はし、船中の兵糧を改めしむ。吳用命を奉はりて城外に出で、彼の糧船共を一々査て再び城内に回り、即刻方

天定に相違なきよしを訴へければ、方天定六人の大將に一萬の人数を與へ、東北の角を攔らしめ、彼袁評事をして諸船の兵糧を城中に運しむ。此時解珍解寶并に諸の猛將共、各水手の體に出立ちて、兵糧を城中に運び、暫くの間に盡く運び終りしかば、彼六人の大將も軍士を引て城内に入りけり。扱宋の兵どもは頓て其跡より寄來り、城を重々に圍で堅く陣勢を列ね、皆勇をなして控へたり。此夜二更の时分に、凌振暗に吳山の頂に上り、九相子母と名づけたる相圖の砲を放ちしかば、解珍等諸大將各火把に火を著て、一同に喊の聲を揚げるに、城中俄に騒動し、宋の兵城中に充滿したる勢ひなりしかば、方天定大に駭き、早速馬に乗て馳せ出でけれ共、諸門の軍士ら老早八方に逃散けり。宋の兵共は功を争て武勇を振ひ、喊き叫んで城を攻む。此時又李俊は兵を引いて淨慈港に來り、多く敵船を奪取て湖の内より兵船を進め、直ちに湧金門に至りて岸に上り、諸將各勢ひに乗じて水門を奪ひけり。李俊石秀當先に進んで城中に突いて入り、東西南北に馳せ轉て散々に攻め戰ふ。唯南門のみ圍ざりしかば、敗北の敵軍共都て南より逃出る。方天定は僅數輩の歩軍を従へ、這々南門の外に脱れ出で、直ちに五雲山の下に至りし處に、江中より一個の人現れ出で、口中に一つの劍を啣で岸に跳上り、方天定を望んで急々に馳來る。方天定此勢ひを見て大に怕れ、馬に鞭て逃走らんとしけれども、怪い哉此馬曾て進まざりしかば、彼人遂に趕着て方天定が首を刎落し、則ち其馬に打ち乗つて、手に頭を提げて直ちに進んで城中に跑來る。

宋江智をもつて寧海軍を取る

此時林冲呼延灼は敵を追て六和塔の邊に至りし處に、一個の人手に頭を提馬に乗り、恰も飛ぶがごとくに跑来る。呼延灼此人を見るに、是則ち船火兒張横なりしかば、張公は何れより來り給ふやと問ひければ、張横肯て答へず、急に馬を飛ばせて宋江が前に至りける。宋江是を見て、張横汝は何ゆゑ水に濕て此處に至るやと問ひければ、張横手に提たる頭を棄て宋江を拜して云、我は是張横にあらず。宋江又怪んで問けるは、汝若し張横にあらずんば誰ぞや。張横答ていはく、我は是張横が弟張順なり。嚮に湧金門の外にて敵に討たれ、一點の幽魂離すして水中に飄蕩しける處に、西湖の龍王我忠義を感じ、水府に留め懇に厚意を垂て金華太保の職を授けて神たらしめり。然れ共我怨未だ滅せず、唯彼方天定を殺さんと欲しける。折節我兄張横江中より來りし故、幸ひ其體を借て魂を移し、則ち岸上に跳上り、五雲山の下にて方天定を殺し、我平生の怨み稍安じぬる間、直に來つて宋君にまみえ奉つる。舊日の洪恩未だ曾て是を忘れずと云終り、轟然として地上に倒れける。宋江大に感歎して自ら扶け起しければ、張横忽ち眼を開いて、宋江并に諸大將を見、某いかんがして此處に至りぬるや、疑ふらくは夢ならんと云て、唯呆れたる計りなり。宋江涙を流して云けるは、汝が弟張順汝が體を假て、方天定を殺せり。汝すべからく心を收むべし。是夢にあらずるなり。張横是を聞て問けるは、我弟張順我體を借たること、偏に其意を曉しがたし。願はくは緣故を語りて聞かせ給へ。宋江が云、

汝は未だ張順がことを聞かざるならん。彼嚮に城中に忍び入り、相圖の火を放たんと欲し、獨湧金門の邊まで馳行きける處に、不幸にして敵兵に見顯はされ、遂に亂れ矢に中て死したりと、いまた云も畢らざるに、張横大に哭て眼を眩し、忽ち昏昏として座上に倒れける。宋江これを見て甚だ驚き、自ら水を以て面に灌ぎ、種々藥を用ひ一向其名を呼ばはりしかば、良久しうして後甦生したりといへ共、猶いまだ人事を分たざれば、宋江諸將に命じて醫を需て療治せしめ、先づ帳下に息ましめ、已に辰の刻にも成りければ、衆將すべて營前に聚れり。其時宋江、裴宣、蔣敬に令して衆將の功を記せしむるに、此度の一戦に李俊石秀は吳値を生捕にし、三員の女將は張道原を生捕、林冲は蛇矛を以て冷恭を戮殺し、解珍解寶は雀或を殺しけり。只石寶、鄧元覺、王勳、晁中、溫克讓五人は何れの地へか落行けん、跡影しらす成りにけり。其時宋江は先づ榜を出して百姓を安撫し、三軍を賞勞、吳値張道原を張招討の軍前に解し、各首を斬て軍門に梟、扱多くの糧米を張招討に獻じ、袁評事申文保を富陽縣の令となしぬ。衆將已に城中に至つて休息せんと欲する處に、左右より呼んで阮小七江裏より岸に登り、城に入り歸り來れりと告げれば、宋江帳前に召て事の子細を問ひけるに、阮小七對ていはく、小弟張横、候健、段景住三人同じく水手を帶て海邊に至り、舟に乗じ海鹽の邊に徘徊し、暗に錢塘江に忍び入らんとせし處に、期ざる大風に遇て大洋に飄泊し、急に返り來らんとせしに、又大風に盡く船を打破られ、衆人都て水に落候ひき。候健段景住の二人は水性を知らざれば水に溺れ死し、張横は五

雲山の邊にて岸に上ると見えしが、遂に行方をしらす、衆の水手も四方に散亂せり。某は水を泳て
 赭山門に至りしに、又大潮に漾されて、漸昨夜、半播山に至て岸に上り、遙かに城中に火起るを見
 て、又連珠砲の響を聞き乃ち想へらく、是必ず我宋頭領杭州城に在つて相戦ふならんと、これによ
 つて江裏の捷徑より返れり。知らず張横は回候や否。其時宋江具に張横がことを説、且張横最早荒
 増全快の體なれば、則ち呼び出して阮小七に遇しめ、舊のごとく水軍を領せしめ、其夜は各歇みけ
 る。已に翌朝にも成りしかば、宋江令を傳へて水軍の頭領を召集め、船を用意し睦州へ進發す。張順
 かくまで靈を現すこと、世の有る所にあらずとて、船を湧金門に繫しめ、西湖に一字の廟を建立し、
 金華太保の廟と名づけ、張順が功を委さに朝廷に奏聞せしに、聖旨勅下つて金華將軍の號を賜はり
 けるは、芳名末世に傳へて張順死後の本望と云べし。宋江是を大に喜び、自ら香を炷て祭り畢り、直
 ちに淨慈寺に到り、暫く軍馬を休めけり。宋江熟々思へらく、杭州も難なく退治なしかれ共、江を渡
 て以來餘多の將佐を失ひしこと、返すも殘念なりと、心中常に悲愴にたへず、因て多くの僧に命
 じて一七日の法事を修せしめ、多く討死せし亡者を追善す。毋方天定が宮中に、有ると所有禁物を
 盡く打ち毀ち、有合し金銀寶貝羅紗緞子の類、殘らず軍卒に分與へけり。是に依て杭州の百姓悉く
 安堵の思ひをなし、酒宴を設けて慶賀せり。又向に柴進燕青敵地の動靜を伺んため、宋江に辭し去て、
 今は方臘が巢穴を探ること次巻に詳かなり。申文保は袁評事同僚根米を送り來りし民
 の名なりこゝに其ことを略せると覺ゆ。

流布の通俗水滸傳に、此巻の獨松關の戦ひの處に、蔣印は林冲に討たるとあつて、其後に又李
 立、湯隆、蔣印を生捉とあり。林冲は蔣印に負傷たるを討つと誤たりと覺ゆ。又蔣卯と書たるは、
 印の字を見誤りたるなり。又云、杭州の方天定に従ふ二十四人の大將の内、薛斗南が名前卷に初め
 て出で大尾迄落着なし。亂軍に討死とか戰場より身を遁れ、終りをしらすとか有るべきことなり。
 外二十三人と四人の元帥は各文段に明らかなり。

九編卷之六

盧俊義兵を歙州道に分つ

時に宋江は軍師吳用と商議し、軍馬を睦州に回し、自ら發向なさんとせし時、忽ち村おくりに使來りて、都督劉光世并に勅使御出ありと告げれば、宋江衆將を引率し、北關門を出て勅使を迎へ城中に入れば、勅使頓て城内の行宮に座し、勅書を高らかに讀揚て云く、此度先鋒宋江衆將と共に方臘を征伐し、屢大に戦ひ功ある故に、褒賞として皇封の御酒三十五瓶錦衣三十五領を給へり。其餘の偏將には其の功に依て、各段疋の賜ありと呼りければ、宋江謹んで御賜を拜し、三十五の衣袍御酒を見て、覺えず簌々と涙を落しければ、勅使恠で其故を問ひけるに、宋江答へて云く、今朝廷より三十五の袍酒を賜るに付て、悲傷のことこれあり。願くは其故を聞給へ。此度方臘を征せん爲、都を出し時までは、我等義兄弟相揃ひ、唯其内公孫勝は故郷に歸りしのみなる處、楊子江を渡りしより、追戰場に屍を晒し、首を敵の軍門に懸せらるゝ者頻りに多く、就中張順など戦死しても、希有の功を顯しながら、御賜を拜することも叶はず。朝廷には元來其事の巨細を知し召れず。今かく其數の賜を見て、我輩豈悲傷に堪んやとて、委細に語りければ、勅使も又悲愁限なくして云く、かくのごとき義

士らを損せしこと誠に命と云べし。我京に返らば必ず天子に奏聞し、各追號を給て、神に祭るべしと有ければ、宋江其厚意を謝し、其時大に宴席を設け、勅使及び劉光世を饗應せり。宋江及び衆將は各對席に座して御賜の酒を戴き皇恩を謝し、扱ひたる衆將は各位牌を設け、御酒及び一領の錦衣を供へ香を焼て祭を設け、其内一瓶の御酒一領の錦衣を留め、宋江自らは是を持て張順の廟裏に至り、錦衣を取て張順の泥神に穿せしめ、御酒を灌て享祭をなせり。去ほどに勅使は留ること數日にして、京師に返り給ふ。覺えず光陰矢のごとく、已に十餘日過ければ、張招討の方より使者到着し、書翰を以て宋江に軍兵を進んことを催促す。宋江謹んで是を承り、吳用と共に盧俊義を請て商議しけるは、此處より睦州へ行には、大江に沿て直に賊人の巢穴に至る。又歙州へ赴くには、昱嶺關を過て都て小路なり。今此所に軍兵を二ツに分たん。しらす賢弟何れの方へ向ひ給ふや。盧俊義が云ふ、大將の部將を遣ふは、猶水の船を行がごとし。只宋頭領の嚴令に任すべし。宋江が云く賢弟の云處其理に當れりといへども、天命の注定なきにしもあらず。しかじ神明に告んとて自ら二ツ鬪子を成し、各配分の人數を書付、香を炷て拈りければ、宋江は睦州盧俊義は歙州に當りけり。宋江盧俊義に向て云、傳へ聞く方臘今清溪縣幫源洞中にありと。賢弟歙州を攻破りなば、軍馬を彼地に屯し、其まゝ走夫を以て知せ給ふべし。ともに軍馬を合せ日限を約し清溪洞を攻ん。盧俊義謹んで領承し、宋江に軍馬の分握をなさんことをぞ請にけり。其時宋江兩所に向ふ軍將を配分す。先づ睦州の方へは、先鋒

使宋公明を初として、其附屬諸將には、

- 軍師 吳用 關勝 花榮 秦明 李應 戴宗 朱同 李逵 魯智深
- 武松 解珍 解寶 呂方 郭盛 樊瑞 馬麟 燕順 宋清
- 項充 李袞 王英 扈三娘 凌振 杜興 蔡福 蔡慶 裴宣
- 蔣敬 郁保四

又水軍の頭領には、

- 李俊 阮小二 阮小五 阮小七 童威 童猛 孟康
- 猛將都て三十七人、其勢都合三萬餘と聞えし。先づ烏龍嶺を奪うて睦州を攻破んとす。又歙州へ向ふ
- 軍勢は、副先鋒盧俊義を初として、其付屬諸將には、
- 軍師 朱武 林冲 呼延灼 史進 楊雄 石秀 單廷珪 魏定國 孫立
- 黃信 歐鵬 杜遷 陳達 楊春 李忠 薛永 鄒淵 鄒潤
- 李立 李雲 湯隆 石勇 時遷 丁得孫 孫新 顧大嫂 張青
- 孫二娘

猛將都て二十九人其勢都合三萬餘と聞えし。盧先鋒は許多の軍馬を引率し、吉日を擇で劉都督に辭別し、又宋江と分れ、杭州を望んで發足す。先づ昱嶺關を奪取て歙州を攻取んと、各勢ひ込で急ぎけ

り。扱て宋江は多くの軍馬軍船を整へ、頓て軍勢の手配も定りければ、已に出軍の用意をなしにけり。此時杭州の城裏、城外、瘟疫大に流行し、十に八九は其病に染ざるはなかりけり。宋江が軍中にも張横、穆弘、孔明、朱貴、楊林、白勝の六將病に臥し危ふかりければ、共に軍に従ふこと能はず。宋江は穆春朱富の二人を呼て杭州に止り、六將の病を看病せんことを懇に云付、自ら三十七人の正將を隨へ其勢三萬餘騎、水路に隨つて富陽縣を望んで發足せり。去ほとに柴進は燕青を家僕の貌に出立せ、道を急ぎ海鹽縣の海邊に至り、便船に乘じ越州を過ぎ、諸暨縣を経て睦州の界に至りけり。此處より已に方臘の取掠し地なれば、所々に關所を設けて猥りに往來の人を通さず。其時柴進燕青と共に關所を過んとせし處に、關守叱て留めければ、柴進告て云く、某は中原の一秀士なり。能く天文地理の學に通じ、陰陽風雲の變を辨じ、又能く三光の氣色を知れり。又九流三教知らざる處なし。比日は夜々南の方をのぞむに、江南の地にあたつて天子の氣あり。故に上國に至れり。公が輩何の故に賢路を閉塞し給ふや。關守柴進の言語の俗ならざるを聞て、其姓名を問。柴進詐て云ふ、某は中原の一學士姓は柯名は引と申者なり。今主從二人上國に來れり。別に他意なし、其天子の氣あるを懸へばなり。其時關守柴進を住め、使ひを睦州に遣し、右丞相祖士遠、參政使沈壽、僉書桓逸、元帥譚高の四人に斯と報じければ、四人は其儘使を以て柴進を迎へ、睦州城裏に請ひ各々禮義を述にけり。元來柴進は眉清目秀で、一表凡ならざるの人物にして、言語又俗ならざれば、右丞相祖士遠の輩、毫も疑ふ心な

大に悦び、僉書桓逸をして柴進を引き、清溪の大内に朝覲をなさしめんと欲しけり。原來方臘の行宮は睦州歙州の兩所に有といへども、今は睦州清溪縣、幫源洞の行宮を以て本城と定め、内に六部の總制あり。此時柴進燕青は、桓逸に従つて清溪の帝都に至り、先左丞相婁敏中に見參す。柴進高談雄辯自ら胸中の學を叙ければ、婁敏中大に喜び、柴進を留め懇に管待けり。原來此婁敏中は清溪縣の教學先生なれども、學問甚だ博からざれば、今此柴進の書を知り禮に通じ、又天文地理を説て辯舌水の流るゝがごときを見て、大に驚歎し、其夜兩人を私衙に宿せしめ、酒食を具へ懇に饗應し、翌日五更三點自ら朝服して、清溪の内裏に朝勤す。方臘王は左右に文武の百官を隨へ、後には嬪妃綵女多くの美人を隨へ、階下の武士各軍器を携へり。其時殿頭官大に呼て云く、若し事あらば班を出て奏すべし、無事なれば簾を捲て退くべし。丞相婁敏中、衆に進み出て奏して云く、傳へ聞中原は、孔夫子の郷なり。今其地に一人の賢士あり。姓は柯名は引と申候ひき。此人文武兼備し智勇ならび足れり。又能天文地理に通じ風雲の變を知り、天地の氣色を辨す。三教九流諸子百家の學に、通曉せずといふことなし。今江南に天子の氣有を知り、故特上國に來て禁門の外に伺候せり。臣謹んで傳宣す。方臘王が云ふ、已に賢士あらば早く朕に見えしめよ。其時婁敏中謹んで門吏に命じ、柴進を引て殿下に至りければ、並居たる群臣各萬歳をぞ唱へける。方臘熟々柴進を見るに、一表の人物凡俗の們にあらず。龍子龍孫の氣象有ければ、心中に喜び問て云、賢士の云處を聞に、今江南に天子の氣ありと、其氣何

れの所にありや。柴進奏して云、臣柯引は先祖より中元の地に住居せり。某幼年にて父母に離れ、隻身にして學業をなし、盡く先賢の秘訣を受、又祖師の玄文を學べり。頃日は夜々天の乾象を觀に、帝星明朗にして東吳の地を照せり。是に依て千里の遠を辭す、氣を望んで江南に至り、天子の氣正に睦州より起、今天子の聖顔を拜するに、恰も龍鳳の姿を抱き、天日の表を挺でり。正に是其氣に應ず、豈欣幸の至りに勝ざらんや。方臘王が云、朕久しく東南の地を有と雖、近來宋江に侵され、數箇所の城府を奪れ、敵兵漸吾地に攻寄んとす。是を奈何せんや。柴進奏して云、某古人の言を聞に、得之易、失之易、得之難、失之難と申事の候。凡古來開國中原を掌握し給ふ君は、千萬の艱難危急を経て、而して太平を得、基業を成給ふ事青史に明なり。今陛下東南の地を開基し給ひしより、勢に乗じ許多の州郡を得給ふは、誠に天より授け給ふなり。縱令宋江に數ヶ所を奪れ給ふ共、久しからずして氣運復君に歸せん事、止江南の地のみにあらず、中原の社稷を得給ふ事必然なるは、豫め天象に現れ、凡慮を以て思ひ測るべからざる所なりと演ければ、方臘王限りなく喜び、柴進に中書侍郎の官を賜ひ、錦の櫂を設け座せしめ、御宴を賜うて款待あり。是より以後柴進は日々に召出され、いつも美言を以て方臘に諛ければ、未だ半月にも過ぎるに、方臘を始として内外の官人、皆柴進に親で喜ばざるはなかりけり。方臘は熟々柴進が人物衆に超れ、又事を做て公平なるを見て愛慕の心に堪ず。左丞相婁敏中を媒酌となし、其愛女金芝公主と云るを、柴進に賜て妻となさしめ、主爵都尉の

官にぞ封じけり。扱て燕青は名を隠して雲壁と改めければ、人皆雲奉尉と呼にけり。柴進は金芝公主の女婿となりてより、日々宮殿に出入しては、後堂深廳迄も自由に立入て、方臘王の金枝玉葉なれば、諸官敬服すること殊に甚しく、毎に王と軍事を議し、内苑までも至りければ、宮中の案内盡く知らざる處なし。或日柴進奏して云く、某常に演ることく、陛下真に天子の氣象ありといへ共、猶星に侵され給ひて、今年半の間は御心を安じ給ふまじ。直に宋江を亡し其手下の將を一人も止す斬盡さば、罡星おのづから退くべし。其時こそ勢に乗じ席のごとく捲、中原の地を打取て基業を興立し給ふべし。方臘王が云く、朕が帥る愛將武勇の者多しといへども、近來過半宋江が兵に打取れ、朕に於て手足を缺たるごとく想ふ。是を奈何せんや。柴進又奏して云く、某昨夜天文を見て君の氣數を考ふるに、將星究めて多しといへ共、唯十位の星の象は君を守護するあり。是まさに基業を起すの星象なり、其餘は皆正氣にあらず。又別に二十八宿の君を輔佐するあり。臣潜に想ふに、宋江が軍中にも又十餘人は來つて君に降る者あらん。是們は皆天の注定給ふことにして人力の爲所にあらず。ことごとく君を輔て基業を起す良臣に候はんと、其理を盡し説ければ、方臘王大に悦んで、其日は酒宴を設け柴進を款待けり。去ほどに宋江は大隊の軍馬を引領し、杭州を離れ富陽縣を望んで進發す。此時寶光國師鄧元覺并に、石寶、王勳、晁中、溫克讓は、五人共敗殘の軍卒を集めて、富陽縣の關所を守り、使を睦州に遣し、右丞相祖士遠に救の兵を求しかば、祖士遠即日正指揮白欽、副指揮景德二人を大

將とし、其勢都合一萬餘騎を相添て富陽縣へ遣しけり。此白欽景德は都て萬夫不當の勇士なれば、寶光國師は龍の雲を得たる心地して大に喜び、軍勢を一處に合せ、陣を富陽縣の山頭に取り、敵の來るを待かけたり。宋江は大軍を引率して、七里灘といへる處を過けるに、寶光國師山の上より是を見て、誰かあへて宋江を討取んやと呼りければ、石寶直ちに流星鎗を帶し劈風刀を提げ、山を下つて宋江を討んとす。大刀關勝是を見て、宋江を討せじと馬を躍せ迎へんとせし處に、呂方大に呼つて云く、鶏を割に何ぞ牛刀を用んや、兄長暫く待給へと云も終らず、手に一枝戟を提げ、馬を縦ちて石寶に向へば、石寶も又劈風刀を輪して兩人相戰ふこと五十餘合、未だ勝敗分たざれば、郭盛傍より是を見て、又手に戟を持馬を倚せ呂方を助く。石寶は猶も戰ひて精神益盛なり。其時宋江が水軍の輩順風に乗じ、追々七里灘に着船したりしかば、寶光國師は敵軍の多く益たるを見て、石寶に過ちあらんことを恐れ、急に鑼を鳴し軍を收んとす。其時石寶は山上の鑼の響を聞て、軍を引かへさんと欲ひけれ共、呂方郭盛左右より夾で攻ければ、又戰ふこと五六合に及びし處に、宋の軍中より朱同馬を躍せ鎗を挺へ、石寶の背後より突かけければ、石寶は三人の敵を受けて叶すとや思ひけん、富陽山を望んで敗走す。其時宋江鞭を以て三軍を下知し、直ちに富陽山へと推寄ける。寶光國師石寶等は、一戰に打負け桐廬縣まで退きければ、宋江は猶も追て白蜂嶺迄至りけり。

宋江大に烏龍嶺に戰ふ

此時已に黄昏に及びしかば、暫く其地に軍馬を休め、桐廬縣を攻る用意をなしにける。先づ解珍、解寶、燕順、王矮虎、一丈青の五人に命じ東路へ向はしめ、李逵、項充、李袞、樊瑞、馬麟の五人をして西路へ向はしめ、又李俊、三阮、二童、孟康の七人は水路より進ましめ、各桐廬縣を討しめけり。去程に三路の軍兵桐廬縣の東門に至りければ、已に三更の左側なり。其時寶光國師は石寶と共に帳中に在つて、軍事を商議して居けるが、忽ち炮聲を聞て大に驚き、何ぞあへて低敵べき、馬に乗べき間もなく、甲盔を打捨て各命を遁れけり。温克讓は衆人に後れて誰一人小路を望んで遁れければ、王英一丈青夫妻はやくも見つけ、横に拖倒に拽て生捉れり。李逵は項充、李袞、樊瑞、馬麟等とともに猶も火を放ち、人を殺して其數をしらす。宋江其報を聞て、諸軍勢を催趨桐廬縣に出陣す。其時王矮虎一丈青二人は、温克讓を縛めて宋江の軍前に引出せり。宋江二人の功を賞し、且温克讓を杭州に渡さしめて、張招討の軍前にて頓て首を斬しめけり。去程に宋江は翌日水陸の軍兵を調へ、直ちに烏龍嶺を越えて睦州に打入んと、已に嶺の下に至りける時、寶光國師は衆將と俱に、烏龍嶺の關隘を固めけり。抑此烏龍嶺と申は、睦州第一要害の地にして、左右は長江に靠、山峻しく水急にして、上には關隘を建て、下には許多の軍船を貯へ、容易攻べしとも見えざりけり。宋江は軍馬を嶺下に屯し陣を二ヶ所に張り、先づ李逵、項充、李袞に五百人の牌木を先手として、烏龍關の下に至りしに、關上より檣木炮石雨のごとく下しければ、前軍進むこと能ず、計の施すべきやうもなかりけり。宋江は

又阮小二、孟康、童威、童猛の四人に命じ、別に烏龍の水寨を攻さしむ。此烏龍の水寨と申は、昔年方臘が造りし處にて、前に大江を臨み、後は高山に倚て、内に五百の戰船五千の水兵あり。水軍の總管四人あり。是を浙江の四龍と號す。其四人の名は、

玉頭 龍都總管成貴 錦 麟龍副總管程源

跳波龍左副管喬正

戲珠龍右副管謝福

と申すなり。此四人は原錢塘江の船公なりしが、皆水練の達者なれば、方臘に屬して三品の職事を授り、水寨の守りとなれり。其時阮小二等四人は、一千の水軍を一百艘の船に分ち乗せ、旗を搖し鼓を搦き、山歌を唱へて烏龍嶺下の急流より直に灘上に搖上る。南軍四人の總管は早く是を知り、士卒に命じて五十の連火排を灘上に隠さしむ。此連火排と云ふは、松杉の大木を索を以て編、内には乾きたる柴、并に硫黄硝の類を藏したり。阮小二は孟康、童威、童猛と一向水上に搖上りし處に、南軍四人の總管四艘の快船に乘じ、各紅旗を搖し、水上より搖下るを見て急に放ちければ、四艘の快船は又水上に搖返す。阮小二其計なるを知ず、勢に乘じ水源に迫上りしに、四艘の快船早く見えざりければ、心中大に遲疑し、急に船を岸に繫しめ、烏龍嶺の上を望むに、一面の旗搖くと見しが、金鼓等しく響き、連火排一度に燃上り、順風に火の銷を吹下す。阮小二大に驚き船を退んとする時、背後に喊の聲大に起り、南軍各手に長鎗撓鉤を以て攻寄たり。童威童猛其勢ひに敵しがたくや思ひけん、船を棄て岸に爬のぼり、山下の避路より本陣に回りけり。阮小二は孟康と共に船中に在て猶も敵と戰

ひしが、火船船上に點ければ、急ぎ水中に飛入んとせしに、敵船はや追來り撓鉤を以て搭けたるゆゑ、阮小二心慌てて敵に拿れ、辱しめを受んよりはとて、手快く腰力を拔出し自ら首を刎にけり。孟康は是を見て又同く水中に入らんとせしに、嶺上より齊しく打下す火炮孟康が頭蓋を打碎きければ、肉泥となつて死しにけり。憐むべし二人の英雄遂に非命の死を遂げり。李俊、阮小五、阮小七三人は遙後船に控へ在けるが、此體をみて只得船を桐廬縣まで退けぬ。寶光國師は石寶と共に山上より味方の勝を見て、勢に乗じ軍兵を引て追下りけれ共、山の下は大江に接し、船ならでは渡しがたければ、軍を引て嶺上にかへりけり。宋江も又水軍の利を失ふを見、桐廬縣まで退いて軍兵を休めけり。其日に宋江は阮小二孟康を失ひしを、自ら悲泣に堪がたく、唯鬱々として寢食共に廢し、夢寐安らざれば、吳用衆將と俱に慰めけれ共、猶濛然として在ければ、阮小五阮小七は兄の爲に掛考て在けるが、自ら來つて宋江を諫て云く、我兄昔日石碣村に在て草木と同じく朽なば、誰か一人名目を知る者だも無らんに、今國家の大事の爲に討死し候へば、誠に本望と申ものなり。宋先鋒渠が爲に必ず多く煩惱し給ふことなかれ。且軍事を商議し給ふべし。我ら兄弟近日讐を報ふべしと述べければ、宋江も方纒心を慰めけり。去程に翌日軍馬を整へて、急に烏龍嶺を攻んとす。吳用諫めて曰く、兄長焦燦給ふことなかれ。我再三計策を工夫の上、近日に嶺を越て睦州を取ん事も未だ遅からずとて、已に商議しける處に、解珍解寶進み出て云く、某ら兄弟はもと獵戸の出身にて候へば、山に登り峯を渡り候ことは尤も慣熟に

候。今兩人獵人の形に出立て、潜に峯上に忍び入り、敵陣に火を放たば、彼ら必ず逃散らん。其時兵を進め給はば一鼓に睦州を定むべし。吳用が云く、此計妙なりといへども、此山原より險阻にして本路の外は飛鳥にあらざればつうじがたし。若誤て脚の踏所を失はば、千丈の深谷に落て命を失ふべし。解珍兄弟答て云く、某ら兄弟登州にて獄を越、梁山泊に上りしより、深く宋先鋒の高恩を蒙り、又國家の誥命を得て錦衣を着し榮幸に勝へず、たとひ今國家の爲に骨を拔身を粉にして、宋先鋒の高恩を報ずとも、猶足らざる處にて候はずやと述べければ、宋江も其志氣を感じて云く、賢弟敵に向ふに必ず不吉の語を云ふことを止めよ。只願くは早々國家の爲に力を出し、大功を立てしと有ければ、解珍兄弟大に悦び、早く拴束を成にけり。兄弟は身に虎皮の襖を着、腰に短刀を帶、手に鋼作の叉を提げ、宋江に辭し、其夜初更の比小路より忍んで、烏龍嶺に向ひけるが、七八里も過けるに、伏路の小卒に逢ければ、解珍手快く短刀を抜て兩人を剝捨、已に嶺下に至れば二更の比と覺しくて、寨内の更鼓風に順つて分明なり。兩人は大路を行ず僻路より藤を攀、葛を攬へて一歩々々上りけり。此夜月の光ひることし。兩人は巖壁を傳ひて險阻の處より至り、遙に山上を望むに、燒光閃々として用心堅固に見えにけり。兩人は敵に知られじと、嶺の凹なる處に耳を側て、更鼓を聞くに、已に四更を打ければ、解珍密に解寶を呼んで云く、夜も短ければ最早天明も間有まし。我ら急に登つて事を計らずんば、遂に大功を立てたして、兩人賭博を以て綱叉を脊に縛り、一向に登り已に敵陣

に近付しに、綱又竹藤に刮りて簳々と大に響きしかば、山上の守兵是を見、すば賊兵ありと呼りて一度に數多の撓鈎を提下し、一の撓鈎解珍が髻に搭りければ、解珍急に刀を抜んとせしに、又撓鈎を下し脚をかければ、解珍心慌てて只一刀に撓鈎を砍斷しに、憐むべし一世の英雄百千丈の深谷に陥り、微塵になつて死にけり。解珍は是を見て急に嶺を下らんとせし處に、早くも嶺上より大小の石塊を打下し、又弓弩を雨のごとく放ちければ、遂に亂矢に射殺さる。山上には是を見て、死屍を尋ねて引上しめ、竹竿に縛付嶺上に立たりけり。宋軍の探子是を見て、備細に宋江に告ければ、宋江又解珍兄弟を失ふと聞いて忽ち暈昏し、地に倒れて大に哭きしが、暫らく有りて起上り、則ち關勝花榮二人を呼び、急に軍兵を調へ、烏龍嶺を攻破て四人の仇を報ふべしと大に怒りけり。吳用が云く、仁兄必らず性急にして事を誤ち給ふことなかれ。死せるものは皆天命にして、人力の及ぶ所にあらず。若烏龍嶺を取らば、必ず神機の妙策を施し智を以て取べし。必しも力戰して親方を損じ給ふこと勿れと諫めければ、宋江猶も忿然として云く、賊徒のわざに我手足を亡ぼされ、豈居ながら安然として是を見るに忍びんや。況んや賊徒我弟の屍首を以て、竿頭に風化と聞からは、我今宵兵を提て彼屍首を奪ひ返し、厚く埋葬し亡靈の怨を休め、且烏龍嶺を攻破つて其讐を報はんと怒りけり。吳用かさねて諫て云く、賊兵屍首を以て風化すは、其内必らず計あらん。仁兄必らず造次しく向ひ給ふことなかれ。宋江那里か其諫めを用んや。則ち三千の精兵を調へ、關勝、花榮、呂方、郭盛を引率して烏龍嶺へ進

發す。此夜二更の比諸將等嶺下に至り、各賊を作りけり。宋江は馬を縦て遙に嶺上を望みるに、解珍兄弟の首屍を竹竿に縛り付け、兩株の樹上にかけて、大樹の皮を削て兩行の文字を書し共月黒うして見分がたければ、宋江火炮を放たしめ、其光にて伺ひ見るに、早晚宋江を刺て此處に號令と書しかば、宋江大に怒りて士卒に命じ、樹に上せて屍首を取しめんとす。其時金鼓忽ち響き、嶺上に數千の火把齊しく點し、飛箭雨の如くなれば、宋江大に驚き水邊に退んとせしに、南軍の水兵齊しく起り、石寶手に劈風刀を提げ、宋江を打留んと眞先に馳出けり。此時宋江は馬を山邊に返さんとせしに、忽ち賊の聲大に起り、鄧元覺まつ先に進み、高聲に呼つて、宋賊何ぞ馬より下て縛を受けず、更に何れの時を待やと罵りければ、關勝大に怒り、馬を馳せ刀を輪し、鄧元覺と戦いまた二三合に及ばざるに、後に又賊の聲大に起り、南軍四人の水兵齊しく岸に上りかさなり來れば、嶺上よりは王勣晁中眞先に攻下る。此時花榮馬を馳せて王勣晁中と暫しがあひだ戦ひしが、偽り負て馬を返しける。王勣晁中勢に乗じて追蒐しに、花榮は手快く連珠箭を放ちしに、其矢誤す二將の胸を射貫ければ、馬より落て死しにけり。南軍の諸兵是を見て近づく者はなかりけり。四人水軍の總管は、目前に王勣晁中を射殺され、暫く軍を退けけり。時に宋江又山邊に至らんとせしに、左の方より賊の聲大に起り、白欽景徳眞先に攻來る。宋軍の内より呂方郭盛等しく馬を躍せ兩人と相戦ふ。宋江は四方に敵を迎へて、心中いかせん慌てけるに、又南軍の背後に賊の聲大に起りければ、又も敵の益たるにやと、馬

を叩へて望みけるに、南軍大に亂れければ、何事にやと見る處に、黒旋風李達虎のごとく吼つて四方を吹倒す。背後には項充李袞一千の歩軍を引て砍り來る。南軍の内より石寶劈風刀を提げ、李達を迎へんとせし處に、左に魯智深あり鐵禪杖を以て打て懸ければ、右に武行者あり戒刀を以て砍りかけた。石寶は兩人の勢に敵しがたくや思ひけん、後へに退んとせし處に、秦明、李應、朱同、燕順、馬麟、樊瑞、一丈青、王矮虎各勇を震て散々に南軍を砍り立ければ、石寶鄧元覺も其勢に敵しがたくや思ひけん、兵を收めて嶺上に引返しけり。宋江は衆人と同じく陣中に回り、諸將に謝して若兄弟の救にあらずんば、我も又解珍兄弟と同じく泉下の鬼とならん。吳用が云く、兄長以後かならず自ら向ひ給ふことなかれと制しければ、宋江も又吳用の言を感じ懇ろに謝しにける。去程に烏龍嶺上には、石寶鄧元覺兩人軍事を議してはいく、いかなぞ宋兵を退る計なからんやと沈吟に及ぶ處に、石寶がいはく、只今宋江が兵馬桐廬縣に退くといへども、若密に小路より此嶺を越られなば、睦州の危ふきこと旦夕にあり。しかす今日國師自ら清溪の内裏に回り、天子に奏して救の兵を乞ひ、此關所を守るを長久の計とせんか。鄧元覺が云く、元帥の云ふ處極て理ありとて、其ま、馬に乗て睦州に來り、右丞相祖士遠に見えて云く、宋江が軍中勇將多くして敵すべからず。此ま、捨て置かば烏龍關も持ち難かるべし。早く救ひの兵を差添へ給はんことを乞ふと述べければ、祖士遠尤と同意して、鄧元覺と同じく馬に乗つて清溪縣の幫源洞に至つて、先づ左丞相婁敏中にまみえ、事の委細を語りければ、

先づ天子に奏聞せんとて、翌日早朝を待ける程に、次の日方臘王南殿に出御あれば、二丞相鄧元覺と同じく朝見し、各萬歳を唱へ息で後、鄧元覺進み出て奏して云く、臣元覺、聖旨を蒙りて太子と同じく杭州を守りしに、宋江が大軍勇將多く終に陥しければ、今退て元帥石寶と共に烏龍嶺の關所を守れり。此頃は宋江が部下の大將四人を切つて、其勢ひ大に振へり。只今宋江兵を進めて已に桐廬縣に屯せり。彼もし或は小路を知つて關を越なば、又此關をも保つこと成ざるのみにあらず、睦州の危きこと石を以て卵を推がごとし。何とぞ陛下早く良將を撰び軍馬をさし向けて、烏龍關を堅めしめ、永く城地を復するの計をなし給へと告ければ、方臘王答て云く、汝が云ふ處其理有といへども、此頃は歙州昱嶺關へ多くの軍馬を遣はし、清溪には只御林の軍馬の居のみ。是は悉く大内を守る軍勢なり。いかなぞ他所に遣はさんや。鄧元覺又奏して云く、陛下只今救ひの兵を添へ給はずんば、宋兵若し嶺を越え、睦州の陥らんこと、半月を過べからずと。右丞相も婁敏中も又進み出て奏して云く、此烏龍嶺は睦州の吭首なれば、今御林の軍兵三萬騎の内、一萬騎を分つて國師に差添へ守らしめ給へと、再三奏したれ共、方臘王更に用ひざれば、各朝廷を退きける。所謂風聲は醉人の夢に入らず、遂に飛花をして地に遂て吹しむとは是なり。されば婁敏中は朝より退りて後、衆官人と議しけるは、此度祖士遠に一人の猛將を差添へ、五千の兵馬を領せしめ、國師と同じく烏龍嶺を救はしむるに定りける。されば祖士遠は急ぎ睦州に回り、一人の猛將夏侯成と同じく、五千の兵馬を揀びて鄧元覺を先だて、烏

龍嶺の陣中に着、委く清溪大内のおもむきを、石寶等に語りければ、石寶答て云く、已に朝廷より御林の軍馬を分ち給はずんば、我ら只此の關を守つて出戦ふべからずとて、水軍四人の總管等には堅く江邊を守らしめ、關上には鄧元覺を初として、石寶、白欽、景德、夏侯成の五將堅く關所を固めける。さるほどに宋江は四人の親方を失うてより以來、只桐廬縣に在て止ること二十四日、忽ち探子來て告げけるは、此度朝廷より童樞密をして賜を持しめ、此地に向はしめ、又大將王稟にも賜を持しめ、昱嶺關の盧先鋒に給ふとぞ。只童樞密已に此地に着ありと告ければ、宋江急ぎ吳用及び諸將と同じく、桐廬縣を離るゝこと二十里ばかりにして相待けるに、程なく童樞密着ありて、勅書を讀で賜を給ひければ、宋江等頂戴す。童樞密が云く、今上天子しばく先鋒の功を立るを聞し召、又多く將士を失ふと聞き給ひ、今某および大將王稟趙譚を遣はし、共に力を合せしむ。王稟は賜を持ちて、今盧先鋒の陣に往けりと有りければ、宋江再び聖恩を謝し、又此度方臘を攻むるに及んで、多く親方を失ふことを告げて、涙をはらくと流せば、童樞密是れを慰さめ、則ち趙譚を呼で宋江に見えしめ、共に桐廬縣に屯して、其夜は酒宴を設けて饗應ける。されば次の日童樞密は、宋江と共に烏龍嶺を伐つ用意をなしければ、吳用堅く諫めて云く、恩相輕々しく向ひ給ふことなかれ。某が愚意には、まづ燕順馬麟を溪邊の小路に遣はし、當地の百姓の能く地理を知れる者に、此處の小路を問はしめ、此關を越えて兩方より夾み討ば、此關攻め破らんこと、袋を探つて物を取に等しからんと述べれば、宋江尤

と同じ、先づ馬麟燕順に十餘人の軍兵を差し添へて、當村の溪の邊に至りて路を知れる百姓を尋ねしむ。されば其日の暮に至りて、一老人をつれ返へり宋江に見えしむ。宋江問うて云く、此の老人は何人ぞや。馬麟答へて云く、是は古く當所に住みて、よく此地の路徑を知り候なり。宋江が云く、老人汝我に此處の小路を教へ、此關を越えしめば、重く汝に報ゆべし。老人告げて云く、某は先祖より此處の百姓にて候ふが、近來は方臘に災ひせられ逃るべき處もなく、殆んど憂へに沈みし處に、今幸ひに天兵爰に至り給ふこと、再び太平を見んことぞ嬉しく候へ。只今君に一つの小路を教へ、此關を越しめ奉つらん。抑此小路より越給はば、則ち東管の地にして、北門は則ち睦州の路、西門は烏龍嶺の裏路にて候と告ければ、宋江大に悦で先銀子を老人に與へ、其夜は老人を陣中に止て、酒食を與へて款待ける。果して此關を越えて如何。次卷に詳なり。

九編卷之七

睦州城に箭鄧元覺を射る

次の日宋江は童樞密を請て、桐廬縣に留めて、自ら、花榮、秦明、魯智深、戴宗、李逵、樊瑞、王英、扈三娘、項充、李袞、凌振の諸將を引具し、其勢都て一萬餘騎、案内の老人を先立て、馬は鈴を除き、人は枚を啣で、徑路より山の半ばに至りける處に、四五百人の賊兵あなたに控へければ、李逵大に吼て散々に砍散す。何かは賊兵抵敵べき四方へ盡く逃失ければ、宋江の兵馬其まゝに東管の地に至りける。此時已に四更の比なり。東管の守將伍應星は宋兵已に嶺を越たりと聞しかど、手下の軍兵纔か一千騎にだも足ざれば、いかで宋軍の大勢に敵せんや。自ら馬に打乗て急ぎ睦州に来て、祖承相に其趣を委しく告げれば、祖士遠大に驚き、急ぎ諸將を集めて商議をなす。此時宋兵は小路より烏龍嶺の裏手に廻り、凌振に命じ連珠砲を放たしめければ、其音天地に響き山河も崩る、計なり。烏龍の關上には石實をはじめ、此音を聞て大に驚き、急ぎ指揮白欽に命じ、敵の様子を伺はしむれば、白欽遙に見るに、宋江の旗號天地に遍く風に順て翻々たり。白欽は本陣に立回り、其様を備細に語れば、石實が云く、已に睦州より救の兵を越給はずんば、我らは只堅く此處を守つて出て戦ふべからず。

睦州は御林の軍あれば自ら相防ぐに足らん。鄧元覺進み出て云く、元帥差へり。今若我ら睦州を救はずんば、本城倘失ある時は是をいかん。其時石實再三留れ其途に其詞を用ず、自ら五千の軍馬を調へ、夏侯成を引て嶺を下り進發す。宋江兵を引、睦州へは向す、急に烏龍嶺を攻破らんと東管をはなれる處に、早くも鄧元覺眞先に馬を跳せて戦を挑みけり。花榮遙に是を見て、宋江の耳邊に倚て低々説て、此人如々せば獲べし。宋江黙頭て云く、此計妙なりと、秦明を呼で計を授けしかば、秦明領受て馬を躍せ、則鄧元覺と戦しが、未だ五六合にも及ざるに、秦明の逆るを見てさらに追す。馬を縦て直に宋江を捉んと、馬前に向つて進みける。花榮は豫て計りしことなれば、自ら宋江の後に控て在しが、鄧元覺が宋江を追て已に程近くなるを見て、弓を拽こと満月の如く箭を放つこと流星の如く、觀得て飄地放ちければ、其矢誤す鄧元覺の面を射たりしかば、忽ち馬より落にけり。宋軍四方より圍で頓て首を斬、猶も進で攻しかば、夏侯成も敵すること能ず、睦州を差て逃れけり。宋軍は猶も追て烏龍嶺に攻寄けるが、此時石實は鄧元覺が討れたるを見て、緊く軍門を固め、嶺上より砲石檣木雨のごとく打下しければ、宋軍容易に登ること能ず。暫く軍を退けて、睦州を攻んことを商議せり。去程に夏侯成は漸逃て睦州に返り、祖士遠に見えて、軍の勝敗并に、鄧國師の討れしことを備細に語りければ、祖士遠大に驚て、夏侯成と清溪の内裏に至り、婁敏中に見え備細を語り、共に階下に至て奏して云く、今宋兵密に小路より忍で東管に至り、睦州を攻ること甚だ危急なり。伏て望く

は、我君早く軍を發し救ひ給はずんば、睦州の亡びんこと旦夕にありと慌しく告げれば、方臘王大に驚き、急ぎ殿前の太尉鄭彪を召、御林の軍馬一萬五千騎を差添て、睦州を救はんことを命じけり。此鄭彪と云は原婺州蘭溪縣の都頭なるが、今方臘に隨て麾下にあり。此人幼きより武藝を能し、又幻術を學び、常に戰場に望めば雲氣身に隨ふ。是に因て世人都て鄭魔君と稱しけり。此時鄭彪奏して云ふ、臣今聖旨を領はり、宋軍を防ぐに、今一人の臣を助る人なくんば大功を立がたし。幸ひに天師包道乙、神人の術あり。萬乞天師と共に事を計らば、立處に宋軍を破るべし。方臘王此奏を准、則ち祖士遠をして、靈應天師包道乙を召にけり。抑此包道乙は、先祖より金花山中の住人にて幼年の時家を出て鬼神の術を學び、又よく一口の寶劍を使ふ。是を玄天混元の劍と名附、百歩の内に人を砍て當すといふことなし。後方臘に隨て共に造反し、只軍に隨て妖法を行ひ、人を害すること其數をしらす。又方臘を協て不仁の事をなさんと云ことなし。此故に方臘尊ぶこと比すべき者なく、靈應天師と稱しけり。時に祖士遠包道乙を引て階下に至りければ、方臘自ら包道乙を引、錦の櫪に座せしめて云、今宋兵屢寡人の領地諸城を侵し、已に睦州に至れり。其勢誠に敵しがたし。萬乞天師の道法を以て敵兵を亡し、國を護り民を救ひ永く社稷を保ば、萬民の幸ひ何か是にしかんや。包道乙奏して云ふ、主上御心を安んじ給ふべし。某不肖たりといへ共、主上の洪福に憑、又我胸中の學に因ば、宋軍を退けんこと豈憂ふるに足んや。方臘大に悦び宴を設けて、美々しく款待けるに、包道乙も恩を謝し朝よ

り退き、鄭彪夏侯成と共に殿帥府中に會し、軍を起さんことを商議して在ける處に、門吏報じ、司天太監蒲文英至れりと告げれば、急に召て其故を尋ぬるに、蒲文英對へて云く、某昨夜天象を觀に、南方の將星都て光なきに、宋江等の將星は猶も明朗たり。今又天師、太尉、將軍の三位、軍を起し給ふと聞、此軍恐らくは不利に候べし。某の愚意に因ば、今一度主上に奏して暫く宋軍に降り、一國の厄を解を上計とすべしと、憚る所もなく説ければ、包道乙忿然として大に怒り、忽ち玄天混元の劍を掣と見えしが、蒲文英を兩段に砍たりけり。かくして包道乙は文書を認て、蒲文英の不禮を備細に書して方臘に奏し、則ち鄭彪を先鋒となし、夏侯成を後軍となし、自ら中軍となつて睦州を救はんとして、各清溪洞を打出けり。去程に宋江の軍兵は日夜睦州を攻打れ共、未だ勝敗を分たず、探兵回りに來て、清溪洞の救として軍勢出たりと告げれば、宋江急ぎ王矮虎一丈青に三千の馬軍を添て敵を迎しむ。二人謹んで命を奉り、清溪洞の路上に馳向ひける處に、早くも鄭彪の軍馬に出合ければ、兩軍各陣勢を排、各喊を作りける。其時王矮虎馬を出して、直ちに鄭彪に向つて戦ひけるが、未だ八九合に及ばざる處に、鄭彪口に咒文を唱へて、一聲疾喝しければ、忽ち鄭彪の盔の内より、一道の黒氣滾起り、黒氣の内に一尊の金甲天神を現はれ出し、手に降魔の寶杵を提空中より打下しければ、王矮虎大に驚き慌て鎗法亂れければ、遂に鄭彪に討れけり。一丈青は丈夫の討れたるを見、忿然として雙刀を輪し、直に鄭彪と戦ひしが、未だ二三合に及ばざるに、鄭彪伴敗し馬を回しければ、一丈青は猶

も丈夫の仇を報んと、馬を馳て追けるが、鄭彪は早く左の手に鎗を取かへ、右の手に腰に繫し鎗袋の内の金磚を採出し、身を紐向て抛けるが、金磚過す一丈青の眉間に當り馬より落て死したりけり。憐むべし能く戦ひし佳人も、一場の春夢と消にけり。其時鄭彪勢に乘じ砍立ければ、宋軍大に亂れ敗走す。去程に宋江は人を遣して戦の次第を聞きむるに、王矮虎一丈青は都て鄭彪に討れ、味方の軍馬も大半討れたりと告ければ、勃然として大に怒り、急に軍馬を調へ、李逵項充李袞を引率し、其勢五千餘騎已に進發せんとせし處に、鄭彪の軍馬早く攻寄しかば、宋江怒氣胸に填り、當先に馬を出して大に鄭彪を罵つて云く、逆賊いかなぞ我將を殺したるや。鄭彪更に一言をも交へず。則ち鎗を挺へて、直に宋江を討んとす。李逵是を見て大に怒り、手に兩把の板斧を提げ、虎のごとく吼て砍掛ければ、項充李袞も蠻牌を舞して戦を助け、直に鄭彪を望で衝蒐たり。鄭彪はいかゞ思ひけん、忽ち馬を回して走りけり。三人猶追て南軍の陣裏に砍入ければ、宋江は李逵の誤ちあらんことを恐れ、急に五千の軍馬を招て勢ひに乘じ攻ければ、南軍大に敗走す。此時項充李袞は、李逵を引て返りければ、宋江も先金を鳴らし軍を收んとせし處に、忽ち陰雲四方に起り、黒氣天地を罩ひ、大風砂石を飛ばし、急雨車軸を流せり。山鳴谷響て乾坤も崩るゝばかりなれば、宋軍東西を辨ず。宋江は已に鄭彪が妖術なることを知れ共、いかなともすることなく、先づ三軍に下知して、前路に進まんとしければ、白晝暗夜のごとくにて、一物も見えざれば前軍大に亂れ、すべきやうもなかりけり。其時宋江天に仰

で歎息し、自ら思へらく、我まさに此地に死せんと、暫く馬を控へて在けるが、半時も過し比、黒霧少しく晴て幽に亮光有ければ、宋江も蘇たる心地して、前後を望見るに、金甲を着たる大漢に四方を圍れて在ければ、宋江大に驚き、忽ち地上に倒れけり。手下の衆將も都て地上に伏て、只死を待ばかりなり。宋江は暫く面も仰がす俯し居たりしが、忽ち一陣の風雨過る處に、一人宋江の手を携へ、高聲に、義士恐るゝことなかれと叫びければ、宋江猶も驚きて頭を擡げ、其人を見るに、一人の秀才頭に烏紗の唐巾を戴き、身に白羅の涼衫を着し、顔は粉を施すがごとく、唇は朱を點じたるがごとし。七尺の身軀、三旬の年紀にして其貌凡人にあらざれば、宋江見て大に驚き、身を起して禮を叙恭しく問て云く、秀才は何處の方にて尊姓大名は何と申候や。秀才答へて、某姓は邵名は俊と申て、昔より此地に住者なり。今特々來て義士の爲に報ん。那方十三の氣數今正に盡んとす。彼が亡んこと旬日に有べし。某も又義士のために力を添ん。今因を受るといへ共救兵已に至ん。宋江再び問て云く、先生已に氣數を知らは、方十三何れの日にか亡ぶべき。邵秀才更に言す。手に背甲を推と覺しくて忽ち夢は覺にけり。宋江は猶馬上に在て醒來り、四方を望に、雲收り霧晴れ天朗に氣清うして、今迄在つる金甲の大漢子は、都て大松樹にて有ければ、宋江大に軍將を呼起し、路を尋出んとせし處に、又松樹の背後に喊の聲大に起りければ、軍將に命じて砍出んとせし時、那里の山路より魯智深武松眞先に進んで南軍の中に砍入けり。包道乙は馬上に在けるが、武松の歩行して來るを見て、忽ち玄元混

天の劍を拔出し空より飛下て武松の左の臂を砍たりけり。武松は猶も虎のごとくに吼て、早く右の手にて玄元混天の劍を奪取、暫しが間戦ひしが、左の臂の痕深かりければ、時々閃避て見えにけり。魯智深大に叫で禪杖を以て打てかゝる。包道乙其勢ひに敵しがたく馬を返して敗走す。其時宋江自ら馬を下つて武松を救ひ、左の臂を見るに、七八分の深疵にて左の腕已に折しかば、猶も醫治せしめんと欲しければ、武松焦燥何を療治の煩しきを待んやとて、其儘戒刀を拔出し、遂に左の臂を割断けり。されば宋江士卒に命じて、武松を本陣に送り休息をなさしめけり。去程に魯智深は猶も南軍に伏入り、夏侯成と戦ふこといまだ十合に及ず、夏侯成遂に敵しがたく、山林の中に敗走せしかば、魯智深猶も追かけ深山の裏に入にけり。鄭彪は尙も軍將に令して宋軍に攻入れれば、李逵、項充、李袞、各刀をぬき鎗を挺へ一度に衝入けり。鄭彪は三人の勢に敵しがたく嶺をこえ溪を渡り走りしかば、三將は原來路徑を知らず、各功を立んと猶も溪を渡り追蒐し處に、忽ち喊の聲左右に起り、南軍の伏兵一齊に起りけり。項充大に慌て急に返さんとせしに、南軍早く左右より攻寄せしかば、大に李逵李袞を呼しか共、二人は鄭彪を追て溪を過れば、自から礮の中に入り、亂箭を避けるに、礮深くして巖石に突き倒れければ、遂に亂箭に射られ死にけり。李袞は鄭彪を追て溪を過し處に、背後に忽ち喊の聲起るを聞て、急に岸に下らんとせしに、早く撓鉤に絆はされ、深礮に陥て肉泥となつて死にけり。去程に李逵は唯一人山中に追入けるに、南軍四方より攻しか共少しも恐れず、板斧を振て散々に砍立ける處

に、背後に又喊の聲起りければ、首を回らし是れを見るに、花榮、秦明、樊瑞の三將各軍兵を引具し、南軍を散々に切開き、李逵を救て返りしか共、猶魯智深の踪跡知ねば、衆將宋江にまみえて備細に勝敗を語りけり。其時宋江兵を點檢するに、已に其大半を失ふのみならず、項充李袞は敵に亡び、武松は左の臂を折、魯智深が行踪知れざりしかば、潏然として哭しける處に、忽ち走打の兵來て報けるは、軍師吳用、關勝、李應、朱應、燕順、馬麟と共に一萬の軍兵を引率し、唯今小路より到着ありと告げれば、宋江急ぎ吳用等を軍中に召て、其來故を尋ぬるに、吳用答へて云く、某等重樞密并大將趙譚と共に烏龍の陣を守りて在けるに、又劉光世數萬の兵を引て御加勢ありければ、某し命じて呂方、郭盛、裴宣、蔣敬、蔡福、蔡慶、杜興、郁保四、李俊、阮小五、阮小七、童威、童猛等十三人を彼地に留め、其餘は都て某と共に此に至りて、君を助け候なりと告げれば、宋江大に悦び且多く親方を亡し、并に武松癡人となり、魯智深の行踪しれざることを備細に訴へ、又た潏然として涙を流しけり。吳用諫て云く、兄長必ず憂へて貴體を損じ給ふことなかれ。正に今方臘を亡さんこと且夕に有り。何ぞ國家の大事を重しと爲給はざると諫ければ、宋江少し涙を收めて、那裡的松樹を指ざし、夢中の事を委しく語りければ、吳用が云く、已に此靈驗の夢あるは必ず此邊に靈神在して、兄長を守護し給ふに疑ひなし、兄長何ぞ廟宇を尋ねて、神明に謝し給はざるやと告げれば、宋江尤もなりと其議に同じ、二人は山に上り廟宇も在やと尋けるに、未だ半時ばかりも過ざるに、松林の中に一所の古き廟有

ければ、二人は華表の下に至て首を擧げ、牌額を見るに、金字にて烏龍神廟と書付たり。其時二人廟に入て殿上を望むに、不思議や龍君の神像、夢中に見えしと少しも異なることなかりければ、彌奇異の思ひをなし、再拜して謝して云く、昨日は多く神明救護の恩を蒙りしか共、猶報すること能す。萬乞神明の應護を以て、方臘を攻亡ぼし、天下静謐になし給は、敬んで朝廷に奏聞し、重ねて廟宇を建立し聖號を報じ、永く享祭を奉らんと懇に祈り、二人は階を下りて階下の石碑を讀に、當社の神はもと唐朝の進士にて、姓は邵、名は俊と云ふ賢士なるが、不遇にして聖主にあはず。後江中に墜て死せしが、天帝其忠直を憐んで龍神となし、永く此地を守らしむ。是に依て當地の百姓風を祈れば忽ち風を吹し、雨を祈れば忽ち雨を降し給ふに依て、廟宇を建立して四時の祭り斷えざりしと、宋江讀終て益々尊敬するに堪へず、士卒に命じ烏き猪白き羊を供て祭をなし、猶も廟外の松樹を見て、金甲大漢子に顯化せしことを吳用に語て、共に奇異の思ひをなし、各馬に乗て陣中に返りけり。其夜宋江は吳用と共に睦州を攻る計を商議し、已に半夜に至り大に困勞ければ、几に寄て假寐と覺えしが、忽ち一人來り報じて、邵秀才御出ありと告ければ、宋江急に座を立て邵龍君を迎へ、守護の恩を謝しければ、邵龍君が云く、昨日は若し某の救ふにあらずんば、義士已に包道乙が邪法に擒となるべし。今日は又義士の祭奠を受、睦州の敗んこと旦夕にあり。方十三擒にすべしと有ければ、宋江迎へて委くことを問んとすれば、忽ち風の音に驚されて、睡りの夢覺ければ、宋江急ぎ吳用を招て、此

夢を占はしむるに、吳用が云く、已に龍君かくのごとく靈を顯すからは、急に兵を進めて睦州を討べし。宋江が云く、軍師のこと極めて當れりとて、已に次の日に至て睦州を攻る用意をなしにけり。先づ燕順馬麟に命じて、烏龍嶺の大路を守らしめ、又關勝、花榮、秦明、朱同の四人を真先に立て睦州の北門に向はしめ、又凌振をして子母砲を城中に向つて放たしむるに、其音天地に震動し山鳴谷響ければ、城中の人民大に驚き上を下へと騒ぎけり。此時包天師鄭魔君は城中に退て祖士遠をはじめ衆將と軍事の商議をなしける處に、砲聲天に響きて宋兵已に城下に攻寄たりと告ければ、いかがはせんと騒動す。右丞相祖士遠進み出て、古語に云すや。敵兵城下に臨時は、死戦せずんば何を以てか是を解かん。城敗れなば我ら都て擒と成べし。諸將いかと有ければ、鄭魔君尤も同じ、譚高、伍應星を左右に従へ、又後へに二十餘人の精兵を引つれ、其勢都て一萬餘騎、城門を開きて宋江と對陣す。此時宋江はわざと彼に讓て兵馬を城外に出さしむ。城上には包天師を肇として、祖士遠、沈壽、桓逸、各城樓に上り交椅に憑て控へたり。此時鄭魔君は馬を躍らせ鎗を構へて陣を出れば、宋軍の中より大刀關勝馬を出し刀を舞してこれを迎ふ。兩將戰ふこと未十合に及ばず。鄭魔君いかに關勝に敵せんや。負色にみえければ、包道乙城上より是を見て、口中に呪文を唱へ一聲喝と叫べば、忽ち鄭魔君の頭上より一道の黒氣を生じ、黒氣の内より一尊の金甲を着たる神人を顯はせり。手に降魔の寶杵を提げ空中より打下る。此時南軍中に黒氣大に起りて分ちがたし。宋江馬上より是をみて、急

混世魔王樊瑞を召て法を行はしめ、自ら又天書を開て、風を回し暗を破る法を行ひ、呪文を唱るに、
 忽ち關勝の頭上より一道の白雲を捲起し、白雲の中に一尊の神將を現す。紅髮青き臉にして烏龍
 に乗じ、手に鐵槌を取て、鄭魔君頭上の金甲を着たる神人と戦へば、下の方には兩將火花を散して
 戦ひけるが、忽ち上面の烏龍に乗たる神將、かの金甲を着たる神人を戦ひ退ると見しが、下の方に
 は早くも關勝唯一刀に鄭魔君を馬より下に砍棄ける。此時兩軍大に亂る。包道乙は宋軍の中に風雷
 の響き起るを聞、急に身を避んとせし處に、忽ち凌振に轟天炮を放たれければ、何かは以て保つべき、
 首も身體も微塵になつてぞ死にける。既に南軍大に亂れければ、宋江は勝に乗じて睦州に切入たり。
 其時朱同は只一鎗に譚高を突殺し、李應は刀を飛して伍應星を殺しける。此時宋江の大軍都て城中に
 亂れ入り、祖士遠、沈壽、桓逸等を悉く生捉にし、其他は姓名をも問ず、悉く切殺し、先づ火を
 以て方臘の行宮を燒拂ひ、貯置し金銀は悉く三軍に分ち與へ、百姓を安んじ、猶も軍事を議して在
 ける處へ、探馬來て報じけるは、烏龍嶺大路の軍に、馬麟は白欽に突殺され、燕順は石寶に流星鎗に
 て打殺さる。是によつて、石寶、白欽、勝に乗て攻來れりと告げれば、宋江は又二將を失ふと聞て大
 に嘆き悲しみ、先づ花榮、關勝、秦明、朱同を遣して石寶が軍を迎しむ。此時關勝等は、宋江の命を
 領し、馬を躍らせ軍兵を引率して、烏龍嶺に向ひしが、早く石寶の軍馬に出遇しかば、關勝馬を軍前
 に乗出し、大に罵つて云く、賊將いかなぞ我兄弟を殺すやとて、直に打て懸りければ、石寶は關勝な

るを見て戦に心なく、馬を回し嶺上に去ければ、關勝猶追んとせしが、指揮使白欽馬を躍せ、直に
 關勝と戦ひける。時に嶺上に石寶鎗を鳴して軍を收ければ、白欽は關勝を捨て山上に回りけり。關
 勝は馬を控へて更に追す。

盧俊義大に昱嶺關に戦ふ

このとき關勝は遙に嶺上を望みけるに、南軍大に亂れければ、何事にやと暫くが程訝かりて伺ひ居る。
 抑其故を尋ぬるに、石寶原來烏龍嶺の東を壁め、嶺の西を隄防せざりければ、重樞密其暇を伺ひて
 大に軍兵を分ち攻上りければ、南軍大に騒ぎしなり。宋軍の大將王稟馬を縦つて、嶺上に攻上りけれ
 ば、南軍の方よりは副指揮景徳、戟を挺て兩人戦ふこと十餘合、王稟戟を舉て景徳を砍ければ、馬
 より落て死し失ぬ。王稟勢ひに乗じ、呂方郭盛を前に進め、直に山を上りて第一の嶺を越えんとせし
 かば、計らずも山の上より、大石を打下しけるに、其石郭盛の頭を碎き微塵に成つて死しにけり。呂
 方是を見て大に怒り、戟を携さへ嶺上に上りけるに、南軍の内より白欽鎗を以て突かけたり。呂方は
 早く身を紐過けるに、其鎗呂方の脇下を過ぎて箇空を突き大に慌けるを、呂方其の透間を伺うて、鎗
 を奪んと取かれば、白欽は奪はれじと、二人は馬の上に鎗を引合争ひしに、各力施展すること
 能ざれば、二人は鎗を抛捨て、手に手を組で揪合けるに、原來山嶺峻しくして、馬の脚處定まらざ
 れば兩馬は忽ち亂石に跌き倒れければ、二人は手と手を取組て、萬丈の深谷に陥り微塵に成つて死

しにけり。去程に關勝は嶺上の大に騒ぐを見て、自ら謀て味方の軍勢すでに嶺の西を攻けるよと知ければ、急に衆將を招き大に喊を作り、嶺の東より攻寄ける。石寶は宋軍に東西を圍れ、自ら想道已に逃るゝに道なく、又敵軍に捉られ、其辱しめを請んよりはとて、劈風刀を引抜て首を刎てぞ死したりける。此時南軍大に亂れ、各戈戟を打棄て我先にと逃去れり。宋軍は安々と烏龍の關を奪取り、關勝は使を宋江の陣中へ遣し、捷軍の趣きを報じけり。されば水軍の大將成貴、謝福、翟源、喬正の四人は已に烏龍嶺の敗れしを見て、水寨を捨岸を越て逃けるに、成貴謝福は農民に生け捉られ、睦州宋江の手へ引渡さる。翟源喬正は遂に行踪を失ひけり。童樞密劉都督は已に烏龍嶺を奪ひ、一千餘騎を分つて關隘を守らせ、自ら大隊の軍馬を引せ睦州に回りけり。宋江は二十里の外に出て相迎へ、各城中に入て軍馬を休め、先榜を出し百姓を按撫しければ、南兵の降参する者其數をしらす。時に宋江は悉く米倉を開き糧米を取り出し、百姓并に降参の者に與へ、各故郷に回しければ、皆慈悲の心を感じけり。されば水軍の大將成貴謝福二人を陣前の松樹に縛り、各腹を割て肝を取り、阮小二孟康を始として、烏龍嶺にて亡びける衆將の亡靈を祀り、再び李俊等の水軍の將に命じ、南軍の賊將を張招討の軍前に解さしめ、各首を斬にけり。宋江は此度の一戦に烏龍嶺を奪ふといへども、又呂方郭盛を失ひしかば、唯鬱々として樂まず、先づ睦州城に屯して、盧俊義の至るを待ち、兵を合せ清溪洞を攻取んと、暫く軍馬を休めけり。去程に盧俊義は、杭州にて宋江と分れてより、二十八人の軍將を引率

し、其勢都合三萬餘騎、杭州路より山路を経て、臨安鎮を打過ぎ、昱嶺關に着にけり。抑此昱嶺關は杭州第一要害の地なれば、方臘手下の大將龐萬春を遣して此關を守らしむ。是龐萬春は江南の人にして、方臘軍中第一弓の名人なれば、世の人名づけ小養由基と呼にけり。又手下に二人の副將あり、雷炯と計稷となり。共によく八百斤の勁弩を放ち、又能く鎗棒を使ひ、渾て萬夫不當の勇あり。龐萬春は宋兵昱嶺關に向と聞き、士卒に命じて數千の弩弓を關上に置き、各準備をなしにけり。されば盧俊義は昱嶺關の下に陣取し、先史進、陳達、楊春、李忠、薛永の六將に三千餘騎の精兵を差添て真先に進しむ。史進等六人は都て馬に騎り、其餘は歩にて關下に至りけるに、曾て一人の敵もあらざれば、史進大に疑ひ、衆將と商議せんとせし處に、忽ち嶺上に鼓の聲響きければ、史進首を仰で關上を望に、一面の綵りたる錦の旗を立て、彼小養由基龐萬春真先に進み出、史進等を見て大に笑ひ罵て云く、汝等衆賊梁山泊に在つて、盜をなすこそ相應なるに、今宋朝の招安を蒙り、輕々しく我國に向ふは、蟻螂斧を振つて立車の隧に向ふに異ならずや。傳へ聞、汝の軍中に何の小李廣とやらん云ふ賊有つて、弓を好すと聞き。早く出來て我と弓術を較ぶべし。先我手段を見せしめん、未だ云も終はらず、弓を挽て颯と放ちければ、其矢史進の胸を射て馬より墮落しかば、石秀、陳達、楊春、薛永の五將とも來つて救はんとせしに、忽ち山上に鑼を響かして、左右の松林の裏より、雨のごとくに矢を放ちければ、五將は史進を救ふこと能はず。各命限りに走つて一ツの山の嘴邊を

過る時、山上には、雷燭計稷猶も下知して、矢を放たしむること雨よりも繁く、たしひいかなる英將たりとも、逃るべきやうなく、憐むべしさしも鬼神と聞えし水滸の六將、つひに弩に射立られ南柯の一夢と失にけり。されば三千の兵も多く弩にあたり、只百餘人の小卒這々命を遁れ回り來りて、委く盧先鋒に報じければ、盧俊義大に駭て只醉るがごとく、半時ばかりは言いふこと能はず。神機軍師朱武も、陳達、楊春は、別して華州華陰縣の少華山にて、共に頭領をなせし無二の黨類故、哭てありしが涙を拭め、來て盧俊義を慰め云く、先鋒強て悲みを止め給へ、却つて大事を誤まるべし。早く計を廻らし關を破り、敵を切て此恨を報すべし。盧俊義が云く、宋公明我に多くの軍馬を差添へ給に、未だ一戦にも勝ず、先づ六人の大將を失ひ、三千の歩卒もやう／＼百餘人に打なされ、何の面目有つて宋公明にまみえんや。朱武答て云く、古人云ることあり。天の時地地利にしかず、地の利は人の和にしかずとかや。我々は元中原山東の者にて候へば、未だ委しく水戦に慣はず、此を以て今地利を失へり。某が愚意によるに、今當所の百姓の中にて能地利を知る者を得て、此山の曲折を知ることを得ば、計を施すに便あらん。盧俊義が云く、軍師の言極て當れり。しらす何人を遣はし此輩を索むべき。朱武が云く、鼓上驢時遷こそ驚を飛び壁を走る人なれば、究竟に候はずや。此時盧俊義急ぎ時遷を呼で委しく命じければ、時遷謹んで領受し、多くの乾糧を帶、陣中を出で深山をさして行こと半日ばかり、日も已に暮れば、何れにか宿せんと四方を望に、遙か山上に燈びの光り見えけれ

ば、彼所にこそ必ず人家あらんと、足をはやめて彼所に至るに、一ツの僧庵有りければ、時遷は庵の前に来り密に窓の透間より内を覗くに、八十ばかりの老僧、經を讀んでありければ、門口に來て戸を敲くに、彼老僧一人の小僧を呼で門を開かしむ。時遷内に入つて禮を施す。老僧怪み問て云く、客人はいかなぞ今戦地を経て此深山に來れるや。時遷答て云く、某實に師を欺すして説ん。某は梁山泊の宋公明が手下の將にて、時遷と申者なり。此度天子の勅命を奉けて、方臘を征せん爲に、此昱嶺關迄進み來りしが、昨日の戦に亂箭を放たれ、親方の將卒を損すること多し。尤も關を越る計なし。是故に某をして別の小徑を尋しむ。今深山曠野を経て此處に至れり。萬乞師父別に小徑有らば、我にをしへて此嶺を躑しめば、厚く此恩恵を報すべし。老僧が云く、此處の百姓も久しく方臘の害を蒙り、一人も恨みざる者なし。況んや老僧がごときは、常々施主の齋糧を得て、其日を過す者なるに、今人民こと／＼く四方へのがれされば、只此處にて死をまつより外はなかりしに、今幸ひに天兵の至り給ふこと豈悦しからずや。君も又官兵ならば、老僧語らんも苦しかるまじ。只此處には別に關を過る路なし。然れ共西山の邊に一條の小路有りて關上に通ふ。近來賊人其路を塞ぐよし。時遷が云く、已に此一路有りとも、賊人の本陣に通ずるや否や。老僧が云く、此路此關上に通じて、直ちに龐萬春の陣の後ろに至らるれど、近來賊人大石を以て其路を塞ぐよし、いかなぞ通ふことを得んや。時遷が云く、苦しからず已に此路有からは、某別に手段あり。今回りて此趣きを主將に告げ、再び來つて老

僧に酬い奉るべし。老僧が云く、將軍必ず我此路を君に語りしことを語り給ふことなけれ。時遷が云く、老僧此ことを案じ給ふな。我何ぞ他人に語んやとて老僧に別れ、急ぎ陣中に回りて、盧先鋒に斯と告げければ、盧先鋒大に悦び、軍師朱武を請て關を攻る計を議するに、朱武が云く、もし此路さへあれば、昱嶺關を得んこと囊を探りて物を取るが如し。某が愚意に寄るに、時遷に一人を添て扶けしめ、此大事をなさしめん。時遷が云く、軍師我に何の大事を成しめ給ふや。朱武が云く、別のことにあらず、是火を放ち炮を打のことなり。足下今密に火器を帶敵の後に忍び入り、合號の火炮を放ち、且又火を放ば、我計成就すべし。時遷が云く、已に炮を放ち火を傳ることならば、別に一人を添へるに及ず。某し一人此ことを成就なさしめん。別人を伴うて難所にいたる時は、我簷を飛壁を走る手段に及ず、却て時を延し大事を誤ち、我が手足纏ひになるべし。只しらす軍師は何の計を以て、關上に攻め上り給ふや。朱武が云く、此の事は容易し向きには敵の伏勢ありしに、利を失ふふといへども、此の回は敵の伏勢のあるなきに拘はらず、只だ山林の茂りたる處に至つては、火を放つて是を焼ば、敵いかなぞ伏勢を用ふる所あらん。時遷が云く、軍師の高見究はめて明らかなりとて、時遷は火石、火刀、火薬を集め、火炮を包袱に蘊背に負ひ、用意已でに終はりければ、盧先鋒朱武に別れ行かんとす。其時盧先鋒は、銀二十兩糧米一石を彼の老僧に送んとて、軍卒に荷しめ、時遷の後に従はしむ。去程に時遷は向うの路を尋ね、再び草庵に至つて、彼銀子糧米を老僧に與へ、軍卒は本陣

に回へし、老僧に小路を案内せんことを乞ひければ、老僧が云く、將軍今少しく待ち、夜に入りて行き給へ、白晝に往き給はば、恐らくは關上の人にしられ、大事に及ぶべしと相止め、已に日暮に及びしかば、晩飯を備へて時遷を款待し、扱て小僧をして路の案内をなさしめける。されば時遷は夜に入りて、案内の小僧と俱に草庵を離れ、林を過ぎ嶺を越え、葛を手操藤を攀ちて數里を過ぎけるに、山嶺の峻しき處に至る。此夜月いろ少しく明らかなれば、遙かに四方を望むに、石壁壁巖として、下に一筋の小路あり。ことごとく大石を以つて路口を塞ぎ、高く築て墻のごとし。小僧が云く、將軍此石壁を過ぎ給はば、直ちに大路に至る。此昱嶺關に通ずる路なり。時遷が云く、我已に路徑を知れり、汝は是より歸るべしとて、小僧に謝して回し遣はし、其身は平生の手段を以て岩を傳ひ石を登る。始末次巻にくはし。

方臘が參政の官沈壽を、ちんじゆと訓は非なり。二卷目の末に云如く、沈の字しづむと訓はちんなり。人の姓氏はしんと訓べし。壽も普通の訓み來る和讀にて正音は壽なり。

九編卷之八

宋公明智をもつて清溪洞を取る

諸も鼓上蟻時遷は嶺の頂に至り、東の方を望に、火の光天を焦して白晝のごとし。是れ盧俊義、宋武大軍を以て火を放ち、山林を焼路を開き關上に攻上るなり。昱嶺關上には小養由龐萬春、宋兵の火を放ち林を焚、路を開くと聞て云、此彼らが兵を進むるの法なり。我らは只堅く此關を守るべしとて、自ら雷爛計稷と共に弩弓を並べ、相控て敵の動靜を見合居る。正に是前門に狼を防ぎ、後門に虎を進むるの類なり。時遷は早く關上に忍び入り、大樹の頂に上り、枝葉の茂りたる處に身を隠し、關前を見るに、龐萬春、雷爛、計稷と俱に陣門を固めたり。關下には宋兵はや攻寄、林冲呼延灼馬を控へ大に罵りて云、賊將いかなぞ天兵に敵するや。龐萬春大に怒り、已に弩を放たんとす。此時鼓上蟻は早く樹の上より爬下り關の後ろに至るに、多くの柴薪を積置たれば、先づ硫黃燭硝を揮かけ、火を燧て是に傳、自から屋脊に上り火炮を放つに、其音山河に響きかの柴薪に火一齊に起り、天を焦すばかりに炎を巻いて焼上れば、南軍の人々大に驚き戦はずして大に亂る。龐萬春は是を見て、急ぎ雷爛計稷と屋後に來つて、火を救はんとせしに、時遷又火炮を放つて、其音天地を崩すばかり

なれば、南兵驚き各鎗刀を抛去我先にと逃走る。此時時遷は高聲に、宋兵一萬はやく關を打ち取りたり。汝等早く降參せば、一死を免かるべしと叫びければ、龐萬春を始めとして雷爛計稷も大に驚き、都て惣身麻木たるとくにて、半時ばかり動くことあたはず。此暇に林冲呼延灼真先に關を打ち破り散々に南軍を切殺す。されば孫立は雷爛を生捉たり。魏定國は計稷を生捉にせしかども、只龐萬春のみ何れへか逃失けん、行方知れず成りにけり。されば宋兵已に亂れ入り、盧俊義忽ち昱嶺關を得て大に時遷の功を賞し、先づ雷爛計稷を引出さしめ、腹を割肝を取つて、史進をはじめとして弩にて殺されし六將を祭り、次の日文書を以て昱嶺關を取りし趣きを張招討に告げ、自ら大軍を引ぐし、歙州の城下へ攻寄る。抑此時歙州を守る大將、皇叔大王方空と申して方臘の叔父なり。又二人の副將あり。尙書王寅侍郎高玉と云ふ。又十餘人の猛將二萬餘騎の兵を以て、此歙州城を鎮守せり。尙書王寅は本當地の石匠なれど、能く鎗を使ひ、又一匹の名馬に騎て至る處の戦ひ、勝たすと云ふことなし。此馬を轉山飛と名付けて、山に上り水に臨んで平地を行くがごとしとかや。又侍郎高玉は當地の故家の子にして、能く鞭を使ひ兼て謀略あり。此に依て方臘彼二人に官職を授け兵權を司らしむ。去程に龐萬春は料すも、昱嶺關を宋兵に奪はれ、這々一方を逃れ出で歙州の行宮に至り、皇叔方屋に見えて事の子細を語りければ、方屋聞いて大に怒て云、此昱嶺關は此處第一要害の地なるに、宋兵に奪はれば彼ら攻め來らん時いかんがして迎ふべき。王寅進み出で奏して云、主公先づ雷霆の怒を息給

へ。古より云、勝負は兵家の常なり、戦ひの罪にあらず。只今主公しばらく龐將軍の罪をゆるし、先づ將軍を先立て敵を切退けしめ、若し再び負なば其時こそ罪を罰し給へ。方屋が云、是可なりとて、則ち五千の兵を龐萬春に與へ、眞先に敵を迎へしむ。其時盧俊義が大軍、已に城下に押寄、金を鳴らして戦ひを挑みける。此時龐萬春馬を跳らせ、陣前に馳出づれば、宋の軍中より歐鵬馬を躍せ、鎗を燃て相迎ふ。兩將戦ひいまた十合にも至らざるに、龐萬春偽り負て逃けるを、歐鵬は一番の功を顯さんと馬を飛し追かけけるに、龐萬春は思ふまゝに釣寄、身を扭向て一箭を放つに、歐鵬透さず箭を手に取りしに、元より龐萬春が射しは管矢なれば、第二の矢に胸もとを射られ、馬より落ちて死にけり。城上には王寅遙に龐萬春が勝を得るを見て、大に鼓をならし、軍兵を進めしかば、宋軍大に敗北し、三十里ばかり退きて陣取りし、兵馬を點檢するに、又亂軍の内に菜園子張青も、何者にか殺されければ、孫二娘は丈夫の死せるを見て大に悲み、屍を厚く後山に葬れり。されば盧俊義は又兩將を失ひ心中に悲み、朱武を呼んで議しけるに、朱武が云く、勝負は兵家の常の事なれば、必ず勞し給ふことなけれ。今日賊人我に勝を以て、今夜必ず夜討に来るべし。今呼延灼に人馬を添て陣の左に伏せしめ、林冲到人馬を添て陣の右に伏せしめ、其餘の諸將は小路に伏せしめ、中軍には多く羊を縛て、此の如くくと述べければ、盧俊義尤と同じ其儘用意をなしにけり。去程に歙州の城中には、王寅、高玉、龐萬春等皇叔方屋に申して云、今日宋兵大に破れ、退くこと三十里退いて陣を

取りぬ。定めて人馬疲れ倦て休むべし、今夜此勢ひに乗じ陣を攻め打たば、必ず全き勝を得べし。方屋が云、汝等宜敷行ふべしと。高玉が云、某は龐萬春と共に兵を引て向ふべし。王尚書は殿下とともに、城中に在つて守り給へとて、已に三更の比ほひに至つて、自ら披掛て馬に打ち乗り、龐萬春と共に軍馬を引つれ、各枚を含で潜に城中を打ち出で、宋軍に至り密に陣中を伺ふに、陣門さへ堅く閉ざれば、南軍擅に打ち入らず。陣中の更鼓を聞くに、初めの程は分明なれ共、後には大に亂れ打ちにけり。高玉は謀略有る人なれば、馬を駐てあへて進まざれば、龐萬春が云、相公何ぞ馬を進め給はざる。高玉答て云、陣中の更鼓亂れ打つは、敵必ず計あるにあらずや。龐萬春が云、相公必ず疑ふことなけれ。某愚意に思ふに、敵軍今日敗北して共に膽を寒し、只睡中に更鼓を打つに依て亂れ候ならん、唯勢ひに乗じ討ち給へと。高玉も其儀に同じ軍兵に下知して、急に陣門に進ましむ。其時衆人各鎗長刀を取つて、我先にと中軍に至つて見るに、唯一人の影さへなく、四方の柳の樹に數十疋の羊を縛り付け、蹄に鼓の撥を捨て太鼓を打たしめければ、其音亂れて聞こえたり。時に高玉、龐萬春は其計に中りたるを知り、大に驚き急に士卒に下知して引返さんとせし處に、陣中より忽ち火起り、又山上に火炮の響して、四方の伏勢一度に喊を作りければ、其聲山野に充てて逃るべきやうぞみえざりけり。此時高玉龐萬春の兩將は、士卒に命じて引退かんとせし處に、宋の軍兵潮の湧がごとくに砍蒐りければ、兩將は勇を奮うて一方を切ひらき、已に逃んとせし處に、後よ

り呼延灼大に喝して云、賊將逆るゝことなかれ、早く馬より下つて降参し、一死を免かるべしと呼
 ばはりければ、高玉は猶も慌てて戦ふに心なく、馬を馳て逃れんとせしに、早くも呼延灼に追付れ、
 兩の手に双鞭を揚て腦袋を打碎かれ、微塵に成てぞ死しにける。龐萬春是を見て大に驚き、只顧走
 りけるに、料らず湯隆豫て路の傍らに潜んで在りけるが、鈎鎗をもつて馬の前足を拖掛られ、遂に湯
 隆に生擒られけり。宋軍勢に乘じ砍輪りければ、南軍誰かは抵敵べき、散々に敗走す。去程に盧俊
 義は一戦に打勝て本陣に回り、まづ親方の軍兵を點檢するに、丁得孫昨夜山路の草の中にて毒蛇に咬
 れ、毒氣腹中に入つて死したりと告げれば、盧俊義士卒に命じ厚く是を葬らしめ、且龐萬春を引き
 出し腹を割て肝を剝出し、亡將歐鵬史進の輩を祭り、首を切つて張招討の軍中に送りたり。されば
 翌日盧俊義は諸將と同じく、勢ひに乘じて歙州の城中に攻寄けるに、城門開かず。城上を望むに一人
 の軍兵もなく、一本の旗もあらざれば、單廷珪魏定國は各功を立てんとて、眞先に城中へ突入けれ
 ば、盧俊義も續て押寄けるに、不思議やな單廷珪魏定國、共に城門に推入ると見えしが、忽ち直倒に
 坑中に陥入けり。原來城中には王寅二人の親方を失うて、詐城を棄て逃ると見せ、豫て數ヶ所の陷穴
 を掘置きけり。其時單廷珪魏定國の兩將は、料らずも坑中に陥入ければ、四方の伏勢一度に起り、終
 に亂軍の中に殺されけり。憐むべし聖水神火の兩將も南柯の夢となりけり。盧俊義は又二將を失ふを
 見て大に怒り、急に前軍の士卒に命じ、各土塊を取て投入々々、遂に坑中を埋ましめ、潮の湧がご

とく推寄せければ、南兵却て其勢ひにおどろき散々に敗走す。其時盧俊義眞先に馬を躍せ、城中に
 入りけるに、皇叔方屋に出遇ければ、盧俊義怒りの眼を開き、平生の秘術を使ひ、只一刀に方屋を
 馬より下に切捨たり。此時南軍散々に敗北し、城の西門より各逃れば、宋兵追かけ追つめ多く
 南兵を生捉けり。去程に王寅宋兵に歙州城を攻め敗られ、馬を飛ばせて逃れる處に、李雲に出遇け
 れば、鎗を挺へ戦ひしが、李雲は元來歩立なれば、遂に敵すること能はず、退かんとせし處に、王寅
 はやくも鎗を取延遂に李雲を突伏けり。石勇傍らより是を見て、大に怒り刀を奮て砍てかゝれば、王
 寅鎗を挺へて突蒐たり。兩將戦ふこと六七合、石勇竟に敵すること能はず、刀法次第に亂れければ、王
 寅早く便宜を伺うて石勇を突殺す。宋兵是を見て、孫立、黃信、鄒淵、鄒潤の四將各勇を奮て切
 止めたり。王寅は南軍中の勇將なれば、四將を迎へ猶も恐るゝ色なく、火花を散らし戦ひける處に、
 林冲鎗を取つて背後より突蒐ければ、縦ひ鬼神なり共などか衆人に敵し得ん、忽ち五將に突殺さる。
 五將は此趣き飛馬にて盧俊義に注進す。其時盧俊義は已に歙州城を奪ひ取り、城中の行宮に入りて休
 息し、軍馬を城裏に屯し札を出だし百姓を安んじ、使者を以て歙州城を得たることを、張招討並
 に宋公明に告げ知らせ、且近日の内兵を一所に合はせんことを約したりけり。去程に宋公明は睦州城
 に屯して、唯盧俊義の來るを待ち、ともに軍勢を合はせ、清溪洞を攻め取らんと豫て準備しありける
 處に、盧俊義の方より飛脚來て、歙州城を奪ひ取り百姓を安んじ、追付兵を合せて賊洞を攻めん

ことを告げれば、宋江大に悦びけるが、又史進、石勇、陳達、楊春、李忠、薛水、歐鵬、張青、丁得孫、單廷珪、魏定國、李雲、石勇十三人軍中に討死せしと聞て、痛く哀みければ、吳用傍より諫めて云、生死は皆天命にして、人力の暨ぶ處にあらざれば、先鋒強て傷み、尊體を勞煩し給ふことなかられ。先づ國家の大事を理め給ふべし。宋江答て云、軍師の言其理有りといへ共、當初石碣天文に記する處の百八人、此地に來つて其大半を失へり。豈悲に堪ざらんやとて、又簌々涙を流しければ、吳用再三諫めて漸と涙を歛め、回書を盧俊義に遣はし、日を定めて兵を起し、清溪洞を攻取らんと約しけり。去程に清溪洞の中には、方臘文武の百官を集め、軍の商議して在りける處に、忽條西州にて敗軍せし兵卒共、回り來つて奏しけるは、歙州已に宋兵に打破られ、皇叔及び王寅高玉も共に討たれ、宋兵追付兩路より清溪洞に攻詰ると告ければ、方臘聞て大いに驚き、急ぎ衆官を召て宋兵を退けんことを計りけり。方臘が云、汝ら衆卿各官爵を蒙り、共に州郡を保ち、皆富貴を同じうす。料すも今宋江が兵に數ヶ所の城郭を奪はれ、數人の將を討たれ、多くの士卒を失へり。只清溪の大内有るのみにして、其他は悉く敵に奪はれたり。今又宋兵兩路より攻來るよし、いかゞして是を防んや。左丞相婁敏中進み出で奏して云、只今宋兵已に神州に近付、内苑宮廷も又保ちがたし。兵儒將寡く、恐らくは敵し難からん。只々君の御駕自から征伐なし給はずんば、二三の將士も心を盡し戦ふまじ。方臘聞て尤もなりと同じ、其儘命を下し、三省御史臺、樞密院、都督府、護駕二營、金

吾龍虎の衆官に命じ、皆朕に隨つて一戦を決すべしと宣じけり。婁丞相又奏して云、君又何れの將帥を以て先鋒となし給や。方臘が云、殿前の金吾上將軍内外の諸軍都招討、皇姪方杰を正先鋒とし、馬歩新軍都太尉驃騎上將軍杜微をもつて副先鋒となし、幫源洞の大内御林の軍馬一萬五千騎、戰將三十五人を隨へて、自ら戦を決せんと已に用意をなしにけり。抑此方杰は方臘が姪にして、歙州の皇叔方屋が孫なり。萬夫不當の勇有つて能く方天畫戟を使ひ、至る所敵する者なし。此度宋兵方屋を殺したるを聞いて大に怒り、正に讐を報はんとす。抑又此杜微と云は、元是歙州山中の鐵匠なるが、よく六口の飛刀を使ひ萬夫不當の勇有るとかや。此時方臘は別に御林護駕の都教師賀從龍に、一萬の兵を差添歙州を救はしむ。去程に宋江が大軍睦州を離れ、水陸の兩所より清溪縣へ馳向ふ。宋江は吳用と馬を並べて同行し、馬上に在つて議して云、此度清溪幫源の兩所を攻取んに、方臘早く知らば深山に隠れも測がたし。其時誰か一人見知る者なければ、遂に賊首を生捉にすること能はざらん。然る時は京に歸つて、何を以てか天子の面前に引渡さん。かならず裏に應じ、外に合する計を用ひて、方臘を擒にすべし。向には柴進燕青を遣はしけれ共、いまだ其消息を聞かず。今又別に人を遣はし、詐り降らしめんしかず。何人を遣はしてか可ならんや。吳用が云、某か愚意に因に、水軍頭領李俊等を遣はし、船中に多く兵糧米を積ましめ、是を獻じて詐り降らしめば、此計必ず成るべし。方臘はもと山僻の小人なれば、多くの糧米を獻すと聞かば、必ず疑はずして味方に加ふべし。

宋江が云、軍師の高見きはめて明かなりとて、其夜戴宗を召して委しく説示し、水軍の頭領李俊等に傳へしむ。されば戴宗は李俊等に委しく計を授けければ、李俊等謹しんで承はり、先づ阮小五阮小七を船公の形に出立せ、童威童猛を水手となし、六十艘の船に多くの米を積あげ、大溪より揺出し已に清溪に近付んとするに、忽ち南國の戰船四方より搖來り、雨のごとく矢を放てば、李俊船端に出て大に叫んで云、我らは是糧米を南國に獻じて投降するの人なり、萬乞我等を麾下に加へ給は、何の幸か是に過ぎんと高らかに呼ばはれば、船上の軍卒遙に李俊等が船を見るに、何も軍器もなき體なれば、則ち制して矢をとめ、人を遣はし委細を問はしめ、船中の糧米を點見し、婁敏中に報じて云、宋兵李俊兵糧を獻じて投降ると。此時婁敏中委しく問て、李俊を帳下に召出し問て云、汝は是宋江の麾下に在つて何の職をなし、今又何の爲に我に降参するや。李俊拜し畢て答て云、某姓は李、名は俊、もと潯陽江上の者なるが、始め江州の法場を刎し、宋江の命を救ひしに、今朝廷の命を承て先鋒と成つてより、前日の恩を忘れ屢某を辱しむ。宋江今已に州郡を得ること多しといへ共、麾下の良將次第に亡ぶ。然るを進退をしらず、猶以て某を辱しむ。是を以て恨骨髓に徹す。今わざと潛に糧米を盗み來つて大國に獻す。萬乞某等を麾下に止め給は、永く忠勤を勵むべしと告げれば、婁丞相も是を信とし、則ち李俊を内裏につれ來つて、方臘王に朝見せしめ、兵糧を獻じ降参するよしを奏しけるに、方臘も坦然として疑す、李俊、阮小五、阮小七、童威、童猛をして清溪の水塞を守らし

め、近日宋江の兵を打退くるを待ちて、各賞賜有るべしとのことなれば、李俊らは拜謝して各水塞を守りけり。去程に宋江は吳用と共に分調をなし、まづ關勝、花榮、秦明、朱同の四將を先陣となし、清溪の界に進ましめけるに、早くも南國の皇姪方杰が兵に出合ければ、兩軍互に喊を作り、南軍の陣中より方杰戟を横たへ馬を出せば、杜微歩行して後にしたがへり。彼杜微身に鐵甲を着し背に飛刀を隠し、手に七星劍を携へたり。宋江の陣中より、秦明眞先に馬を出し、狼牙棍を舞して、方杰と戦ふこと三十餘合にして、いまだ勝負を分たず。方杰は心中に秦明の手段勝れたるを知りければ、自ら平生の本事を遣て少も空閑を使はず。秦明も又秘術を盡し猶戰ふこと三十合、豈料らんや、杜微は方杰の秦明に勝ざるをみて、忽ち飛刀を秦明の臉の上へ飛し來れば、秦明急に避る時、方杰其間を伺うて只一戟に、秦明が脇の下を突ければ、忽ち馬より落ちにけり。憐むべし鬼神に勝る秦明も、南柯の一夢となりける。正に是由來霹靂動三天、地一到、此寂然無一聲。此時方杰は再び戟を以て秦明をめぐり、猶も近く攻來る宋軍の小卒、撓鉤を以て秦明が屍首を取り、本陣に歸りければ、宋兵悉く色を失ひ哭かぬ者はなかりける。宋江先づ棺槨を備へ、屍首を假に葬らしめ、再び軍將を出だして戰はしむ。此時方杰は勝に乗つて眞先に進み、高聲に宋兵誰か我に敵する者あらんやと呼はれば、宋江聞て、急ぎ軍前に出て望むに、方杰の後に龍鳳の旗風に翻り、鐵斧畫戟林のごとく建連ね、黃羅傘の下白馬に乗つたるは、草頭天子方臘なり。頭に日月冠を戴き、身に九龍袍を着し、自ら

戦ひを挑み、宋江を見、方杰に命じ捉へしめんとす。宋江も又準備して是を迎ふ。此時方杰馬ををどらせて陣前に馳出でんとせし時、忽ち飛馬來つて報じけるは、御林の都教師賀從龍軍馬を領し欽州に向ひしが、宋兵の先鋒盧俊義に生捉にせられ、人馬ことごとく四方に散亂し、宋兵勝に乗つて已に山後迄攻來れりと告げれば、方臘大に驚き先づ軍を收めて大内を守らんことを命じければ、方杰杜微と同じく御駕を守り、兵馬を回し清溪の界まで至りしに、清溪城中には喊の聲大に發り、火の光り天地を焦すばかりなり。是元より李俊、阮小五、阮小七、童威、童猛等が火を放つなり。時に方臘大に驚き御林の軍馬を勸めて、城中の火を救はんと已に城下に至りけるに、早くも城上に宋軍の旗號なれば、あきれ果てを控へたり。されば宋江の兵馬は南兵の退くを見て追かけしが、清溪の界に至つて城中に火の起るを見、心中に李俊らが事を行ふを知り、急に兵馬をまねきよせ一圓に攻寄たり。此時盧俊義の兵馬もはやく山を越えて入り來れば、宋江が兵と會合し宋兵宛も潮の湧がごとく、四面八方より、清溪城を攻圍む。此時方臘は四方に敵を請しかど、方杰が祐を以て漸幫源洞中に入りにけり。正にこれ縦是逃龍潭又如入虎穴。去程に宋江が大軍清溪城を攻破り、方臘の宮中に亂れ入り、我先にと火を放ちければ、方臘の宮中および金銀器物に至るまで、一時の灰燼とうせにけり。此日宋江、盧俊義は兵を合はして清溪に屯し、軍兵を算ふるに、郁保四孫二娘は杜微飛刀を以て突殺し、鄒淵杜遷は亂軍の中に射殺され、李立、湯隆、蔡福は各重傷を被り癒すして終に死し、阮小五は先達

て清溪城に於て、婁敏中に殺されたりと。此時諸將は南國の偽官九十二人を生捉て、宋江の前に引渡すに、婁敏中杜微見えざれば、人を分つて尋しめ、且生捉たる偽官を盡く、張招討の軍前に引渡し首を斬、又榜を出して百姓を安んせしむ。されば次の日百姓來つて告げるは、婁敏中は阮小五を殺すによつて、宋兵已に清溪城を打破ると聞て、自ら松の樹に縊れ死し、杜微は彼が情熱の妓、王喬々といへる者の家に隠れしを、杜老に欺かれ生捉れ、只今引渡せりと告げれば、宋江厚く杜老を賞し、蔡慶に命じ婁敏中が首を斬しめ、又杜微の腹を割き肝を取り、秦明を肇清溪に戦ひて亡びたる諸將の靈を祀り、香を炷て追福懺なりけり。有左程に次の日宋江盧俊義と共に、大軍を以て幫源洞を圍ましむ。洞中には方臘針の氈に座するがごとく、數日を経て只だ洞口を守らしめ出で戦はず。或日方臘まさに憂悶せし處に、忽ち殿下に錦衣を着せし一大臣あり。金階の下に伏して奏し云、我王、臣不才たりといへども、主上の聖恩を蒙ること久し。今一支の軍馬を借し給はば、某平生學ぶ處の兵法により、又習ふ處の武術を以て立處に宋兵を退ぞけ、國祚を中興せんはいかんと述べければ、方臘誰なるやと是を見るに、東床附馬主爵都尉柯引なり。方臘是を聞いて大に悦び、先づ錦袍名馬を柯引に賜ひ、早く戦功を立つべしとありければ、柯引其儘雲壁を後へに隨へ、皇姪方杰と同じく御林の人馬一萬を引具し、幫源洞を出て陣を取り、此時宋江は軍馬をして洞口を圍ましめ、自ら陣中に在つて往事を思ひ、多く兄弟の輩を失ふといへども、未だ方臘を捉へざれば、只悶えて在りけるに、忽ち洞中の軍馬出

で來つて戦ひを挑むと報じければ、急ぎ盧俊義と共に馬に打ちのり、諸將に命じて陣勢を列ねしむ。其時南軍の陣中より、柯引披甲眞先に馬を出だす。宋の軍中には是を見て、誰か柴進なることを知らざらんや。其時宋江は花榮をして是を迎へしむ。花榮は命を得て馬を跳せ鎗を挺へ、高聲に罵つて云、汝逆賊いかなぞ天兵に對し抵敵や。もし今降らずんば、汝を捉て肉泥となさん。柯引が云、我は山東の柯引なり。誰か大名をしらざらん。汝梁山泊の草賊等何ぞ我に敵せんや。今汝等を殺し盡し、我城地を復するなりと、云も竟らず鎗を燃て突き來れば、花榮も又鎗を燃て相迎ふ。されば兩將戦かふこと三十餘合にして、未だ勝負を分たず。此時柴進低聲に云、兄長僞て負給へと。花榮心得て少しく戦ふこと二三合にして、馬を返し敗走す。柯引大に喝して云、敗將あわつることなかれ。我汝を追はず。再び我と戦はんと思ふ者あらば、出で來るべしと。此の時花榮は本陣に歸つて、宋江盧俊義に告ぐ。吳用傍に在つて云く、再び關勝を出だして戦はしめよと。此時關勝馬を跳せ青龍の偃月刀を舞し大に罵つて云、山東の賊將我大刀を試むべしと、云ひも竟らず打つて蒐れば、柯引も又鎗を挺へて相迎へ、兩將戦ふこと五六合にも及ばず、關勝も又僞て敗北す。此時柯引は猶も大に呼ばはつて云、再び猛將あらば出で來れと。宋江又朱同を出だして戦をなさしめけり。

魯智深浙江に座化す 其一

美髯公朱同戟を提げ、柯引と戦かふこと七八合、又僞て逃げければ、柯引馬を飛ばし追來り、鎗

を擧げて空を一突衝。朱同馬を乗り棄本陣に逃げかへれば、南軍先づ一匹の良馬を取る。此時柯引南軍を招き勢ひに乗じ切來れば、宋江僞り負て退ぞくこと十餘里にして陣を取れば、柯引も又追ふこと五里ばかりして兵を收め、洞中に引き退ぞく。此の時南軍中の人、柯引が英雄なること、宋江が猛將かはるく戦へども皆逃げ退ぞき、後は宋江迄恐怖して數里を逃げ走り、總崩れとなりたるよし、方臘に告げる故、大に悦び先づ美々しく宴をひらき、柯引を自ら後宮に請ひ、金杯を呈げ勸めて云、料らざりき鮒馬は是文武兼備の人ならんとは、朕もしはやくかくのごとき武藝鍛鍊の英雄なるを知らば、多くの州郡を失ふまじ。今より力を竭し、朕がために基業を復せば、寡人と同じく萬歳の富貴を享んとて、先づ杯を與へければ、柯引謹んで頂戴し又奏して云、主上必ず安堵し給ふべし。臣力を盡し再び國祚を起さん。明日主上自から山上に上つて、臣が宋江を切退くるを見たまへ。且宋江が部將に降參の者多かるべしと告ければ、方臘大に悦び其夜は深更に至る迄、大に酒宴を催ほしける。されば翌日方臘自から勅して、牛馬を宰殺さしめ飽まで三軍に食せしめ、各衣甲を着せしめ、洞口に出で金をならし喊を作り戦ひを挑ましめ、方臘自から近臣を隨がへ、幫源山上に打ち上り、戦ひの様を伺ひける。此日宋江諸將に令して云、今日の戦ひは常と同じからず、汝ら各心を盡して方臘を生捉べしと。又令して云、南軍陣上に柴進が馬をかへすを見れば、其時齊しく洞中に切り入るべし、令に違ふこと有るべからずと。三軍謹しんで令をうけ、各方臘を生捉んと拳を撫てぞ待ちにける。時

に宋江諸將に命じ、陣勢を列ねしめ、遙かに南軍を望むに、柯引真先に馬を出だし、戦はんとする時、皇姪方杰馬を跳せ鞍を横たへ止めて云、柯鮪馬少しく待ち給へ。先づ某が宋兵一人斬て後に向ひ給ふべしと。宋兵は南軍を望むに、燕青は刀を帯て柴進の後へに隨がへば、今こそ計のなるべきと、各用意をなしにける。去程に方杰は真先に馬を出せば、宋軍より大刀關勝馬を縦ち青龍刀を舞し來つて、方杰と相戦ふ。一來一往戦ふ事三十餘合にして未だ勝負を分たず。宋軍の中より花榮是を見て、方杰の後より打蒐れば、方杰は兩將を向へ少しも恐るゝ色なく、又戦ふこと七八合に至りける處に、又朱同李應の二將馬を並べ馳向へば、方杰は四將を迎へ叶はじと馬を回し、本陣にはせ返るを、柯引馬を横へ相止め、手をあげて宋將を相招けば、關勝、花榮、李應、朱同の四將馬を飛ばして追來る。此時柯引は手中の鎗を取直し、方杰を目がけ突懸れば、方杰大に驚き馬より飛び下り、急に身を遁れんとする間もなく、柯引に只一鎗に突かれけるを、燕青早く飛來り、頓て首を刎にけり。此時南兵大に駭き、各命を逃れんと四面八方へ散亂す。扱も柯引と云しは假の名なり。實は宋將小旋風柴進なり。雲奉尉と呼ばれし是又同僚なる浪子燕青なり。能く洞中の案内を知つて、方臘を生捉にするものあらば、高官に取り立つべし。又今日降參するものは命をゆるさん。逆らふ者は首を切らんと云ひ畢つて馬をかへし、四將と同じく大軍を引きつれ洞中に亂入す。されば方臘は近臣と同じく山上に有りて望しが、此體を見て大に驚き、忽ち金交椅を蹴倒し、深山の中に逃れける。

扱も宋江は大軍五隊に分れ洞中に亂入り、皆我先にと方臘を搜せども更に行踪知れず。先づ近臣を生捉にす。此時燕青は心腹の人をつれ、庫中に亂れ入りて金銀財寶を奪ひ、禁苑に火を放たしむ。柴進は東宮に入りて見るに、金芝公主は已に縊れ死す。其餘は盡く逃失けり。宋兵は思ふまゝに深宮に亂れ入り、嬪妃を殺し或は皇親を生捕、猶も方臘の行踪を尋ね索む。此時阮小七は深宮に馳入りてあたりを見るに、一ツの箱あれば是を抜き見るに、方臘が作らしめたる平天冠袞龍衣にて、各金銀を以て鑲たる物なれば、阮小七思へらく、我試に是を着せんも苦しかるまじとて、自ら平天冠を戴き、袞龍衣を着し馬に打ち乗り、宮前に馳出づれば、宋兵早く是を見て方臘なりと心得しかば、各生捉んと立ち寄れば阮小七なりければ、各笑を催しける。此時童樞密に従がひ來る大將、王稟趙譚は、三軍の笑を聞て何事やらんと來り見るに、阮小七は平天冠を戴き、袞龍衣を着して戯れて在りければ、兩將大に罵りて云、汝も又方臘を學んで、逆反をなすやと。阮小七是を聞きて大に罵りて云、汝ら二人の小人、思ふに何の事をかなすや。若し我宋公明あらざる時は、汝兩人の首は早く方臘がために切らるべし。何ぞ人を侮ることの甚だしきやと叫びければ、兩將も又大に怒り、各鎗を取直し、阮小七も小狡の持ちし鎗を奪取て、兩將を邀へんとす。此時呼延灼此を見て、身を横たへて相止む。宋江吳用も又馬を馳せ飛ばせ來り、阮小七を喝して違禁の衣冠を脱しめ、王稟趙譚に託言す。されば王稟趙譚も宋江等に取りさへられ、暫し顔ばせを和らぐといへ共、遂に恨の端を結びけり。此

日精源洞中には屍積んで山をなし、血は流れて川をなす。宋江再び命じて火を放たしむるに、折しも狂風起り、今迄建て列ねたる龍樓鳳閣も、一時の焦土となりにけり。此時宋江兵を洞口に屯し、生捉の人数を査照するに、只賊首方臘を捉へざれば、當地の百姓等に命じ、若し方臘を捉へ來るものは朝廷に奏し官を賜ん。其在所を訴へる者には、黄金一千兩を與へんと命を下す。されば百姓らも皆方臘が行跡を尋ねんと、四方八面遠近に限らず索めける。去程に方臘は精源洞山上より、深山を望んで嶺を越え、林を過ぎて命を限りに走りけるに、赭黄袍も人の見咎めんことを恐れ、脱捨夜通しに五つの嶺を越え過ぎて、溪の邊に至りけるに、向うに一つの草庵あり。此時方臘は且飢且疲れて一足も引けざれば、庵中に至つて休まんと、松の樹の邊を過ぎけるが、忽ち一人の大和尚一禪杖を振り上げて、方臘を打倒し一筋の索にて禁めける。是れ則ち花和尚魯智深なり。此時智深は方臘を縛て草庵に至り、飯を食して山下に引き渡さんとせし處に、宋江の軍兵ども、方臘を尋ねて山に入り來るに逢ければ、共に方臘を引き渡して、宋江の軍前に至りければ、宋江は魯智深が方臘を生捉しを見て、且駭き且悦んで、則ち問うて云く、吾師いかにして賊首を捉へ、今迄又何れにありしや。魯智深答へて云く、某烏龍嶺の合戦に夏侯成を追ひかけ、深く山中に入り、遂に彼を打ち取るといへ共、道を失なひ廣野の地に至りしに、忽ち一人の老僧に遇ひしが、某を庵中につれ歸り分付て云、米穀及び菜蔬の類此處に多く貯へ置きたれば、只此處にて時を待つべし。もし大なる男有りて此處に至らば、捉ふべしと有りける故に、此處にて日を送りしが、昨夜山前に大いに火の光を見れ共、何れの地とも云ふことをしらざりしに、今朝此賊林の邊を過ぐるに依つて、只一禪杖に打倒し、一筋の索にて縛しに、料らずも是方臘なり。宋江が云く、彼の僧今いづくにかあるや。魯智深答へて云く、僧は向に某を庵中につれ返り、柴薪を與へ何れへ去りしや、其行く所をしらず。宋江が云く、知るべし、是羅漢の化身、靈を現はし、我師をして大功を立てしめしならん。我京に返らば天子に奏し、師を還俗せしめ官人となし、永久に富貴を保たしめん。魯智深答へて云く、某の心已に死灰に等し、官人となることを願はず。只清淨の地を揀んで天年を終るべし。宋江が云く、吾師已に官人たることを願はざれば、名山大寺を住持して長く宗風を輝すべし。魯智深首を揮つて云く、すべて願はず。只此の儘にて死せん事を願ふのみと。此時宋江かさねて、魯智深に出身を勸むれども都て願はざれば、自ら悦びず、先づ方臘を陷車に載せ、東京に引き渡さんと、次の日三軍に下知して諸將を連れて、精源洞を打ち出で、睦州に回りける。魯智深が事は次の卷に通じて見るべし。

此卷に皇姪方杰の字は舊く支那人の名に用ひ、字義は豪傑の傑の字と同じすぐるゝなり。

九編卷之九

魯智深浙江に座化す 其二

斯説宋朝の張招討は劉都督、童樞密、并びに従ひ來りし王、趙の兩將と同じく、睦州に在つて兵馬を合せ集めけるが、宋江方臘を引渡さんとて睦州に來ると聞き、各郭を出て相迎へ、宋江がために慶賀を述。張招討が云く、將軍今邊塞の苦勞詞に盡し難しといへども、今すでに大功を立て豊萬幸ならずや。宋江再拜し且涕泣を拭ひ難ていはく、肇某等一百八人逸を亡ぼし、田虎王慶を討ち平らげ、京師に回りし時は只一人も損せず、此度は未だ京を出でざる向に公孫勝と別れ、楊子江を渡りて後は、十にして、七八の大將を失ひ、今倅ひに某存すといへども、何の面目有つて山東の父老にまみえんや。張招討がいはいく、先鋒必らず心を勞することを歌よ。古へより貧富壽夭は前生の住定なり。今諸將を失ふを以て恥となすべからず。親方に戰死あれば、敵方討死尙多し。今日功成り名遂主上具に知り給は、必らず厚く官爵を封じ給ふべし。錦を着て古郷に歸らば、誰かこれを羨まざるものあらんや。縦ひ不幸にして衆に先だちて戰死するとも、芳名は竹帛にしなして千歳につたへ、子孫は擧られて祭禮香華の供養を缺すんば、武夫の本望たるべしと、こまやかに慰めければ、宋江拜謝してしばし休息

をなしにけり。されば張招討は盡くに令して、生捉にせし賊徒の内囚車の方臘壹人は京に引き渡さしめ、其餘の從賊は盡く睦州において死刑に行はしむ。こゝに衢發二縣の賊人らも、方臘すでに亡ぶと聞いて、各四方へ逃うせける。張招討の計らひに、降參する者は死を免して良民となし、産業をなさしめ、また榜を出して百姓を安んせしめ、諸事の成敗畢りければ、睦州において太平宴をまうけ慶賀をなし、東京に回るの用意をなしにけり。扱宋公明は自ら往事をおもひ、多く兄弟の輩らを失ひしことを傷んで、洒然として涙にくれ、また杭州に在つて病に染し、張横等六人の消息を聞かしむるに、只楊林一人のみ恙がなく、残る五人はすでに死亡し、看病してありける朱富穆春も、朱富は死し穆春のみ恙がなしと告げれば、宋江自ら悲泣にたへず、先づ追福の爲めにとて、睦州の寺院に於て、七晝夜の法事をなし、張横、穆弘、孔明、朱貴、白勝、朱富が亡靈を慰さめけるに、生残りし楊林穆春は、宋江より來りし使ひに消息を聞き、一所に歸京せんとて宋江が陣に至りける。又宋江は陣中にて亡びし人の屍を假に葬りしは改めて禮を以て安葬せしめ、又吳用と共に烏龍廟に詣りて香を炷享祭し、性を供へて、神明救護の恩を拜謝し、陣に回つて盧俊義と共に軍馬を取りかたづけ、張招討に従つて杭州に回り、勅狀の下るを相待つに、次の日軍馬を發すべしと有りければ各發足なしけり。扱も宋江が部下の諸將ともに都て一百八人と聞えしも、三十六人のみ存世す。其人々には、

- 呼保義 宋江
- 玉麒麟 盧俊義
- 智多星 吳用

大 刀 關 勝
 小 李 廣 花 榮
 美 髯 公 朱 同
 神 行 太 保 戴 宗
 混 江 龍 李 俊
 神 機 軍 師 朱 武
 混 世 魔 王 樊 瑞
 神 算 子 蔣 敬
 獨 角 龍 鄒 潤
 小 遮 欄 穆 春
 鼓 上 鱗 時 遷
 豹 子 頭 林 冲
 小 旋 風 柴 進
 華 和 尚 魯 智 深
 黑 旋 風 李 逵
 活 閻 羅 阮 小 七
 鎮 三 山 黃 信
 轟 天 雷 凌 振
 鬼 臉 兒 杜 興
 一 枝 花 蔡 慶
 出 洞 蛟 童 威
 小 尉 遲 孫 新
 雙 鞭 將 呼 延 灼
 撲 天 鵬 李 應
 行 者 武 松
 病 關 索 楊 雄
 浪 子 燕 青
 病 尉 遲 孫 立
 鐵 面 孔 目 裴 宣
 錦 豹 子 楊 林
 鐵 扇 子 宋 清
 翻 江 蜃 童 猛
 母 大 蟲 顧 大 嫂
 此 日 宋 江 は 諸 將 と 同 じ く 睦 州 を 離 れ、 杭 州 を 望 ん で 進 發 す。 正 に 是 金 鼓 千 山 に 響 き、 旌 旗 十 里 に 紅 な り。 さ れ ば 三 軍 す で に 杭 州 に 着 け る が、 城 中 に は 張 招 討 の 兵 馬 屯 せ し か ば、 先 づ 城 外 の 六 和 寺 に 本 陣 を 定 め て 諸 將 を 休 ま し め、 宋 江 盧 俊 義 と 同 じ に、 朝 夕 城 中 に 至 つ て 令 を 聞 く。 さ れ ば 魯 智 深 も 武 松 と 同 じ く 六 和 寺 の 後 へ の、 僧 房 に 宿 し け る が、 江 山 の 景 色 他 所 よ り も 増 り け れ ば、 兩 人 大 い に 悦 び、 又

此 夜 月 明 ら か に 風 清 く し て、 眞 に 秋 水 長 天 と 共 に 一 色 と い へ る、 王 子 安 が 句 も 思 ひ や ら れ て 面 白 し。 二 人 は 二 更 の 頃 ま で 月 を 賞 し、 各 房 中 に 入 り 眠 り て 三 更 に 至 り し に、 江 上 の 潮 聲 ひ き て 雷 の こと し。 元 よ り 魯 智 深 は 關 西 の 人 に し て、 浙 江 の 潮 信 を し ら ざ れ ば、 是 を 聞 い て 大 い に 驚 き 思 へ ら く、 是 必 ら ず 戰 争 の 聲 な り、 賊 人 再 び 寄 來 る に 疑 ひ な し と て、 手 に 禪 杖 を 取 つ て 駈 け 出 で ん と せ し か ば、 寺 内 の 僧 徒 大 い に お どろ き て 問 う て い は く、 師 父 何 れ へ 行 き 給 ふ や。 魯 智 深 が 云 く、 我 ま さ し く 戰 争 の 聲 を 聞 き 出 で て 敵 を 迎 へ ん と す。 僧 徒 大 い に 笑 ひ 答 へ て い は く、 師 父 い ま だ 知 り 給 は ざ る や。 此 浙 江 の 潮 信 な り。 智 深 奇 し ん で 云 く、 潮 信 と は 何 事 ぞ や。 此 時 僧 徒 窓 を 披 き て 江 上 を は る か に 指 さ す に、 潮 水 山 の 如 く に 湧 來 り、 そ の 聲 あ た か も 戰 鼓 の ひ き き に 等 し。 僧 徒 の い は く、 此 潮 信 日 夜 に 二 度 づ つ 來 る に、 滿 干 の 時 刻 を 違 へ す。 今日 は 此 八 月 十 五 日、 たゞ 今 は ま さ に 三 更 の 頃 な る べ し。 信 を た が へ ざ る を 以 て 潮 信 と は 申 す な り と 告 げ れ ば、 魯 智 深 き、 終 つ て 忽 然 と し て 大 悟 し、 掌 を 打 つ て 笑 つ て 云 く、 我 師 智 真 長 老 む か し 我 に 四 句 の 偈 を さ づ く。 夏 に 遇 う て 擔 に す と は、 烏 龍 嶺 の 戰 ひ に 夏 侯 成 を 生 捉 に し 臘 に 遇 う て 執 ふ と は 方 臘 を 生 捉 な り。 又 潮 を 聽 て 圓 し 信 を 見 て 寂 す と は、 今日 の こと な る べ し。 知 ら ず 圓 寂 と は、 何 こと ぞ や。 僧 徒 答 へ て い は く、 師 は 出 家 な る に い ま だ 圓 寂 と い ふ こと を 知 り 給 は ず や。 佛 門 中 に て 人 の 死 す る を 圓 寂 と 申 す な り。 魯 智 深 笑 つ て い は く、 已 に か く の こと ぐ なら ば、 我 たゞ 今 圓 寂 す べ し。 汝 ら 我 た め に 湯 を 焚 來 る べ し と。 此 の 時 僧 徒 は 是 戲 れ な り と は お も へ ど も、 又

魯智深のこゝろに逆はんことを恐れ、則ち湯を焼て法堂中に持ち来る。此時魯智深自ら洗浴し終つて、天子より賜はりし僧衣を著し、また人を宋先鋒の處へつかはし此よしを知らしめ、寺僧に紙筆を求め一篇の頌を書し、自ら禪椅に上つて、左の足を右の足の上にのせ、一爐の香をたき、虚空に向つて禮拜し、双の眼を閉畢る。此時宋江は寺僧よりの知らせを聞いて、諸頭領と共に急ぎ來るに、智深は禪椅に上つて動かさず。一篇の頌あれば取上げて是を讀むに、是智深が自筆なれば、宋江を初めとして各奇特の思ひをなし、且つ讀且つ感じて驚歎せざるはなかりけり。其頌に曰く、

平生不修善果

只愛殺人放火

這裏扯斷玉鎖

忽地頓開金繩

唵錢唐江上潮信來

今日方知我是我

此時宋江盧俊義と共に頌を讀終つて嗟嘆しやまず、各香を炷て禮拜せり。扱も城内には張招討童樞密を始めとして、多くの官人も各此由を聞いて不思議のおもひをなし、急ぎ來つて禮拜す。宋江自ら金帛を一山の僧にあたへ、三晝夜の法事をなさしめ、又朱紅の龜に智深の屍首を入れて、徑山寺の住持大惠禪師を始めとして、諸山の諸知識を請て經をよみ引導なさしめ、六和寺の後山に於いて火葬させしめけり。此時徑山の大惠禪師は左の手に念珠を取り、右の手に火把を取り法語を唱へて云く、

魯智深魯智深

起身自緑林

兩隻放火眼

一片殺人心

忽地隨潮歸去

果然無處跟尋

咄々

解使三溝空飛白玉

能令大地作黃金

導師大惠禪師は唱へ終つて火把を投げれば、一山の僧徒及び諸知識もことごとく經をよめば、宋江盧俊義を始めとし、諸頭領及び童樞密に従ひし朝廷の諸官人等も、各香を炷て禮拜し、涙を流し隨喜の思ひを催せば、城中の百姓人民らも、追々此よしを聞いて老若男女皆我れ先にと六和寺の後山にあつまり、同様に是を拜しけり。されば火葬已に終り骨を拾うて塔に收め、魯智深の着せし衣鉢及び朝廷より賜はる金銀は、多くの僧徒に布施し、鐵の禪杖并びに皂布の直覆は是を寺中に納めけり。此時宋江は武松を呼出すに未だ死せずといへども、已に癡人となりければ、車を以て京に送り、朝觀せしめん

と欲すれども、武松已に官人たることを願はず、朝廷より賜はる所の金銀を、盡く六和寺に收め陪用金とし、自ら無役の道人となつて、のち八十歳に至り、天年を終りけるとなり。去程に宋江は毎日城中に伺候して在りけるが、十餘日を経て京師より勅使杭州城へ着駕ありければ、張招討を始めとして諸將勅使を城中へ迎へ奉つり、勅狀を伺ふに、先鋒宋江并びに中軍の人馬各列を分かち、京師に返るべしとの令なれば、張招討次の日童樞密、劉光世、從、耿の二參謀并びに大將王稟趙譚と共に、宋江に別れを告各勅使に従ひ、京師をさして發駕ある時に、忽ち楊雄は背の瘡を憂へて死し、時遷は胸痛を憂へて死したりと告げれば、宋江自ら傷むに堪ず。其時また丹徒縣より使ひ來つて、楊志已に死して本縣の山中に葬れりと告、又林冲風病に染で總身麻木たりと告げければ、宋江急ぎ軍卒に命じ、林

冲を六和寺に送り武松をして看病せしむ。されば林冲は其病遂に癒ること能はず、後半年を経て六和寺に死しけるとぞ聞えし。宋江諸事全く終りければ、盧俊義と共に次の日杭州を發せんと、已に人馬を用意せし處に、浪子燕青密に來つて、故の主人盧俊義を勸めていはく、某幼なきより主人に隨つて恩を蒙り、遂に人となることを得たり、何ぞ一言に相謝すべき。今已に功なり名遂て退ぞかすんば、次後恐らくは危ふからん。今主人と同じく官を朝廷に還し潜に去り、跡を隠して天年を終らば、豈樂しからざらんや。主人の意はいかんとぞや。盧俊義がいはく、我汝と俱に梁山泊に在つて百戰を經、後朝廷に歸順してより、其苦楚も亦いふべからず。多くの義兄弟盡く討死すといへども、幸に我一家二人の命を全うす、今已に功成り錦を着て古郷に歸り、永く富貴を受べき時なるに、汝いかんぞ此不祥の言をいふや。燕青がいはく、主人の辭違へり。某曾て不祥のことをいはず。主人の言恐らくは不祥にあらずや。盧俊義が云く、我今まで少しの異心をなさず、朝廷いかんぞ我に背くべき。燕青が云く、主人聞き給はずや、韓信十分の功を成せども、後は未央宮に首を斬れ、彭越は肉醬となれり。英布は毒酒を飲で死せずや。禍すでに至つて後悔すとも遅からん。盧俊義が云く、我きく韓信は三齊に擅に王と稱し、陳豨をして逆反せしめ、彭越は大梁に在つて高祖に朝せず。英布は九江に任を受けながら、漢帝の江山を奪はんとす。此に依つて高帝詐つて雲夢に遊び、呂后をして是を斬しむ。我未だ彼等がごとき高官を請すといへども、又彼等がごとき罪を犯さず。燕青がいはく、主人已に某が

辭を用ひ給はずんば、恐らくは後悔あらん。某すでに志し決せり。若し宋先鋒に辭別せば義氣重き人なれば、輕々しく我を放ち給ふまじ。只此處にて主人に辭別せんのみ。盧俊義がいはく、汝我を辭して今何國に於行や。燕青がいはく、只主人の前後にあらん。盧俊義笑つていはく、かくのごときか、汝又何國へゆくや。燕青さらに答へず盧俊義を拜し、涙をばら／＼と流し其夜自ら貯へし金銀寶珠を一擔となし、自ら挑ひて遂に行方しらすなりにけり。

宋公明錦を着て古郷に歸る

扱も翌日早朝に軍卒一枚の字紙を拾ひ、是を宋公明へ呈しければ、宋江彼字紙を披き見るに、上に寫して云く、

辱弟燕青百拜懇告

先鋒主將麾下

自蒙收錄多感厚恩效死幹輔報難盡今自思命薄身微不堪國家任用情願退居山野爲一閒人本得二拜辭恐主將義氣深重不肯輕放連夜潛去今留二口號四句拜辭望乞主帥恕罪

雁序分飛自可驚

納還官話不求榮

身邊自有二君王赦

洒脫風塵過此生

宋江見終つて心中鬱々として樂しまず。扱又宋江は是まで討死せし諸將に、官爵を賜はりし勅書を箱に納め、諸將と共に軍馬を引具して杭州に進發す。去程に已に蘇州の城外に至りし時、混江龍李俊風疾に中れりと詐つて臥しければ、宋江自ら醫者を引いて病を問ひ、且消息をなさしめけり。其時宋江に謝していはく、先鋒必ず某がために朝廷に回り給ふ日限を、誤り給ふことなけれ。張招討返り給うて日已に久し、必ず先鋒を待ち給はん。先鋒某を憐み給は、童威童猛を此地に留めて看病せしめ給ふべし。近日病痊る時は、即日朝覲いたし候ふべし。先鋒はやく京に赴いて、日限を誤まり給ふことなかれと述べければ、宋江さらに疑はず、童威童猛を止めて看病せんことを懇に云付けて京師へ進發す。李俊ら三人は已に宋江が軍馬の去るを見、自ら費保を尋ぬるに、嚮の四人皆李俊を待ち居ければ、都合七人楡柳庄にして商議し、盡く家財を賣つて大船を造り、多く鹽米を貯へて大倉港より船を出し、大海に泛で外國に去りにけり。後來李俊は暹羅國の王となり、童威、童猛、費保等も盡く官人となつて榮耀をなしけるとかや。去程に宋江等諸將大軍を引具して、常州潤州を過けるに、盡く舊日の戰場なれば、傷寒に堪ざりき。昔日江を渡りし時は、諸頭領盡く恙なかりしが、今は纔になりければ、各涙を漲ぎけり。已に揚州を過ぎて淮安に近づきければ、はや京城も遠からず。其時宋江命じて、諸將をして朝覲するの用意をなさしめける。されば宋江の軍馬九月の下旬に東京に着しければ、張招討中軍の人馬、はや三日前に東京城中に入りけるよし聞えけり。其時宋江の人馬は城中に

入らず、城外陳橋驛に陣取りして、暫らく人馬を休め、猶天子よりの令を待ちにけり。此時先達て蘇州にて李俊等に付け置きし軍卒返り來つて告げるは、李俊はもと病を患るにあらず、只京に回つて官人となるを願はず、童威童猛らと共に遂に行方をしらすと報じければ、宋江も嗟嘆をなしにけり。其時宋江恩を謝するの表章を表宣に書しめ、又今京に返るの諸將都合二十七人、又王事に死する者の人數を盡く録せしめ、正將副將各列を正して、各幟頭を戴き公服を着し、たゞ聖旨をぞ待ちにけり。されば三日の後、徽宗皇帝朝廷に出で給へば、近臣奏して宋江等朝見を相待つよし告げければ、天子御准あつて翌日朝參すべき旨勅宣をぞ下し給ひけり。されば翌日東方漸明らかなる頃、宋江盧俊義を初めとして、二十七人の諸將は、各馬に打ち乗つて城中に入りにけり。是第三度の朝見なり。第一番の朝見とは、宋江初めて招安を受けて京に入りし時は、勅をうけて天子より賜る紅緑の錦の襖子を着し、金銀の牌を持たせて嚴重に装うたり。第二番の朝見とは、宋江遼兵を破つて京に歸りし時は、天子命じて、各戎衣を着しながら朝見せしむ。今度は四海も盡く平らぎ、太平の時の朝見なればとて、勅命有つて、各文人の扮にて朝見有るべしと。こゝに於て宋江を初めとして、各幟頭を戴き、公服を着し朝覲す。東京の百姓人民等は、只此二十七人のみ残りしを見て、各涙を流さるはななし。されば宋江等は正陽門にて馬より下り内庭に入るに、侍御使出來つて相迎へ、引いて玉階の下に至る。此時宋江盧俊義は諸將と共に進んで八度拜し、退いて八度拜し、中頃にして又八度拜し、三八

二十四拜畢つて君臣の禮備りければ、殿上殿下の百官各萬歳を唱へける。此時徽宗皇帝は宋江等が只二十七人のみ返るを見給ひ、心中嗟念し給ひ、先づ勅して殿上に昇らしむ。されば宋江盧俊義は謹で諸將と同じく金階にのぼり、珠簾の下に跪けば、近臣早く珠簾を捲上たり。天子則ちのたまはく、朕知卿等衆將江南を征伐し苦勞甚だし。況んや義兄弟の輩を失ふこと大半なりと、朕豈傷むに堪ざらんや。宋江頭を垂て再拜し奏していはく、臣が不才を以て、たとひ腦を碎き骨を粉にすとも、國家の感恩に報ずること能はず。昔は臣ら一百八人五臺に上つて聚義せしに、今日料らずも十に八を失へり。謹で人數を録して聖覽に備ふ。伏して望むらくは御鑑を給へと。天子宣はく、卿等の部下王事に死するもの、朕各追號を加へ、子孫を封じその功を露すべし。宋江再拜し謹んで表文を御案の上へ供へ奉つる。其文にいはく、

平南都總管先鋒使臣宋江謹上表。

伏念臣江等愚拙庸才孤陋俗吏。往犯無涯之罪。幸蒙莫大之恩。高天厚地。豈能酬粉骨碎身何足報股肱竭力離水泊以除邪兄弟同心登五臺而發願全忠秉義護國保民幽州城慶遼兵清溪洞擒方臘雖微功上達奈緣良將下沈臣江日夜憂懷旦暮悲愴伏望天恩俯賜聖鑑一使下已沒者皆被恩澤一在生者得庇洪休臣江乞歸田野一願作農民實陛下之賜臣江不勝戰慄

之至謹錄存沒人數隨表上進以聞

陣中にて亡びたる頭領五十九人、此内正將十四人

- | | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|----|----|----|----|
| 秦明 | 徐寧 | 董平 | 張清 | 劉唐 | 史進 | 索超 | 張順 |
| 阮小二 | 阮小五 | 雷橫 | 石秀 | 解珍 | 解寶 | | |

偏將四十五人

- | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 宋萬 | 焦廷 | 陶宗旺 | 韓滔 | 彭紀 | 鄭天壽 | 曹正 | 王定六 |
| 宣贊 | 孔亮 | 施恩 | 郝思文 | 鄧飛 | 周通 | 龔旺 | 鮑旭 |
| 段景住 | 侯健 | 孟康 | 王英 | 扈三娘 | 項充 | 李袞 | 燕順 |
| 馬麟 | 單廷珪 | 魏定國 | 呂方 | 郭盛 | 歐鵬 | 陳達 | 楊春 |
| 郁保四 | 李忠 | 薛永 | 李雲 | 石勇 | 杜遷 | 丁得孫 | 鄒淵 |
| 李立 | 湯隆 | 蔡福 | 張青 | 孫二娘 | | | |
- 途中に於て病を以て死する正偏將佐十八人此内正將五人、
- | | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 林冲 | 楊志 | 張橫 | 穆弘 | 楊雄 |
| 孔明 | 朱貴 | 朱富 | 白勝 | 時遷 |
- 偏將五人

杭州六和寺に於て坐化する正將一人、

魯智深

臂を折て官爵を願はず、六和寺にて出家する正將一人、

武松

京より故郷蘇州に回り、出家する正將一人、

公孫勝

官爵を願す途中より去正偏將佐四人の内正將二人、

燕青 李俊

同断偏將二人、

童威 童猛

舊京に住し、勅に依て京に回り住する偏將五人、

安道全

今度朝覲する正偏將佐二十七人の内正將十二人、

宋江

朱同

盧俊義

戴宗

吳用

李逵

關勝

阮小七

呼延灼

花榮

柴進

李應

皇甫端

金大堅

蕭讓

樂和

孫立

樊瑞

凌振

顧大嫂

杜興

偏將十五人、

朱武

宋清

裴宣

鄒潤

蔣敬

蔡慶

黃信

楊林

孫立

穆春

樊瑞

孫新

凌振

顧大嫂

杜興

宣和五年九月 日

天子表を見給ひ嗟嘆して宣はく、卿等一百八人は天の星曜に應ずる者なるに、今僅に二十七人のみ存せり。真に十の内八分を失へり。朕もまた悲しみにたへず。今其王事に没する者、正將は各封じて忠武郎となし、偏將は各封じて節義郎に改め、其子孫ある者は其子孫を京に於て官爵を授け、子孫なき亡將は各廟を建て四時に祭をなさしめん。中にも張順は靈を現し尤も功あれば、勅して金華將軍と追號し、魯智深は賊首を捉て大功あり。又終りを善す。則ち義烈照暨禪師と諡す。武松は多く敵を討て功あり。今又臂を折て出家す。則ち清忠祖師と封じ錢十萬貫を賜り天年を終らしめ、故の女將二人扈三娘を花陽郡夫人と稱し、孫二娘を旌徳郡君と封す。此度朝見する諸將宋江盧俊義兩人を除て、正將十人には、各武節將軍の號を賜ひ、諸州の統制を授け偏長たらしむ。又女將顧大嫂を東源縣君に封せんと、其官爵を賜る人々には、

先鋒使宋江副先鋒臣盧俊義等謹上表

先鋒使宋江を武德太夫楚州の安撫使を授け、兼て兵馬都統を主とらしむ。副先鋒盧俊義を武功太夫盧州の安撫使に封じ、兼て兵馬副都總を司とらしむ。

軍師吳用を武勝軍の承宣使に封す。

呼延灼を御營の兵馬指揮使に封す。

李應を中山府鄆州の都統制に封す。

朱同を保定府三山都統制に封す。

李逵を鎮江潤州府都統制に封す。

關勝を大名府の正兵馬總管に封す。

花榮を應天府の兵馬都統制に封す。

柴進を横海郡の滄州都統制に封す。

戴宗を袁州府の都統制に封す。

阮小七を蓋天軍都統制に封す。

天子悉く勅し畢て、又宋江盧俊義には各黄金一千兩、錦緞十疋、花袍一套、名馬一疋を賜り、其餘の正將には各金五百兩、錦緞一疋づつを賜ひ、偏將に金三百兩、綵緞一疋を賜りければ、宋江盧俊義を初めとして、各聖恩を謝し奉りける。正に是金鬪殿承恩者盡是功成名遂人といふべし。時に宋江又奏していはく、先達て烏龍嶺の戦に、賊將包道乙邪法をもつて萬松樹中に於、大樹を化し人の形と見せ、已に臣が軍を破り、臣らが命も危ふかりし處に、烏龍大王靈を現はし、包道乙が幻術を破り、臣が數萬の軍を救ひ、しかのみならず又夢中に屢靈をあらはし、國を護り民を保ち、且臣らが數萬の軍を救ふ。是を以て勝ことを全うす。よつて臣豫て烏龍大王に廟宇を修せんことを免せり。萬乞聖上重ねて廟宇を建立し給はば、永く國家の守護神となるべしと奏すれば、天子問て宜はく、烏龍大王とはもとの神なるやと。宋江答へ奏していはく、臣も亦初め何の神たることをしらす、彼夢中に靈を現し自ら姓は邵と説き給によつて、次の日吳用と共に萬松林より烏龍嶺の山下まで尋ねて、烏

龍大王の廟に詣り神像を拜するに、夢中に見しと其貌いさゝか異なることなし。此神は唐朝の進士邵俊といひし人落第し、江に落ちて死せしが、後竟に神と成り。此始末廟前に古碑ありて彫りしるせりと。天子此説話を聞給ひ、則ち忠靖靈德普孚祐惠龍王の號を賜ひ、御筆の額を掲げしむ。又是迄方臘が取掠めし州縣の名を盡く改ため、睦州を更め嚴州とし、歙州を更め徽州となし、清溪縣を淳安縣とし、幫源洞を鑿開き山島となし、又府庫の錢をもつて烏龍大王の廟を重修し、宮殿廊閣金銀を鏤めけり。原來江南の地方の百姓、久しく方臘が暴惡に殘害せられければとて、三年の間貢を免したまひけり。其日宋江等各恩を謝しければ、皇上また太平宴を設け、功臣及び文武の百官九卿に御酒を賜りければ、衆將も亦恩を謝しにけり。其時又奏していはく、臣が手下の軍卒梁山泊より隨ひし者討死大半に過ぎ、今また故郷に歸らんと願ふ者あり。希くは少し聖恩を賜へ。皇上奏する處を准げ給ひ、勅して軍役たらんことを願ふ者には、錢一百貫、絹十疋を賜うて、龍猛虎威の二營に遣し、毎月俸糧を賜ふ。軍役たることを願はざる者は、錢二百貫絹十疋を賜ひ、各古郷に歸らしむ。宋江又奏していはく、臣鄆城縣に生れ罪を得てより以來、自ら古郷に回らず。願はくは天子聖恩を賜ひ、故郷に回し親類を問ひ、次に楚州の任に登らば、何の榮かこれにしかん。皇上大に悦び、再び錢十萬貫を賜ひ、歸郷の資となさしめ給へば、宋江聖恩の深きを感謝し、拜辭して朝廷を退きけり。次の日中書省にて太平宴を設けて宋江をもてなし、第三日には樞密院にて宴を設けり。されば張招討、劉都督、童樞密、

從、耿二參謀、王稟趙譚二將に至るまで各厚き賜あり。去程に宋江は翌日方臘を東京の市上に引出し、凌遲に行うて、三日まで衆人に肆示しけり。時に詩ありていふ。

宋江重賞陞官日

方臘當刑受副時

善惡到头終有報

只爭來早與來遲

善事をなして賞を蒙り、官に昇り忠義を末世に稱へらるゝも、悪事を行うて人を苦しめ殘ひ、其身榮花を究る間なく刑せられ、その醜名を後代にとゞめ、善に善報を得惡に惡報の至ること只報來るの遲きと早きのみ。いづれか其報あるは必然の天理なれば、古より惡を照々に成者は、人得て是を罪し、惡を冥々になすものは、鬼得て是を罰すといへり。恐れざるべけんや。さても宋江は軍卒を召集め、軍役たらんことを願ふものは、龍猛虎威の二營に送て軍役となし、毎月俸米をあたへ、古郷に歸らんことを願ふ者には、金銀を與へて回し、宋江諸事を濟し、分派已に定まりければ、衆人に辭別して、舍弟宋清と同じく軍卒二百餘人を引率し、各御賜の金銀衣袍并に行李を荷はしめ、東京を發駕し山東へと進發す。かくて宋江宋清は各馬に打乗り、錦を着て古郷に回り、日を経て山東鄆城縣宋家村に着ければ、村中の老人親戚都て出迎へけり。宋江其日家に歸りけるに、料らずも宋太公已に死して靈柩猶家にありければ、宋江宋清大に痛哭し哀しみに堪ざりけり。其時家眷莊客都て來て宋江兄弟に拜見し、各無事を賀しにけり。されば居宅田産家財に至るまで、宋太公の存せし時より能整へければ、

各美をぞ盡けり。宋江宋清は先多く僧を請て七晝夜の法事をなし、功果を修し亡靈を薦祓しかば、當所の官人より百姓に至るまで、吊者市をなせり。遠からず日を選んで太公の靈柩を村の南なる高原の地に葬りけり。此日當所の官人より親隣の父老賓朋眷屬に至るまで、各葬りを送りけり。葬事已に終りければ、宋江又九天玄女の擁護を想ひ、願心いまだ酬いざればとて、錢五萬貫を以て工匠人に命じ、玄女の聖像を粧飾し、重ねて廟宇を建立し、宮殿兩廊各美麗を盡して落成せり。宋江は古郷に在ること月を重ねければ、天子の御限りを誤んことを恐れ、日を揀んで喪服を除き又僧を請じ懇に父母宗親を吊ひ、又宴を設て當村の郷尊父老を招き、酒を酌で間別の情を述べければ、次の日又親戚より宴を置て管待しけり。されば宋江は莊院を以て弟宋清に譲りけり。原來宋清は官爵を受るといへども、郷里に在て農を務め、先祖の吊ひをなしにけり。其時宋江は錢帛を郷里の百姓に分ち與へ、郷老に辭別し宋清をして家事を納めしめ、自ら百餘人の軍卒を引率して、再び東京に回り衆將に相見ゆ。其時衆將は家屬を引て任所に赴くもあり、京に住するもあり。又討死せる諸將は其子孫を召て、各錢帛を賜ひけり。されば宋江も中書省に住し、只勅命の下を待て在けるが、程なく任所に赴くべきよし勅命を蒙り、行李を收拾任所に赴く用意をなしにけり。宋江盧俊義らの成行次卷に詳なり。論者いはく、此一段心得がたき事有り。宋江は至孝の人にて清風山を下て諸頭領と合體し、梁山泊に往て屍蓋に投んと、大勢を催し行途中にて、石勇より宋清が書狀を得て、父太公死せりと聞き大

勢を捨て連夜に己一人古郷に馳回りしとあり。然るに太公の死は詐にて、太公が宋清に命じなさせし謀、是より宋江幾ばくの危難を経よし前に詳なり。今宋江招安の上先鋒使の職を蒙るは、其身分以前の宋江とは雲泥の差なり。宋清は家に在しめ、老父の介抱せしむべきものなり。若一同に御赦免を蒙りたる有難き其願も成がたく、宋江宋清の軍事を勤むるは、是も亦心底に任せざる處ならん。然らば縦ひ方臘を征伐して邊塞に在とも、太公の死を家來より知らせ遣はさるはいかん。況んや方臘亡びて後は、宋江に先達て都に回り來る將士も有り。都まで訃音を告ぐるとも、宋江に知れざることは有べからず。然るに宋江錦を着て古郷に歸るに及んで老父の死をしらす。宋家村の家に入て父の柩を見て聲て驚き、家來共は出て宋江が恙なきを賀し、宋江は父の病死の體を家來に問詞もあらず。他人たり共、何の病にて幾ばくの日數にて終焉しや、具に問人多し、親に孝ある人父を見ること路人のごとし。何ぞ是人情ならん。此書の作者は鄆城縣の押司宋江も罪を犯し、天下に流浪の宋江も、大宋先鋒使の職たる宋江も、一列に見るといふべし。又云く、此卷の始め百八人の内、當時存世の三十六人名前あり。青面獸楊志も此時は、死去の知らせなければ、武松と戴宗の間に名前を加へ、三十七人と有て、頼ひ丹徒縣に留るよし記すべし、作者の無念に似たり。殊に情合の行届ぬこと有ては、作り物語りの證據あまり早く見ゆ。又此卷に李俊が檣柳莊にて費保等四人に會すること有は、前の卷にも出たれども、赤鬚龍費保、捲毛虎倪雲、太

湖蛟卜青、瘦臉熊狄公四人なり。臉は腮のことぞ。此卷にも限らず、從、耿二參謀といふ文有て、方臘征伐の始より張招討、劉光世の名は出れども、參謀從氏耿氏二人隨ひ來りしこと更に見えず、名は何と云も知られず。